

911. 123-Ta59-3aウ
1200500755212



始



武田祐吉著

萬葉集新解
下

東京 山海堂出版部

911.123
TAS
3A

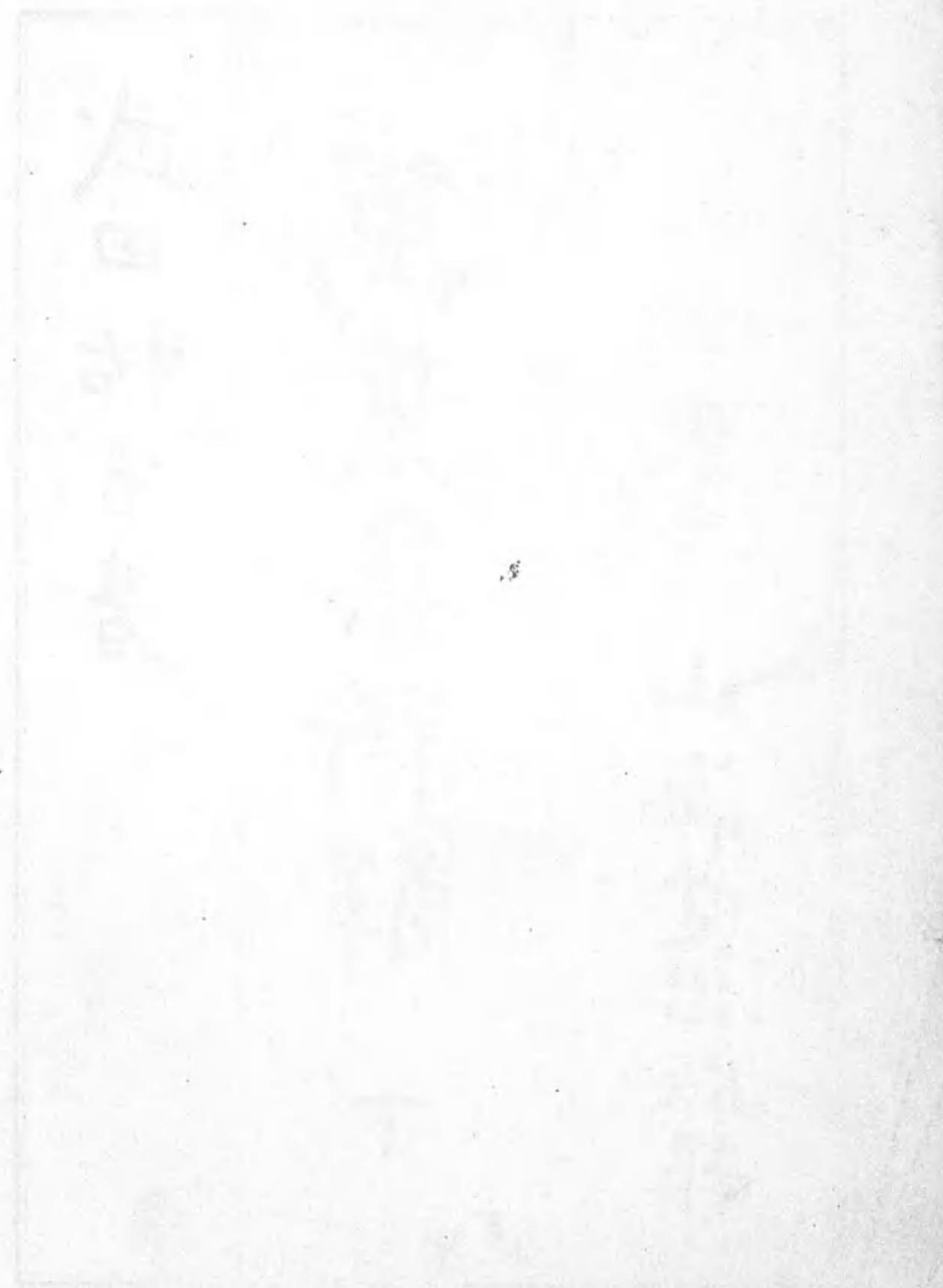


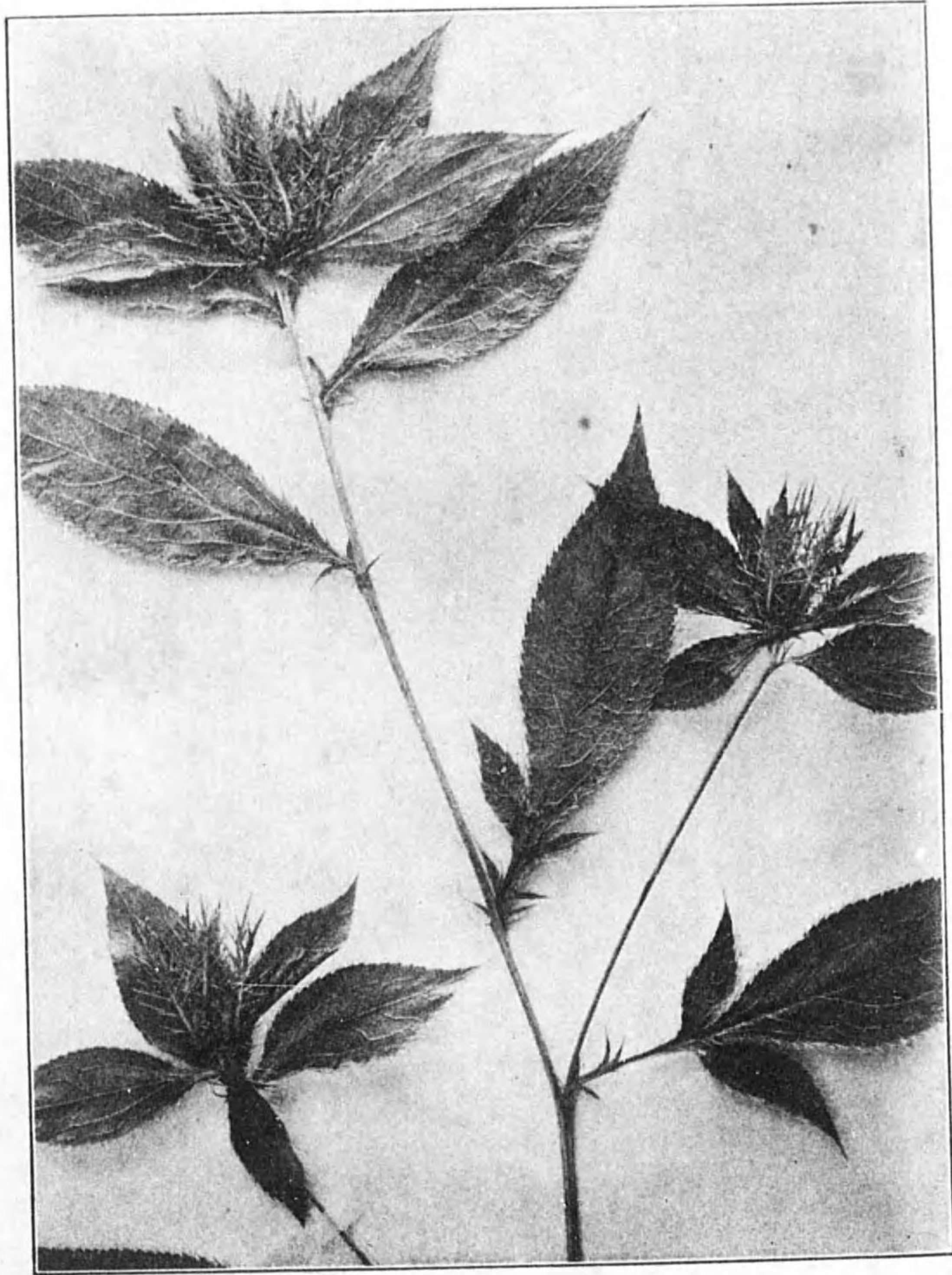
武田祐吉著

萬葉集新解

下

東京 山海堂出版部





花がらけう

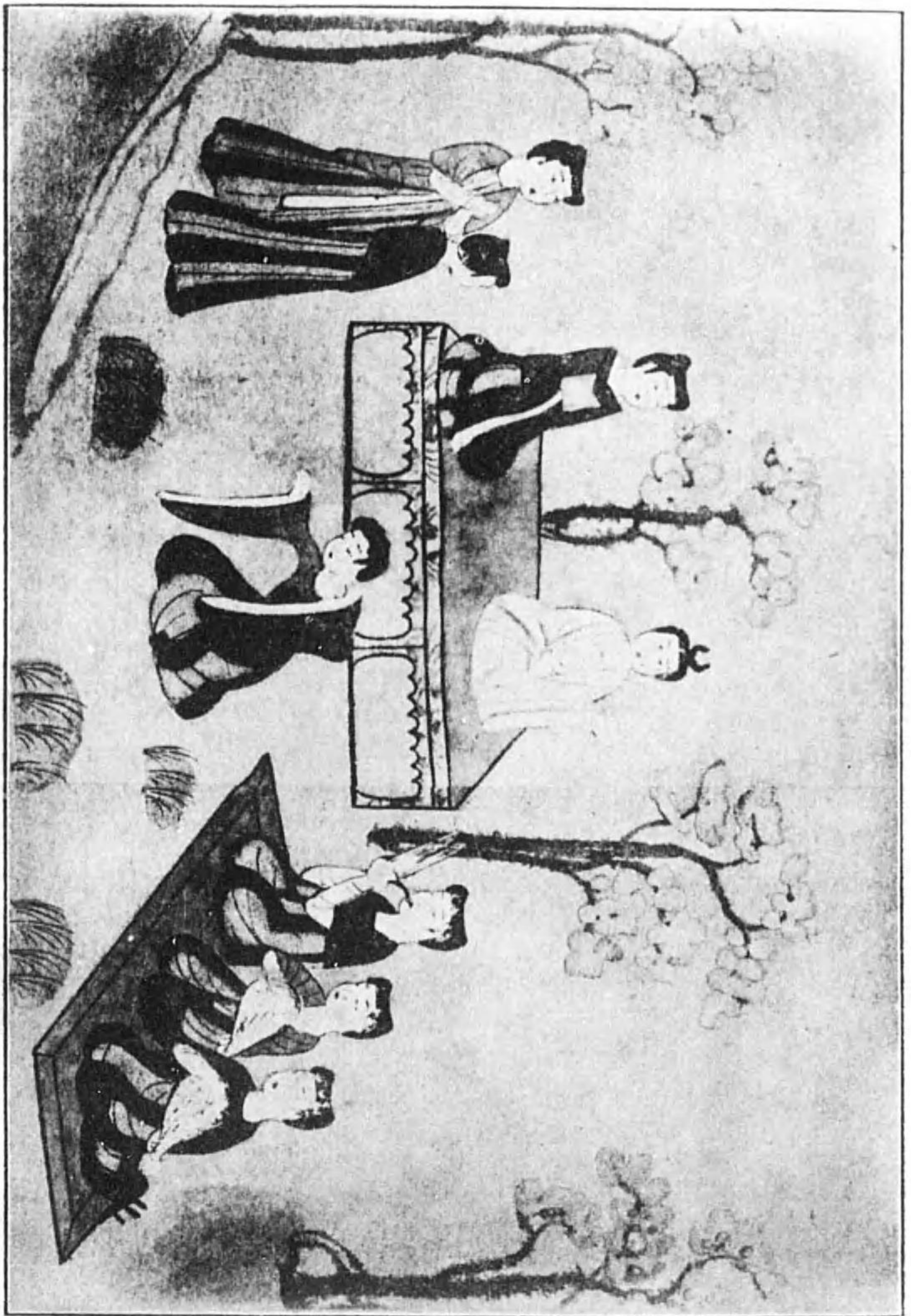


圖 踊 舞 子 娘

萬葉地圖

越中能登地方



585-137

萬葉集新解下冊目次

本文

上編 萬葉集歌史(續)……………四九七

第五章 奈良朝時代下……………四九八

一 寧樂の都……………四九九

大宰少貳小野老の朝臣の歌一首……………四九九

二 遣唐使……………五〇〇

好去好來の歌一首反歌二首……………五〇一

天平五年癸酉遣唐使の船難波を發ちて海に

入る時親母の子に贈れる歌一首并に短歌……………五〇七

春日にて神を祭る日藤原太后の御作歌一首……………五二三

阿倍朝臣老人唐に遣さえし時母に奉りて別

を悲める歌一首……………五二三

閏三月衛門督大伴古慈悲の宿禰の家にて入

唐の副使同じき胡麻呂の宿禰等を餞する歌

目次……………五二七

二首……………五二四

從四位上高麗朝臣福信に勅して難波に遣し

入唐使藤原朝臣清河等に酒肴を賜へる御歌

一首并に短歌……………五二五

三 遣新羅使……………五二八

新羅に遣さえし使人等別を悲みて贈答し及

海路に情を憫み思を陳べ并に所に當りて誦

詠せる古歌……………五二九

船に乗り海に入りての路上に作れる歌……………五二九

備後の國水調の郡長井の浦に船泊てし夜作

れる歌三首……………五三三

風連の浦に船泊てし夜作れる歌二首……………五三四

安藝の國長門の島にて船を碇邊に泊てて作

れる歌五首(一首略)……………五三五

長門の浦より船出せし夜月の光を仰ぎ觀て

作れる歌三首(一首略)……………五三七

萬葉集新解

大島の鳴門を過ぎて再宿を經たる後追ひて
作れる歌二首……………五三八
佐婆の海中にしてたちまち逆風激浪に遇ひ
漂流し經宿して後幸に順風を得豊前の國下
毛の郡分間の浦に到着す是に艱難に追ひ怛
み悽惻して作れる歌八首(七首題)……………五三〇
筑紫の館に至り遙に本郷を望み悽み愴きて
作れる歌四首(三首題)……………五三〇
七夕に天漢を仰ぎ觀各所思を陳べて作れる
歌三首……………五三一
海邊に月を望みて作れる歌九首(七首題)……………五三三
筑前の國志麻の郡の韓亭に到りて船泊てて
三日を經たり時に夜月の光皎皎として流照
せりたちまち此の華に對して旅情悽愴す各
心緒を陳べて聊裁せる歌六首(二首題)……………五三四
引津の亭に船泊てて作れる歌七首(四首題)……………五三七
壹岐の島に到りて雪連宅滿が忽鬼病に遇ひ
て死去りし時作れる歌一首并に短歌……………五三六
六結の作れる挽歌……………五三〇
對馬島の淺茅の浦に到りて船泊てし時順風
を得ず經停まる事五箇日ここに物華を瞻望

し各働める心を陳べて作れる歌一首……………五三三
竹敷の浦に船泊てし時各心緒を陳べて作
る歌十八首(十七首題)……………五三三
筑紫に廻り來て海路京に入るに播磨の國の
家島に到りし時作れる歌五首……………五四五
四 遣渤海使……………五四七
二月十日内相の宅にて渤海大使小野田守の
朝臣等を饗する宴の歌一首……………五四七
五 葛井廣成……………五四八
冬十二月十二日歌舞所の諸王臣子等葛井連
廣成の家を集ひて宴せる歌二首……………五四八
六 元興寺の僧……………五五一
十年戊寅元興寺の僧のみづから嘆く歌一首……………五五一
七 中臣宅守……………五五一
中臣朝臣宅守と狹野の茅上の娘子と贈り答
ふる歌……………五五三
八 石上乙麻呂……………五六〇
石上乙麻呂の卿の二佐の國に配せられし時
の歌三首并に短歌……………五六二

九

門部の王……………五六五
門部の王東の市の樹を詠みて作れる歌一首……………五六六
山雲守門部の王京を思ふ歌一首……………五六六
一〇 湯原の王……………五六七
湯原の王芳野にて作れる歌一首……………五六八
湯原の王酒を打つ歌一首……………五六九
湯原の王の七夕の歌二首……………五七〇
湯原の王の鳴鹿の歌一首……………五七一
湯原の王の蟋蟀の歌一首……………五七二
湯原の王娘子に贈れる歌二首……………五七三
一一 遷都……………五七四
寧樂の故郷を悲みて作れる歌一首并に短歌……………五七五
大原真人今城寧樂の故郷を傷み惜む歌一首……………五七八
久通の新京を讀むる歌二首(二首題并に短歌)……………五八〇
春の日三香の原の荒れたる城を悲み傷みて
作れる歌一首并に短歌……………五八四
一二 大伴坂上郎女……………五八七
冬十一月大伴坂上郎女帥の家を發し道に上
りて筑前の國宗形の郡名見山を越ゆる時作

れる歌一首……………五八八
大伴坂上郎女姪家持が佐保より西の宅に還
るに與ふる歌一首……………五八九
大伴坂上郎女の月の歌三首……………五九〇
大伴坂上郎女神を祭る歌一首并に短歌……………五九二
天皇に獻れる歌二首……………五九四
大伴宿禰駿河麻呂の歌一首……………五九五
大伴坂上郎女の歌一首……………五九六
大伴坂上郎女の歌二首……………五九六
大伴坂上郎女跡見の庄より家に留まれる女
子の大嬢に賜へる歌一首并に短歌……………五九八
一三 防人……………六〇〇
天平勝寶七歲乙未二月相替りて筑紫に遣さ
えし諸國の防人等の歌……………六〇一
昔年相替りし防人の歌八首……………六〇三
昔年相替りし防人の歌一首……………六〇四
防人の歌……………六〇四
防人の情に爲りて思を述べて作れる歌一首
并に短歌……………六〇六
三月三日防人を檢校する勅使并に兵部の使

人等同に集へる飲宴に作れる歌三首……………六三〇

一四 橘諸兄と藤原仲麻呂……………六三三

○安積香山影さへ見ゆる……………六三三
夫の君に戀ふる歌一首……………六三四
冬十一月左大辨葛城の王等に姓橘の氏を賜へる時御製の歌一首……………六三五
橘宿禰奈良麻呂詔に應ふる歌一首……………六三六
太上皇難波の宮に御在しし時の歌七首……………六三六
左大臣橘の卵を壽がむ爲預ねて作れる歌一首……………六四三

天平寶字元年十一月十八日内裏にて肆宴きこしめず歌二首……………六四四

一五 市原の王……………六四六

市原の王宴に父安貴の王を禱ぐ歌一首……………六四六
市原の王獨子を悲める歌一首……………六四七
同じき月十一日活道の岡に登り一株の松の下に集ひて飲せる歌二首……………六四八
市原の王の歌一首……………六四九
二月式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にて宴せる歌十首(九首應)……………六五〇

一六 大伴家持……………六五一

大伴宿禰家持の初月の歌一首……………六五一
同じき坂上大饗家持に贈れる歌一首……………六五二
また家持坂上大饗に和ふる歌一首……………六五三
同じき大饗家持に贈れる歌二首……………六五四
また家持坂上大饗に和ふる歌二首……………六五五
更に大伴宿禰家持坂上大饗に贈れる歌十五首(八首應)……………六五六
笠女郎大伴宿禰家持に贈れる歌廿四首(十八首應)……………六六〇
栗田女の娘子大伴宿禰家持に贈れる歌二首……………六六三
紀女郎大伴宿禰家持に贈れる歌二首……………六六四
大伴家持贈り和ふる歌二首……………六六六
大伴宿禰家持の春雉の歌一首……………六六七
尼頭句を作り并大伴宿禰家持尼に誂へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首……………六六七
大伴宿禰家持藤原朝臣久須麻呂に報へ贈れる歌三首……………六六八
藤原朝臣久須麻呂の來り報ふる歌二首……………六七〇
瘦せたる人を嘔り笑ふ歌二首……………六七三

平群氏の女郎越中守大伴宿禰家持に贈れる歌十二首(六首應)……………六七三

八月七日の夜守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌……………六七七

大日秦忌寸八千鳥の館に宴する歌一首……………六七八

放逸せる鷹を思ひ夢に見て感悦して作れる歌一首并に短歌……………六八九

磯波の郡雄神河の邊にて作れる歌一首……………六八七

婦負の郡の鷗坂河の邊にて作れる歌一首……………六八八

鷗を潜くる人を見て作れる歌一首……………六八九

新河の郡にて延槻川を渡る時の歌一首……………六九〇

氣太の神宮に赴き參ると海邊を行きし時作れる歌一首……………六九〇

珠洲の郡より發船して治布に還りし時長濱の灣に泊てて月光を仰ぎ見て作れる歌一首……………六九二

酒を造る歌一首……………六九三

二十五日布勢の水海に往く道中馬上の口號二首……………六九四

同じき月九日諸僚少目秦の伊美吉石竹の館に會ひて飲宴す是に主人百合の花綬三枚を造り互器に疊ね置きて賓客に捧げ贈る各此

の綬を賦して作れる歌三首……………六九六

陸奥の國より金を出せるを賀ぐ詔書の歌一首并に短歌……………七〇一

史生尾張少昨を喻す歌一首并に短歌……………七〇六

先の妻夫の君の喚使きたずみづから來し時作れる歌一首……………七二三

天平寶字元年閏五月六日以来小旱を起して百姓の田畝稍潤める色あり六月朔日に至りてたちまち雨雲の氣を見仍りて作れる雲の歌一首并に短歌……………七二四

雨の落るを賀ぐ歌一首……………七二七

越前の國の椽大伴宿禰池主の來贈れる戲歌四首……………七二八

更に來贈れる歌二首……………七三三

天平寶字二年正月二日國の廳にて饗を請の郡の司等に給ふ宴の歌一首……………七三六

壘田の地を檢察する事に緣りて磯波の郡の主帳多治比部北里の家に宿る時に忽に風雨起りて辭去することを得ずて作れる歌一首……………七七七

天平寶字二年三月一日の暮春の苑の桃李の花を眺闕して作れる歌二首……………七七八

二日柳黛を攀ちて京師を思ふ歌一首……………七九
 堅香子草の花を攀ち折る歌一首……………七三〇
 遙に江を浜る船人の唱を聞く歌一首……………七三三
 三日守大伴宿禰家持の館に宴する歌三首……………七三三
 勇士の名を振ふを慕ふ歌一首并に題歌……………七三四
 十二日布勢の水海に遊覽し船を多粘の灣に泊めて藤花を望み見て各懷を述べて作れる歌四首……………七三五
 時に雪を積みて重巖の起てるを彫り成し奇巧草樹の花を採り發く此に屬きて椽久米朝臣廣繩の作れる歌一首……………七三六
 遊行女婦蒲生娘子の歌一首……………七三七
 七月十七日を以ちて少納言に選任せらる仍りて悲別の歌を作りて朝集使椽久米朝臣廣繩の館に贈り貽せる二首……………七三六
 二十三日興に依りて作れる歌二首……………七四〇
 二十五日作れる歌一首……………七四一
 族に喩す歌一首并に題歌……………七四二
 病に臥して無常を悲み修道を欲して作れる歌二首……………七四三
 壽を願ひて作れる歌一首……………七四七

下編 自然と人事

七六二

第一章 詠物と羈旅

七六二

一 四季の雜歌

七六三

櫻の花の歌一首并に題歌……………七六三

○ひさかたの天の香具山……………七六七

鳥を詠める……………七六八

雪を詠める……………七七〇

霞を詠める……………七七一
 花を詠める……………七七一
 煙を詠める……………七七二
 野遊……………七七二
 鳥を詠める……………七七三
 蟬を詠める……………七七四
 花を詠める……………七七五
 花を詠める……………七七五
 雁を詠める……………七七七
 鹿鳴を詠める……………七七八
 蟬を詠める……………七七九
 蟋蟀を詠める……………七八〇
 露を詠める……………七八一
 雪を詠める……………七八二
 黄葉を詠める……………七八三
 二 詠物……………七八四
 ○天を詠める……………七八四
 月を詠める……………七八五
 月を詠める……………七八八
 雲を詠める……………七九〇

目次

七

三 羈旅

七九四

山を詠める……………七九四

○河を詠める……………七九〇

葉を詠める……………七九一

井を詠める……………七九三

忍壁の皇子に獻れる歌一首……………七九三

羈旅……………七九四

不盡の山を詠める歌一首并に題歌……………七九四

○不盡の嶺を高みかしこみ……………七九八

羈旅の歌一首并に題歌……………七九八

○大海に鳥もあらなくに……………八〇二

攝津にて作れる……………八〇二

羈旅にて作れる……………八〇三

草香山の歌一首……………八〇三

名木河にて作れる歌三首(二首題)……………八〇五

宇治河にて作れる歌二首(一首題)……………八〇五

筑波山に登りて月を詠める一首……………八〇六

芳野の離宮に幸しし時の歌二首……………八〇七

槐本の歌一首……………八〇八

羈旅にて思を發せる……………八〇八

別を悲む歌……………八〇九

第二章 相聞往來

問答歌……………八三二

○幣帛を奈良ゆ出でて……………八三三

○斧取りて丹生の檜山の……………八三四

一 四季の相聞……………八三七

花に寄す……………八七

雨に寄す……………八六

松に寄す……………八九

藤を贈る……………八三〇

花に寄す……………八三〇

日に寄す……………八三一

水田に寄す……………八三一

蟋蟀に寄す……………八三三

花に寄す……………八三三

黄葉に寄す……………八三四

月に寄す……………八三四

雪に寄す……………八三五

二 正述心緒……………八三六

○石すら行き通るべき……………八三六

三 寄物陳思……………八三七

○水の上に數書く如き……………八三八

四 譬喩歌……………八三九

玉に寄す……………八四〇

衣に寄す……………八四〇

草に寄す……………八四一

五 問答……………八四七

妻に與ふる歌一首……………八四七

妻の和ふる歌一首……………八四八

○吾妹子に戀ひて術なみ……………八四九

○栲領巾の白濱浪の……………八五〇

○紫は灰指すものぞ……………八五〇

○すべもなき片戀をすと……………八五〇

六 古長歌……………八五八

○敷島の日本の國に……………八五八

柿本朝臣人麻呂の歌集の歌……………八五九

○隱國の泊瀬の河の……………八六〇

○三諸の神奈備山ゆ……………八六〇

○さし焼かむ小屋の醜屋に……………八六〇

第三章 人事雜題

七 旋頭歌……………八九六

○住吉の小田を逝らす子……………八九六

一 傳説……………九〇一

仙柘枝の歌三首……………九〇一

七夕……………九〇五

○天階も長くもがも……………九〇八

○淳名河の底なる玉……………九〇九

竹取の翁の歌……………九一〇

娘子等の和ふる歌九首……………九一九

二 世談……………九二三

櫻兒の歌……………九二三

螢兒の歌……………九二五

○事しあらば小泊瀬山の……………九二七

○商變り領らすとの御法……………九二八

三 臨時……………九三九

故郷を思ふ……………九三九

時に臨める……………九三〇

舊りにしを歎く……………九三二

○この頃の吾が戀力……………九三三

怕しき物の歌三首……………九三三

四 長歌雜題……………九三五

○三諸は人の守る山……………九三五

○百岐年美濃の國の……………九三六

乞食者の詠二首……………九三六

五 無常 附虛無……………九四三

所に就きて思を發す……………九四四

世間の無常を厭ふ歌三首……………九四四

○鯨魚取り海や死する……………九四五

○心をし無何有の郷に……………九四六

六 挽歌……………九四七

倭琴を詠める……………九四八

○福のいかなる人か……………九四八

○百小竹の三野の王……………九四九

○隱國の長谷の川の……………九五〇

第四章 東歌と北國の歌

一 東歌……………九五五

上總の國の歌……………九五五

相摸の國の歌……………九五六

武藏の國の歌……………九五七

下總の國の歌……………九五八

信濃の國の歌……………九六〇

上野の國の歌……………九六一

下野の國の歌……………九六三

未勘國の雜歌……………九六三

未勘國の相聞……………九六五

北國の歌……………九七四

能登の國の歌三首……………九七四

越中の國の歌四首……………九七七

麻呂といふ奴……………九六九

乎曾呂考……………九六九

附 載

一 萬葉集年表……………九八一

二 番號順索引……………九九七

三 初句索引……………一〇〇七

萬葉集新解の後にしるす……………一〇二一

獨立圖版目錄

一 うけらが花……………卷首

昭和四年八月十九日、笈掛操氏採集。原寸。

二 孃子舞踊圖……………卷首

過去現在因果經(原本久通宮家御藏)中の一圖である。經文の内容を描いたもので、奈良時代の製作に係る。ただし支那から渡來した經の臨寫とは認められるが、偶以つて萬葉時代の歌人階級の風俗の一端を窺ふ資料となすに足りる。

三 萬葉地圖……………卷首

越中能登地方

考說目錄

鹿こそ子持たりといへ考……………五〇九

ゆつ考……………七五五

がね解……………七六六

にてし考……………七六五

萬葉集新解 下冊

上編 萬葉集歌史(續)

雜歌、相聞、挽歌等の綱を立てて部類してある萬葉集二十卷の歌に、秩序あり統一ある時代順の體系を與へて、個々の歌を理解し鑑賞して行く傍、上代の歌の歴史に就いての知識をも得しめようとしたのが、わが萬葉集歌史の企であつた。かくて第一章は古代大和王朝時代と題し、雄略天皇の御製より齊明天皇の御代の歌に及び後人が結松を見て有間の皇子の運命を傷める歌までを附し收め、第二章は近江朝時代とし、天智天皇の御代の歌よりして同じく後人が近江の荒都を傷める歌までを收めた。第三章はこれを受けて、飛鳥藤原朝時代とし、武天皇の御代より持統文武兩帝の時代に至り、柿本人麻呂等が大業は、正にこの章に在る。第四章は奈良朝時代に入つて、その上とし、大伴旅人、山上憶良、高橋蟲麻呂等を叙し、時代はほぼ天平の初に留めた。以上の四章は本書の上冊に收めて印刷製本することとなつた。よつてこの下冊は、これに續いて第五章の奈良朝時代の下を叙して、上編の「萬葉集歌史」を結び、さて下編の「自然と人事」の篇に移らうとするのである。

第五章 奈良朝時代下

藤原の宮時代に生を享けたとおぼしき名家は、おほむね天平の初頭に前後長逝し去つたと思はれる。これに續く俊豪の活躍は、いはゆる天平の歌壇を飾つて、なほ黄金時代の引き續くかに思はれる。それらの中では、大伴坂上郎女は、やゝ先進であり、湯原の王、市原の王これに續き、大伴家持これを受けて萬葉集の卷末に至る。すなはち、淳仁天皇の天平寶字三年に至つて、萬葉集はその巻を終へ、爾後の消息杳として傳はらぬのである。この時代にあつては、長歌は、もはやその時代を去つたと思はれる。長大の篇は作られてはゐるが、形式を逐うて詞句を陳ね、ともすれば弛緩の譏を免れることが出来ない。むしろ短歌の、都會生活に慣れた歌人たちの尖鋭な表出を試みたものに、優れた作品を見るであらう。

この章に收めた歌のうち、或るものは、前の章の時代に溯るものがある。それは章を分ち項目を立てて叙述してゆくに必要上、こゝに併せ叙するを便とするものがあるからである。前の章は、奈良朝の初期に榮えた大家の最後を見届ける意味で、天平の作品にも及んだが、この章では、新人の因るところを明にする爲に、前代にも溯る意味で分けてある。ほほ天平五年以後の作品を主として收めたが、その以前のものもある。遣唐使の如き、古い時代から行はれたことであり、古い時の歌もあるが、本集には天平五年の遣唐の時の歌が多く残つてゐるから、この章に收め、天平八年の遣新羅使、天平寶字二年の遣渤海大使の時の歌をこれに續けた如き、事を主として歌を集めた結果である。

一 寧樂の都

元明天皇が、和銅三年三月、始めて都を大和の國の平城の地にお遷しになつてから、聖武天皇の天平十二年十二月に、山城の國の恭仁に遷都せられたが、同十六年に再寧樂を都とせられて、桓武天皇の御代に至るまで、七代七十年間の都となつた。聖武天皇の御代の初は、この寧樂の都の、榮え極つた時代と思はれる。都會生活の形象と情趣とは、こゝに發育を遂げた。よつてこゝにまづ寧樂の都を證した歌一首を掲げて、この章を開くこととする。なほ、寧樂、平城、奈良は、皆ナラと讀んで、同一地である。

○大宰少貳小野老の朝臣の歌一首

あをによし 寧樂の京師は 咲く花の 薫ふがごとく 今さかりなり

【原文】 大宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有

【題意】 大宰少貳であつた小野老の、寧樂の都を證めた歌である。作つた年代はわからぬが、天平二年には老は大宰少貳であつた。後大貳となり、病を得て、下野の那須の温泉に養生に下つたが、病よからずして白骨となつて九州に歸つた。續日本紀に歿年を天平九年とせるは誤で、天平十年に死んだと思はれる。(橋本進吉氏、南京遺芳解説)。題に小野老の朝臣と姓を名の下に書いたのは、四位の人に對して敬意を拂つたのである。

殿は代匠
記によ
る。に
麻遠志
細井本
阿運可
神田本
多本等
よる。に
井本等
よる。に

遠志 天地能 大御神等 倭 大國靈 久堅能 阿麻能見虛喻 阿麻賀氣利 見渡多麻比 事子 還日者 又
更 大御神等 船舳爾 御手打掛豆 墨繩袁 播倍多留期等久 阿運可遠志 智可能舳欲利 大伴 御津濱備
爾 多太泊爾 美船播將泊 都都美無久 佐伎久伊麻志豆 速歸坐勢

【題意】 好去好來といふは、幸福に行つて歸つていらつしやいといふ意で、行人を送る歌である。これは天平五年の遣唐大使多治比廣成に贈つた歌で、反歌の左註に、三月一日に憶良が宅で對面し、三日に贈つたのである。なほ題の下に、反歌二首とあるは、異例であるから、萬葉考の如き、これを衍字としてゐるが、本集の編纂は、必しも整一の形式によつたものとは思はれないから、もとの儘であるべきであらう。

【口譯】 神代から云ひ傳へ來ることには、この日本の國は、皇神の嚴として坐す國、言葉の靈の活躍する國と、人々の間に語り續いで居りました。今の世の人々も悉く、目の前に、見もし知つてもをります。人多く満ちてはありますが、天つ日の如き天皇陛下が、神意によつて御恩寵遊ばされるまゝに、天下の政治を執奏し、從者をお選みになつて、勅命を奉じて、支那の遠き國土に遣はされてお出でになりますから、海上の岸邊にも沖にも、留つて領しておいでになる諸の大御神たち、船の舳に導きなされ、天地の大御神たち、殊には大和の大國靈の神は、天の御空から天を飛んで見渡し給ひ、事終へて歸つてくる日には、又更に大御神たちが、船の舳に御手をお懸けになつて、墨繩を引いたやうに、九州の埴嘉の岬から、大伴の御津の濱邊に、一筋に船は泊るでございませう。悪い事無く幸福において遊ばして、早くお歸りなさいませ。

【釋義】 云ひ傳て來らく 云ひ傳へ來ることは。原文もと云傳介良久とあつて、イヒツテケラクと讀んでゐたものであるが、今日では、神田本等によつて、介は久の誤としてゐる。そらみつ 倭の枕詞、既出。皇神の嚴し

き國 スメガミは、集中、皇祖神とも書いてある。スメは、統治する意のある語で、神の中でも、皇室の御祖先なる、主位にある神をいふ。イツクシキは、靈異記に儼然を、しか訓してゐる。嚴としています國の意である。言靈の幸はふ國と コトダマは、言語の精靈である。言語に魂があつて、よい事を云へばよい結果が現れ、悪いことをいへば悪い結果があると信ぜられてゐる。サキハフは、繁昌する、幸福にする意。言ひ繼がひけり 繼ぐの連続的狀態を表すが、繼がふである。以上第一段で、總論的に、日本國は神靈のいづくしむ國であることを説示してゐる。目の前に見たり知りたり 以上第二段で、第一段に云ふことは、今人のすべて現に見聞して承知してゐることを語る。人多に満ちてはあれども この國に人は多く満ちてはゐるけれども。高光る日の朝廷 高光るは日の修飾句で、日輪の照臨する狀の壯大なるを形容してゐる。日は、太陽の如き意。ミカドは御門が語原で、宮殿、朝廷の意となる。こゝでは、朝廷と解してよいであらう。この語は、更に進んで、朝廷宮殿の主人公にまします天皇を指していふやうになる。天皇をミカドといふことは、この集にはいまだ見えぬところであるが、この歌のこの句の如きは、下文に、神ながら愛の盛にとあるので、ミカドを直に天皇と解してもよい。さすれば、天皇をミカドと申し奉つた、はやき一例となるのである。神ながら愛の盛に 神意を奉じて、神意のままに、恩寵を垂れ給ふ、その盛なるによつて。天の下奏し給ひ 天の下の政を奏上する意で、大臣として國政を執ることをいふ。もと天下奏多麻比志とあつたのは、志が一字多くて誤である。家つ子ら ャツコは、家に從屬する人々の意で、奴の語原である。ここでは、遣唐使の從者をいふ。選び給ひて 遣唐使が從者を選定するをいふ。勅旨 天皇の御命令。反して大命といふ 勅旨の訓法を註したので、作者みづから加へたものと思はれる。反といふは、漢文で、字音を反切の法によつて示すをいふ。反切の法とは、ある

一字の音を、音の既に知られてゐる二字を以つて説明する法で、例へば、扨は臣與の反といふが如く、扨の音を示すに、臣の父音Sと、與の韻とを併せて、シヨであることを示すが如きである。然るに日本では、たゞ訓法を示すだけで、反切にはよらない。勅旨とある、讀み方は大命であるといふだけである。讀み方といふ程の意に反の字を用ゐてゐる。戴き持ちて 原文もと載持而とあつた。今代匠記の説によつて戴に改める。唐國の原文、唐能とある。これを古くモロコシノの讀んでゐるが、奈良朝時代の文獻に、支那をモロコシと稱したのを見ない。皆カラクニと云つてゐる。今萬葉集攷證に従つてカラクニノと讀む。この時代は唐の玄宗の世である。支那をカラクニと稱した例は、「大船に眞楫しじぬきこの吾子を韓國へ遣る、齋へ神たち」(十九、四二四〇)、「韓國に行き足らはして」(同、四二六二)、これらの例、みな遣唐使に贈る歌である。遣され 天皇の命によつて、遣唐使が遣される意である。罷り坐せ 罷り坐せばの意の條件法である。段落ではない。神留り 神の留り坐す意である。祝詞に多く見え、續日本紀の詔詞にも、高天の原に神積り坐す皇親神魯伎神魯美の命など見える。賀茂眞淵は神集りと説いたのであるが、本居宣長の大祓詞後釋に神留りとする説が出てゐる。領き坐すウシハキは、主人として領有する意である。船の舳に 船の舳先で、此處にも、反してフナノヘニと讀むべしといふ古註がついてゐる。導き申し 原文もと道引麻志遠とあつて、ミチビカマシヲと讀んでゐたが、マシでは意が不通であるから、細井本によつて改める。神が、遣唐使の船を道引き申すのである。申すは、遣唐使に對する敬語である。倭の大國靈 倭の國の國土神である。山邊郡にある大和に坐す大國魂の神社で、今の大和神社の神である。ひさかたの 天の枕詞。事了り還らむ日は 使節としての任を終へて歸つて來る日には。大御神等 前に海原の邊にも沖にも神留り領き坐す諸の大御神等と云つた神たちである。墨繩を延へたる如く

墨繩は、大工が用ゐる工具で、墨のついた繩を張つて、材木に線をはきくをいふ。延へたる如くは、延ばした如く。この句は眞直ぐにの意の譬喩である。あちかまし 值嘉の枕詞であるが、原義不明、チカの音を重ねて值嘉を修飾するのであらう。もとは阿庭可遠志とあつたのであるが、今、古本に庭を遅に作れるに従ふ。值嘉の岬より 值嘉は、肥前國風土記、松浦郡に、值嘉島、郡の西南の海中にありとして、地名起原傳説を載せてゐる。遣唐の船の往還に、日本領土の最後、また最初の舟著であつた。今の平戸五島の諸島をいふのであらう。延喜式卷十六に載せた追儼の祭文には、西の方は遠つ值嘉とあつて、國土の西端としてゐる。岬は、原文には岬とある。岬は山の穴をいひ訓はクキであるが、岬に通じて用ゐたものと思はれる。大伴の御津の濱邊に 大伴は、今の大阪の附近の總地名。御津は難波の御津である。この地から船は發着したものである。直泊に ただ一筋に其處に碇泊するをいふ。恙無く ツツミは、凶事。ツツガと讀むは中世以降のことで、この歌では、ツツミである。「平けく親はいまこね、恙無く妻は待たせと」(卷二十、四四〇八)、「大船を荒海に出し坐す君、つつむことなくはや歸りませ」(十五、三五八二)などの例があつて、ツツミは、動詞から出たものであることが知られる。

○反歌

大伴の 御津の松原 かき掃きて 吾立ち待たむ 早歸りませ

【原文】 反歌

大伴 御津松原 可吉掃豆 和禮立待 速歸坐勞

【口譯】 大伴の御津の松原を掃き清めて、わたくしはお待ち申しませう。はやくお歸りなさいませ。

二 遣 唐 使

【釋義】 かき掃きて カキは、掃きの意を強めるまでに添へたもの。吾立ち待たむ ひたすら今かくと歸るのを待つて、落ちつかぬ意を、立ちの語で示してゐる。

難波津に 御船泊てぬと 聞え來ば 紐解き放けて 立走りせむ

天平五年三月一日 良の宅に對面して 山上憶良謹みて上る

大唐大使卿の記室

【原文】 難波津爾 美船泊農等 吉許延許婆 紐解佐氣豆 多知婆志利勢武

天平五年三月一日 良宅對面 獻三日 山上憶良 謹上

大唐大使卿記室

【口譯】 難波津に御船が泊つたと聞えて來たならば、衣の紐も解き放して走つて参りませう。

【釋義】 難波津に 難波の御津にである。原文もと難波とあり。古本に難波に作つてゐるのは、古風で、正倉院文書に例が多い。昔は難破の意に、縁起を祝つたものであらう。御船泊てぬと 遣唐使の船が歸朝して碇泊したと。聞え來ば 作者は大和の京にゐるから、難波に遣唐使の舟が來著したと聞えて來たならばといふのである。紐解き放けて 衣の紐を解き放つてである。これは活動を便にする爲だとも、紐も結びあへず取り急いでの意だとも云はれてゐる。立走りせむ 走つてお迎へに参りませうの意。良の宅に對面して獻れるは三日なり

憶良の宅にて對面して、この歌を献上したのは三日であるの意。作者が自分の手控へに記しつけておいたのであらう。大唐大使卿記室 大唐大使卿は、遣唐の大使、多治比廣成。記室は、書記で、大使を敬つて、その左

右に侍する人に宛てたもの。

【餘論】 遣唐使に對して、無事に早く歸つていらつしやいといふ意を表すだけでは、ともすると形式だけの儀禮に流れ易いものであるが、この歌の作者、山上憶良は、歌も達者であり、殊には自分も、早く遣唐使の少録(書記)となつて、彼の地に渡つたこともあるので、さすがに特殊な語句を用ゐて、緊張を保つてゐるのは、この歌のとりえである。

○天平五年癸酉 遣唐使の船 難波を發ちて海に入る時 親母の子に贈

れる歌一首并に短歌

秋萩を 妻問ふ鹿こそ 一子に 子持たりといへ 鹿兒じもの 吾が獨子の 草枕
旅にし行けば 竹珠を 繁に貫き垂り 齋戸に 木綿取り垂でて 齋ひつつ 吾が
思ふ吾子 眞幸くありこそ

【原文】 天平五年癸酉 遣唐使船發難波入海之時 親母贈子歌一首并短歌

秋芽子乎 妻問鹿許曾 一子二 子持有跡五十戸 鹿兒自物 吾獨子之 草枕 客二師往者 竹珠乎 密貫垂

齋戸爾 木綿取四手而 忌日管 吾思吾子 眞好去有欲得

【題意】 天平五年の遣唐使の船が、難波を出航しようとした時、使人のうちの誰かの母親が、その子に贈つて、別を惜んだ歌。

【口譯】 秋萩を、妻として求むる鹿は、ただ一人だけの子を持つさうである。その鹿の兒のやうな、わたしの唯

一人の子が、旅に行くからして、竹珠を繁く貫き垂れ、神瓶に本綿を取り垂れて、潔齋しつづわたしの思つてゐるわが子よ、幸福にゐて下さう。

【釋義】 秋萩を妻問ふ鹿こそ 萩は、鹿の妻であると云はれてゐたことは、鹿鳴を詠める歌に「秋萩の妻を枕かむと」(卷九、一七六一)、「奥山に住むとふ鹿の初夜さらす妻どふ萩の散らまく惜しも」(卷十、二〇九八)など、多くの例がある。ツマドフは、妻として問ひよること。婚を求むる意。秋萩にの誤とする説もあるが、却つて誤である。一人子に子持たりといへ 鹿はただ一つの子を産むので、一人子に子を持つと歌つてゐる。トイへは、といふことであるの意に、世人の言を擧げるのである。イへは、上に鹿こそこのコソがあるから、イへと結んだのであるが、本來は、鹿コソ持タレトイフと云はねばならぬ語法である。それを釣られて、コソの係にイへと結んだのは、調子に乗つたものである。(考説欄参照)こゝで段落で、以上は、世上の人の見を序説として述べ、次の鹿兒じもの我が一人子のを起す序としてゐる。鹿兒じもの吾が獨子の 鹿の子のやうに、わがただ一人の子が。竹珠を密に貫き垂り 以下は、母親が、子の平安無事を祈つてする祭の方法を叙したのである。竹珠は、小竹を小さく切つて、管玉のやうに緒に貫いたもの。それを繁く多く緒に貫いて垂れるのである。正倉院文書に、天平十年に正税を以つて、白玉、紺玉、縹玉、綠玉、赤玉、赤勾玉、丸玉、竹玉、勾縹玉を買つたよしが見え、竹玉二枚の値が、稻三把四分であつたことを記してゐる。これは竹のやうな珠の義と考へられる。この、竹のやうな珠の義が、本義か、又は竹で作つた珠の義が本義かは未詳である。假に竹のやうな珠が本義としても、それに模して、竹で珠を製して多く用ゐたのであらうとは考へられ、民間に一般に用ゐられ、従つてこの集に出てくる竹珠は、竹製の珠と解してよいであらう。齋戸に木綿取り垂てて イハヒベは、神聖なる瓶の義。こ

れに木綿を取り着けるのである。ただしこれは普通の説を記したままで、イハヒベは、神を齋ひ奉る處であらうと爲す説は、小著「神と神を祭る者との文學」の二七五頁以下に記してある。いはひつつ イハフは、言ふの連続的狀態をいふので、悪いことの無いやうにと、祝言をするのが本義で、それから、潔齋をして不淨を近づけぬ意に轉ずる。この歌では、旅に出たわが子の上に、災禍の無く、無事に立ち戻るやうにと、その魂を齋ひ鎮めるのである。ま幸くありこそ マは接頭語。アリコソは、あつて欲しいと願望するのである。

【考説】 鹿こそ子持たりといへ考

この歌は、次點の歌であるが、誰が最初に訓を附したかは未詳である。今、主として初の四句の訓法について云はうとするのであるが、最初の二句は、古くからアキハキヲツマトフカコソと讀んで居り、萬葉集新考に至つて、乎を爾の誤として、アキハギニツマトフカコソと讀み直した外に異訓を見ない。一子二子持有跡五十戸の句の訓については、古いところでは、元曆校本の緒の書き入れに「ヒトツコノフタコモツトイヘ」とあり、神田本には「ヒトツコノフタコモチタルトイヘ」とある。仙覺は、これらの次點の訓を、修正して「ヒトツコフタツコモタリトイヘ」となした。その後、萬葉考に「ヒトツコニコモタリトイヘ」と爲し、古義には、今村樂の説に、二子は乎の誤であるとして「ヒトツコヲモタリトイヘ」といへるによつて、「ヒトリコヲモタリトイヘ」と讀み、口譯萬葉集は、原文は無いが、「ヒトリゴニコモタリトイヘ」と讀んでゐる。以上の如く諸家の説があるが、鹿許曾をカコソと讀み、持有跡五十戸をモタリトイへと讀む點に就いては、ほとんど定訓のやうになつてゐると見てよいであらう。五十戸をイへと讀むのは、イは五十の訓讀、へは戸の訓讀である。その例としては

眞玉付彼兼手言齒五十戸常相而後社悔二破有跡五十戸(卷四、六七四)の歌があり、この歌の二つの五十戸も、共にイへと讀んでゐる。

今、全體の結構を按ずるに、唯一人の子を旅に出して、幸福ならむことを願つた意である。さうして鹿のやうなただ一人のわが子と云はむとして、鹿はただ一つの子を持つものであると、鹿の性質を叙してゐるのが、初の四句である。さうしてイへは、鹿こそその結びであると思れば、鹿こそ——と云への文脈となり、鹿が、わたくしは一人子に子を持つてをりますと云ふと解すべく、鹿がみづからこの作者に告げる意となる。しかしさうではあるまい。鹿は一人子に子を持つものと世人が云ふ意として、イへの主格は、世の人で、この文では省略せられてゐるものとなすべきであらう。鹿こそを受けるのは持有でなければならぬ。鹿が一人子を持つのである。然らば、「鹿こそ子持たれといふ」と讀まねばならぬが、從來さういふ訓法も聞かぬし、五十戸をイフと讀むべくもない。上にコソの係がなくして、動詞の已然段を使ふは、條件法としての用法はある。この場合は文の終止ではなくして、下にその條件法を受ける叙述がある。例へば、
家さかりいます吾妹を停みかね山隠りつれたまひしも無し(卷三、四七一)
の如きもので、長歌に殊にこの用法が多い。これらは、山隠りつればといふ意に解してよい。然るに、秋萩をの歌にあつては、子持たりといへばと條件法としては意を成さぬので、やはり子持たりといへで、一旦、文は終結するものと見るがよい。さればこのイへは、上に正當の係は無くして、鹿こそコソを誤つて受けたものと觀るべきである。先師三矢重松先生の高等日本文法を繙くに、
明けぬればつれなくなりぬ「女郎花人知れずこそ折らむ」と思ふに(躬恒)

「是も亦これの鳥根の人にこそ有りき」と云ふなれ(續日本後紀)
その他の數例を擧げて、さて「此等のコソを正しく結びて試むるに語氣何となく相應せず。かゝるは成分の係屬を忘れて唯語氣にのみ釣られて、結び或は流せるものなり」(取意)と記されてある。さればはやく萬葉にもかゝる例があつたものと見なすべきで、やはり「秋萩を妻問ふ鹿こそ一人子に子持たり」といへと解すべきものであらう。

○反歌

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば 吾が子羽ぐくめ 天の鶴群あまのつるぐらむ

【原文】 反歌

客人之 宿將爲野爾 霜降者 吾子羽裏 天乃鶴群

【口譯】 旅人の野宿をしようとする野に霜が降つたならば、翼を以つて、我が子を包んで下さい。天飛ぶ鶴の群よ。
【釋義】 吾が子羽裏め ハグクメは、羽もて包めよである。天の鶴群 鶴は、天を飛び交ふものであるから、天のと冠してゐる。天から降り來つてといふ程の意を寓してゐる。

【餘論】 この遣唐の使人の母の歌は、ただ一人の子を遠き旅に出しやる母の心を、痛切に寫してゐる。異國の寒天に野宿もするであらう、わが獨子を思ひやつて、鶴に翼もて包めと頼んだ母の心は哀である。遣唐の使人を送つた歌として、儀禮のものゝ多い中に、それとは全然出發點を異にして、母の純愛をもととしてゐるのは、

この歌の生命を強くした所以である。

○春日にて神を祭る日 藤原太后の御作歌一首 すなはち入唐大使藤

原朝臣清河に賜ふ

大船に 眞機繁貫き この吾子を 韓國へ遣る 齋へ神たち

〇四二四

【原文】 春日祭神之日 藤原太后御作歌一首 即賜入唐大使藤原朝臣清河
大船爾 眞機繁貫 此吾子乎 韓國邊遣 伊波敏神多智

【題意】 天平勝寶三年の遣唐の際に、春日で、その行の無事を祈つて祭をした時、時の皇太后(光明皇后)がお詠みになつて、入唐の大使藤原清河に下された御歌。清河は房前の子で、皇后の御甥に當る。春日は春日神社で、藤原氏の氏神である。武甕槌の命、經津主の命、天の兒屋根の命、比賣神の四神を祭り、和銅に平城京に都を遷すと同時に、藤原氏の手によつて創建せられたものと思はれる。

【口譯】 大船に櫓權を十分に具へて、このわが子を支那へ遣します。どうかお守り下さい。神様よ。

【釋義】 ま機繁貫き カチは舟を進める櫓權。マカチは、完全なる漕具の意。シジヌキは、それを舟に多く取り着ける。舷から櫓が出てゐるから、貫くといふ。この吾子を アコは清河に對して親愛の意を表されてゐる。コノは強く指示する辭。韓國へ遣る 支那もカラクニと云つたのである。いはへ神たち イハへは、前の長歌に出たイハフの命令法。神たちに對して、齋ひて災禍あらしむなど歌はれてゐる。

○阿倍朝臣老人 唐に遣さえし時 母に奉りて別を悲める歌一首

天雲の 退き方の極 わが念へる 君に別れむ 日近くなりぬ

〇四二四

右件の歌は 傳へ誦める人 越中大目高安倉人種麻呂なり 但年月の次は 聞

きし時の隨 此に載す

【原文】 阿倍朝臣老人 遣唐時 奉母悲別歌一首

天雲能 曾伎敏能伎波美 吾念有 伎美爾將別 日近成奴

右件歌者 傳誦之人 越中大目高安倉人種麻呂是也 但年月次者 隨聞之時 載於此焉

【題意】 阿倍老人が、唐に遣された時、その母に贈つて、別を悲んだ歌。阿倍老人は、いつの代の遣唐使に従つたとも知られない。この歌の前には、天平五年の遣唐の時の歌があるが、同時のものかどうかは未詳である。なほこの歌は、天平勝寶三年に、越中の大目(守、介、椽、大目と云つて、國の役人のうち、上から四番目の役)をしてゐた高安種麻呂が傳へ誦んだのを、大伴家持が聞いて記し留めておいたものである。

【口譯】 天の雲が、退き去る方の極みまでも、限なくわたくしの思つて居るあなたに、別るべき日は近づきました。

【釋義】 天雲の退き方の極 ソキへは、退き去る方。ソクへといふも同じ。雲は限なく遠い地方へ去るといふ考へから、限なき意を表さうとして、この句を用ゐる。成句で、しばしば用ゐられてゐる。この歌では、作者が母を思ふ情の際限なき譬喩に用ゐられてゐる。君に別れむ 君は、母をさしていふ。

【参考】 類句、天雲の退き方の極。

(上略) 天地に悔しきことの、世の中の悔しきことは、天雲の退く方の極、天地の至れるまでに、杖策きも策かすも行き(下略、卷三、四二〇)

天雲の退き方の極遠けども心し行けば戀ふるものかも(卷四、五五三)

○閏三月 衛門督大伴古慈悲の宿禰の家にて 入唐の副使同じき胡麻呂の宿禰等を餞する歌二首

韓國に 行き足らはして 歸り來む 丈夫武雄に 御酒たてまつる

右の一首は 多治比真人鷹主 副使大伴胡麻呂の宿禰を壽ぐなり

【原文】 閏三月 於衛門督大伴古慈悲宿禰家 餞之入唐副使同胡麻呂宿禰等 歌 二首

韓國爾 由伎多良波之氏 可敬里許牟 麻須良多家乎爾 美伎多氏麻都流

右一首 多治比真人鷹主 壽副使大伴胡麻呂宿禰也

【題意】 天平勝寶四年閏三月に、衛門督大伴古慈悲の家で、遣唐副使大伴胡麻呂を餞した時の歌二首の内で、多治比鷹主が、胡麻呂を祝つて詠んだ歌。

【口譯】 支那の國に行き著き、使命を果して歸つて來るでありませう、その丈夫に御酒を献じます。

【釋義】 韓國に 支那をさしていふ。行き足らはして 行程を完成する、十分に行つて來る。カラハンは、満足

ならしめる、具足せしめる等の意で、行くことを完全にす意。使命を果すことを含む。歸り來む 連體形。ますらたけまに 氣節あり勇氣ある男兒に。副使胡麻呂をさしていふ。

櫛も見じ 屋中も掃かじ 草枕 旅行く君を 齋ふと思ひて 作主いまだ 詳ならず

右件の歌を傳へ誦みしは 大伴宿禰村上 同じき清繼等なり

【原文】 梳毛見自 屋中毛波可自 久佐麻久良 多婢由久伎美乎 伊波布等毛比氏 作主未詳

右件歌傳誦 大伴宿禰村上 同清繼等是也

【題意】 前と同じ時の歌であるが、作者はわからない。遣唐使人の妻の作であらう。この歌を傳へ誦んだのは、大伴村上、同清繼等で、大伴家持がこれを聞いて筆録しておいたのである。

【口譯】 櫛も見ますまい、家の中も掃きますまい。旅に行く君を、無事を祈ると思つて。

【釋義】 櫛も見じ 旅に出た留守宅では、髪をも櫛梳らずに居ようの意。これを婦人の容をも飾らずに居る意に解すると、旅に出た人の留守では、櫛を用ゐることを忌む民俗があつたと爲す説とある。元來櫛には神祕な力が信ぜられて居り、櫛笄は神聖なる魂宮でもあつたのだから、留守に櫛を見るを忌むと爲すことも、あつたであらう。屋中も掃かじ 留守に屋内を掃くことを忌むのであらう。ヤヌチは、ヤノウチである。齋ふと思ひて 齋ふとしての意。イハフは、邪惡を近づけないやうに咒禁をするをいふ。もとは言語によるのが原義であるが、轉じて廣く方法を問はずに用ゐる。

○從四位上高麗朝臣福信に勅して 難波に遣し 入唐使藤原朝臣

清河等に酒肴を賜へる御歌一首并に短歌

そらみつ 日本の國は 水の上へは 地往つく如く 船の上へは 床とこに坐まる如く 大神の
鎮いはへる國ぞ 四よつの船ね 船ねの舳むね並ならべ 平安けく 早渡はやり來きて 返言かへりごと 奏まをさむ日に
相飲あひのみまむ酒さけぞ 斯この豐御酒とよみは

【原文】 勅みこと從四位高麗朝臣福信 遣つ於難波 賜たま酒肴入唐使藤原朝臣清河等 御歌一首并短歌
虚見都 山跡乃國波 水上波 地往如久 船上波 床座如 大神乃 鎮在國會 四船 船能倍奈 平安 早渡來
而 還事 奏日爾 相飲酒會 斯豐御酒者

【題意】 高麗福信を勅使として、難波に遣して、遣唐使の藤原清河等に、酒肴を賜へる時の、天皇の御製の歌。
その日月は詳でない。この歌は、宣命書と云つて、助辭等を小さく書いた體裁が、古本に残つてゐる。これ當
時の儘を傳へたものであらう。よつて今原文はその形を存しておく。

【口譯】 この日本の國は、水上は地上を往くやうに、船上は床に居るやうに、大神の鎮め給へる國である。遣唐
使の四つの船は、船の舳を並べて、無事に早く渡海して來て、返事を奏上する日に、共に飲む酒であるぞ。こ
の酒は。

【釋義】 そらみつ 枕詞、既出。日本の國は ヤマトは、この歌では、日本の總稱。床に坐ること トコは、屋
内に定著してある座臥の臺である。主人、家族、客人等、それぞれの床が定まつてゐる。その床に居るやうに
不安の無いのをいふ。鎮へる國ぞ 神の鎮護せる國であるぞ。ゾは其と指して意を強くする助辭。この句で段
落で、以上總論として、日本國は、海上を渡つても安らげき國であることを叙して祝つてゐる。四つの船 遣
唐使人の船は、四隻を用ゐる。大使、副使、判官、主典、それぞれに分れ乗る。船の舳ならべ 船の舳を揃へ

○反歌一首
四つの船 はや還り來と 白香著け 朕が裳の裾に 鎮ひて待たむ
右は勅使を發遣し 并に酒を賜へる 樂宴の日月 いまだ詳審なることを得ん
るなり

て、四隻とも無事での意。返言 使の歸つて申す言である。相飲まむ酒ぞ 共に飲むべき酒であるぞ。キは酒
の古言。この豐御酒は、賜はつた酒をさしてコノと強く指定してゐる。この酒といふものは、歸つて來た日に
共に飲むべきものであるぞの意で、賜はつた御酒を、歸つて來るまで御預けにするの謂ではない。トヨは酒の
立派なのを美めていふ。豊旗雲など。

【參考】 酒を賜ふ歌。

天皇、酒を節度使の卿等に賜へる御歌一首

食國の遠の御門に、汝等し斯く罷りなば、平けく吾は遊ばむ、手抱きて我はいまさむ、天皇朕が貴の御手もち、
搔き撫でぞ勞ぎ給ふ、うち撫でぞ勞ぎ給ふ、歸り來む日相飲まむ酒ぞ、この豐御酒は(卷六、九七三、反歌略)

【原文】 反歌一首

四船 早還來等 白香著 朕裳裾爾 鎮而將待
右發遣勅使并賜酒樂宴之日月 未得詳審也

【口譯】 四隻の船は、早く還つて來よと、白髪のやうに木綿を著けて、朕が裳の裾に咒禁をして待つて居よう。

【釋義】白香著け シラガは、木綿を着けるのが、人の白髪のやうに見えるからいふ。奥山の神の枝に、白香つけ木綿とりつけて(卷三、三七九)、「白香つく木綿は花物」(卷十二、二九九六)の例がある。白香をつけて裳の裾にはふの義で、裳に木綿を取りつけるのであらう。なほシラガを白紙とする説もあるが、卷十二の例に白紙をつける木綿といふことも如何であるし、且これは民間で育つた習俗であらうから、白い紙の得易からぬ時代に、さういふ民俗が生じたとは思はれない。祭事に紙を用ゐるのは、木綿や麻の代用として後れて起つたことであらう。萬葉集の白香は、やはり木綿の形態を譬へたものとして解したい。朕が裳の裾に鎮ひて待たむ 時の帝は孝謙天皇で、女帝である。婦人の裳の裾に神祕な力のあることは、古くから信ぜられてゐたところである。古事記に神功皇后の段に「かれ御腹を鎮ひ給はむ爲に、石を取らして、御裳の腰に纏かして、筑紫の國に渡り來ましてぞ、その御子は生れましける」萬葉集卷五に「往昔息長足日女の命、新羅の國をことむけましし時、茲の兩つの石を用ちて、御袖の中に挿み著けて、鎮懐と爲し給ひき。實はこれ御裳の中なり。」とある。御裳を祭つて、旅行く人の無事を祈られるのである。人の魂を衣にはひ留むる咒のあつた證として、萬葉集新考に、「復も逢はむよしもあらぬか、白栲のわが衣手にいはひとどめむ」(卷四、七〇八)の歌を擧げてゐる。

三 遣新羅使

遣唐使に續いて、海外文化の移入に力のあつたのは、遣新羅使である。新羅は、支那との交通も頻繁で、その影響を受けて、相當の文化を來してゐたであらう。新羅琴、新羅斧、新羅樂等の詞もあつて、その特有の文化も移入

せられてゐる。

地勢上、唐よりは近いが、それでも使人はしばしば困難に遭遇してゐる。萬葉集の卷十五の前半は、天平八年の遣新羅使人の歌百四十五首を載せてゐるから、今その中から抄録して、その生活を傳へよう。この天平八年のは八年六月に發航して、九年正月に歸京したのであるが、大使阿倍禮麻呂は、對馬にて死去し、副使大伴三中は病に罹つて、他の人と共に入京するを得ず。三月になつてやつと三中等は入京するを得た。その年の夏以來九州から始めて諸國に疫病が流行して、大官の死するものも多かつたのは、或はこの船がもたらしたものであるまいか。しかもこの度の使節は成功せず、新羅の國が常の禮を失ひて使の旨を受けなかつたので、紛糾を生じてゐる。今萬葉集に載せてある歌に、彼の地に渡つてからの作品の見えぬのは、遺憾であるが、その途上の困難と、家郷を思ふ心の切なるとは、見得るであらう。この一團の歌は、使人中の某が筆録したものと見えて、作者の名のあるものゝ外に、作者の名を逸してゐるものも多い。推測するに、副使大伴三中の筆録で、作者の名なきは三中の歌ではないかと思はれる。

○新羅に遣さえし使人等 別を悲みて贈答し 及海路に情を働み思を陳

へ 并に所に當りて誦詠せる古歌

君が行く 海邊の宿に 霧立たば 吾が立ち嘆く 息と知りませ

【原文】遣新羅使人等 悲別贈答 及海路働情陳 思并當所誦詠之古歌

君之由久 海邊乃夜杼爾 奇里多多婆 安我多知奈氣久 伊伎等之理麻勢

【題意】新羅に遣はされた使人等が、別を悲んで贈答し、また情を憫み、思を陳べた歌、並にその所々で誦詠した古歌で、これは以下の遣新羅使の歌の總題である。なほ本集の目録には、一層詳しく、「天平八年丙子夏六月、遣使新羅國之時、使人等、各悲別贈答、及海路之上働旅陳思作歌、並當所誦詠古歌一百四十五首」とある。この中の誦詠した古歌は、本書には省略した。この歌は、遣新羅使の一人の妻の歌であるが、誰とも知られない。或は、前に記したやうに大伴三中の妻であらうか。夫の出發に際し、別を惜んで詠んだ歌である。

【口譯】貴方のお出でになる海邊の宿に霧が立つたら、そはわたくしの立ち嘆く息と御承知下さい。
 【釋義】あが立ち嘆く 自分の起ちて嘆く。ナゲクは、長き息をつく。口から息を出すによつて、それが凝つて、君が旅先の霧とならうの意である。

秋さらば 相見むものを 何しかも 霧に立つべく 嘆きしまさむ

右十一首贈答(九首略)

【原文】秋佐良婆 安比見牟毛能乎 奈爾之可母 奇里爾多都倍久 奈氣伎之麻佐牟

右十一首贈答

【題意】前の歌に對する、使人の答歌である。

【口譯】秋になつたなら、又會はうものを。何とて霧に立つやうに嘆いておいでなさいませうぞ。

【釋義】秋さらば 秋になつたならば。何しかも 何か。シは助辭。嘆きしまさむ シは助辭。嘆き坐さむ。嘆

いておいでになりませう。上に何かがあるから、何とて嘆いておいでにならうぞ、嘆くには及びませぬの意。
 【餘論】この年の遣新羅使の任命は、續紀に二月に大使阿倍繼麻呂を任じたことが見える。それで六月に發航したのであるが、最初の豫定では、秋になつたら歸つて來るものと思つてゐたらしい。然るに、途中困難多く、遂に年を越してしまつたのである。

夕されば 茅蝸來鳴く 生駒山 越えてぞ吾が來る 妹が目を欲り

右の一首は秦間滿

【原文】由布佐禮婆 比具良之伎奈久 伊故麻山 古延豆曾安我久流 伊毛我目乎保里

右一首秦間滿

【題意】出發の用意をして難波に來たのであるが、なほ大和に残した妻の戀しさに、小閑を得て生駒山を越えて會ひに行つた時の作。秦間滿は、傳未詳である。滿は麻呂に同じ。

【口譯】夕方になれば、茅蝸の鳴いてゐる生駒山を、越えてわたしは來ることである。わが妻に會ひたさに。

【釋義】茅蝸來鳴く 茅蝸はカナカナ蟬。來鳴くの來は、軽く添へたもの。生駒山 攝津の難波から、寧樂の都に行くに、途上にある山で、大和河内の國境を成してゐる。妹が目を欲り メは、容儀、容姿の義。妹の容を見たさに。路の後深津島山しましくも君が目見ねば苦しかりけり(卷十一、二四二三)

妹に逢はず あらば術無み 石根履む 生駒の山を 越えてぞ吾が來る

三 遣新羅使

大判官壬生宇太麻呂の作で、旋頭歌である。

【口譯】あの奈良の都に行く人も欲しいものだ。この旅行く船の泊つてゐる處を告げよう。

【釋義】あまによし 枕詞。行く人もがも ガは願望の助辭。草枕 枕詞。海路に用ゐてゐるのは、旅を修飾するものとして慣用せられたからである。

【餘論】昔は、旅に出では、ほとんど家郷に音信を通ずる手段が無い。一度出では、どこにどうしてゐるかは、全く封じ込められてゐる。それだけに、途上に逢ふ人に、家郷への音信を托するのが、唯一の慰めであつた。しかもその人にも容易に逢ふことは無い。人界から全く離れ去つてゐるやうな寂しさを歌つたものとして、感が深い。

海原を 八十島隠り 來ぬれども 奈良の都は 忘れかねつも

三三六一

【原文】海原乎 夜蘇之麻我久里 伎奴禮杼母 奈良能美也故波 和須禮可禰都母

【口譯】海上を多くの島に隠れて來たけれども、奈良の都は忘れることが出来なかつた。

【釋義】八十島隠り 八十島は島數の多いのをいふ。多島海なる瀬戸内海を漕いで來たさまが、よく表れてゐる。忘れかねつも カネは得ざる意の動詞。

五三六一

わが故に 妹歎くらし 風早の 浦の沖邊に 霧たなびけり

○風速の浦に泊泊てし夜 作れる歌二首(一首略)

【原文】風速浦船泊之夜作歌二首

和我山惠仁 妹奈氣久良之 風早能 宇良能於伎徹爾 奇里多奈妣家利

【題意】安藝の國の風速の浦に船を泊めた夜に作つた歌の一つである。

【口譯】わたし故に、妻は長息をついてゐると見える。この風早の浦の沖の方に霧がたなびいてゐる。

【釋義】妹歎くらし わが妻は歎いてゐることと思はれる。ラシは根據ある推量の辭。

【餘論】前に出した、門出の時に妻の作つた、君が行く海邊の宿に霧立たば我が立ち嘆息と知りませ(三五八〇)の歌を思ひ出して、海上の沖に霧の立つてゐるのを見て、妹が嘆いてゐるのであらうと思ひやつたのである。

七三六一

石走る 激流もとどろに 鳴く蟬の 聲をし聞けば 京都し思ほゆ

右の一首は 大石莖麻呂

【原文】安藝國長門島 船泊磯邊作歌五首

伊波婆之流 多伎毛登杼呂爾 鳴蟬乃 許惠乎之伎氣婆 京師之於毛保由

右一首 大石莖麻呂

【題意】安藝の國の長門の島に船を泊めて、磯邊で作つた歌で、この一首は大石莖麻呂の作である。

【口譯】石上を走る激流の音もとどろに鳴り、折しも、鳴く蟬の聲を聞けば、奈良の都が思はれる。

【釋義】石走る激流もとどろに 石走るは、水の石上を走ることの叙述。トドロは、物音の擬音。聲をし聞けば

京都し思ほゆ 二つのシは、共に助辭。

【餘論】 激流の音と蟬の聲と、騒々しい物音の中に詩趣を見出してゐる。蟬の聲が望郷の情を催すやうに歌つてゐる。

八三六一

山河の 清き川瀬に 遊べども 奈良の都は 忘れかねつも

【原文】 夜麻河泊能 伎欲吉可波世爾 安蘇倍舒母 奈良能美夜古波 和須禮可禰都母

【口譯】 山川の清い川瀬に遊ぶけれども、奈良の都は忘れることが出来なかつた。

【釋義】 山河の 山中を流るる川である。しばらく船から上陸して、島の山川に遊んでゐる。

〇三六二

戀繁み 慰めかねて 茅蜩の 鳴く島かげに 廬するかも

【原文】 故悲思氣美 奈具左米可禰氏 比具良之能 奈久之麻可氣爾 伊保利須流可母

【口譯】 戀の繁さに慰め得ずして、茅蜩の鳴く山陰に、假舎を作つてゐることである。

【釋義】 戀繁み 家郷の戀しさの繁さに。茅蜩の 既に秋づいて來たことを表してゐる。鳴く島かげに 島の小陰になつてゐるところを島陰と稱してゐる。船から上つて宿るのである。廬するかも イホリは、假の小舎掛けをいふ。

我が命を 長門の島の 小松原 幾代を経てか 神さびわたる

一三六二

【原文】 和我伊能知乎 奈我刀能之麻能 小松原 伊久與乎倍豆加 可武佐備和多流

【口譯】 この長門の島の小松原は、どれほどの代を経て、かくは物古りてゐるのであらうか。

【釋義】 我が命を 命を長く欲する意に、長門の枕詞となつてゐる。長門の島の 島の名である。門は海峡をいふので、長門は、長い海峡を爲してゐることを表す。小松原 小松と云つても、相當の松で、小に深く係るべきではない。幾代を経てか 小松原が神さびてゐるのは、幾代を経ての事かと疑つてゐる。神さびわたる 神さぶは、樹木には、繁つて老大になつてゐるのにいふが普通である。神様としての威力のある意である。ワタルは、神さびて經過してゐることをいふ。

○長門の浦より船出せし夜 月の光を仰ぎ觀て作れる歌三首

吾のみや 夜船は榜ぐと 思へれば 沖邊の方に 櫂の音すなり

【原文】 從長門浦船出之夜 仰觀月光作歌三首

和禮乃未夜 欲布禰波許具登 於毛徹禮婆 於伎敵能可多爾 可治能於等須奈里

【題意】 長門の島の浦から船出をした夜、月の光を仰ぎ見て作つた歌。

【口譯】 吾のみ夜船を榜ぐのかと思つてゐると、沖の方にも舟を榜ぐ音がする。

【釋義】 吾のみや ヤは疑問の辭。夜舟を榜ぐのは、吾のみかと疑つてゐる。吾は、わが舟の意。思へれば 思ひてあれば。櫂の音すなり カヂは水を打つて船を進めるところの、櫂の音。櫂の音すなり

【餘論】 遠き海路を行くこととて、海上の靜穩に乗じて、夜も舟を進めて行く。然るに沖の方にも、やはり夜舟

四三六二

を榜ぐものがあると、かつは惟しみかつは懐しみ思つたのである。海上の夜に、他の舟の櫂音を聞く、もの静な景である。物音のある寂しさが描かれてゐる。

○大島の鳴門を過ぎて 再宿を経たる後 追ひて作れる歌二首

これやこの 名に負ふ鳴門の 渦潮に 玉藻刈るとふ 海人嬢子ども

右の一首は 田邊秋庭

【原文】 過大島鳴門而經再宿之後 追作歌二首

巨禮也已能 名爾於布奈流門能 宇頭之保爾 多麻毛可流登布 安麻乎等女杼毛

右一首 田邊秋庭

【題意】 周防の國に入つて、大島の鳴門を過ぎて、二夜過ぎた後に、かの鳴門の景を思ひ出して詠んだ歌で、これは田邊秋庭の作である。鳴門といふは、潮流が激して音を立てる海峡である。

【口譯】 これがあの名に負ふところの鳴門の渦まく潮に、玉藻を刈るといふ、海人の嬢子どもよ。

【釋義】 これやこの これがあ何々であるかと感歎する語法。この歌では鳴門の渦潮を指定してゐる。「これやこの倭にしては我が戀ふる紀路にありといふ名におふ背の山」(卷一、三五) 名に負ふ 名として持つてゐる、名に背かない、名前どほりの。渦潮に 潮流が狭い海峡に激して、渦巻を起すのである。玉藻刈るとふ 玉藻は美しい藻。トフはトイフ。海人嬢子ども 海人の嬢子どもよと、嬢子たちを見て感歎してゐる。

【餘論】 玉藻刈るとふと、といふを用ゐて説明したのは、實際海上の勞役に服してゐるのを見たのではないこと

を表す。鳴門ほとりの嬢子を詠んで、あの渦潮の中でさる業もするかと感歎してゐる。遊行女婦の如き嬢子であらうも知れぬ。

浪の上に 浮宿せし夜 あど思へか 心愛しく 夢に見えつる

【原文】 奈美能宇倍爾 宇伎禰世之欲比 安杼毛倍香 許己呂我奈之久 伊米爾美要都流

【題意】 前の歌に和して、大島の鳴門に居た嬢子たちの、夢に見えたことを歌つてゐる。前の歌の作者田邊秋庭が夢に見たのを聞いて、ある人が歌つたのであらう。

【口譯】 浪の上に浮宿をした夜、いかに思つてか、心に愛すべく夢に見えたのであらう。

【釋義】 あど思へか アドは、ナド、何と。モヘカは、思へばかの意。何と思つてか。激勵し誘導する意のアドモフとは別である。何と思ふの用例は「あどもへか阿自久麻山のゆづる葉の含まる時に風吹かすかも」(卷十四、三五七二)「あらたまの年の經行けばあどもふと夜渡る吾を問ふ人や誰」(卷十、二一四〇)「兒毛知山若雞冠木のみみづまで寝もと吾は思ふ、汝はあどか思ふ」(卷十四、三四九四)。心愛しく カナシは愛すべくあるをいふ。

【餘論】 夢に家郷の妻が見えたのだと爲す解もあるが、前の歌と併せて二首の前に、大島の鳴門を過ぎて再宿の後追うて作るとあるから、鳴門の嬢子を夢みたと爲す方がよい。

○佐婆の海中にして たちまち逆風漲浪に遇ひ漂流し 經宿して後 幸に順風を得 豊前の國下毛の郡分間の浦に到着す 是に艱難を追ひ但

九三六四

み 悽惻して作れる歌八首(七首略)

鴨じもの 浮宿をすれば みなわた か黒き髪に 露を置きにける

【原文】 佐婆海中 忽遭逆風漲浪 漂流 經宿而後 幸得順風 到著豊前國下毛郡分間浦 於是追怛艱難 悽惻作歌八首

可母自毛能 宇伎禰乎須禮婆 美奈能和多 可具呂伎可美爾 都由曾於伎爾家類

【題意】 周防の國の佐婆の海中で、忽に逆風と漲浪とに遭ひて漂流し、一夜を経て後に、幸に順風を得て、豊前の國の下毛の郡の分間の浦に到着した。よつて後から艱難をいたんで、心傷みて作つた歌の一つ。

【口譯】 鴨のやうに浮宿をすれば、眞黒な髪に露が置いたことである。

【釋義】 鴨じもの 鴨のやうにの意で、浮宿を修飾する枕詞。みなわた 枕詞で、黒を修飾する。語義については二説ある。代匠記に、鮭の背腸の意で、鮭の腸を鹽漬として食用に供するが黒いからいふとあり、又本集に蟪腸とも書いてあるので、蟪といふ小貝の腸の黒いよるといふ説もある。か黒き髪に カは接頭語で、か青の例もある。

【餘論】 内海の航路ではあるが、逆風に遭うて難義をし夜も碇泊するを得ずして、幸に小康を得て後に、この歌を得たのである。海上に漂流して、壯士の黒髪に露の置いた情景を描いて、枕詞を二つも用ゐながら緊張を失はない。歌詞中に悽惻の意を表す語を用ゐないのも、却つて深みがある。

○筑紫の館に至り 遙に本郷を望み 悽み愴きて作れる歌四首(三首略)

五三六五

今よりは 秋づきぬらし あしひきの 山松かげに 茅蜩鳴きぬ

【原文】 至筑紫館 遙望本郷 悽愴作歌四首

伊麻欲理波 安伎豆吉奴良之 安思比奇能 夜麻末都可氣爾 日具良之奈伎奴

【題意】 筑紫の館に至りて、遙に倭の方を遠望して、心中に傷んで詠んだ歌の一つ。筑紫の館は、九州にある、官の旅館で、今の博多附近にあつたことと思はれる。

【口譯】 今からは秋になつたと思はれる。山の松蔭に茅蜩が鳴いた。

【釋義】 秋づきぬらし 秋づくは、秋に親む意。色づく家づく等の例である。

【餘論】 萬葉時代人は、夏があまりにも凌ぎ難いので、秋の來るのを喜ぶ心から、自然の景象によつて、秋の來るけはひを覺る心が發達してゐた。これは冬が過ぎて春が來る時にも同様である。それで茅蜩の鳴くのを聞いては、秋もいよ／＼來たといふ氣持を抱くのである。しかも今は、その心が、秋にもなつたら、故郷に歸れるであらうと豫想してゐたのに、いまだ日本をも離れぬうちに秋になつて來ると、季節の推移の速なのを歎く心が強くなつてゐる。かく季節の移りを茅蜩によつて知ることには變らないが、それによる感じは、異つてゐるのである。

○七夕に天漢を仰ぎ觀 各所思を陳べて作れる歌三首

秋萩に にほへる吾が裳 ぬれぬとも 君が御船の 綱し取りてば
右の一首は大使

六三六五

欲理は類聚古集等による。

【原文】七夕仰觀天漢各陳所思作歌三首

安伎波疑爾 爾保敝流和我母 奴禮奴等母 伎美我美布禰能 都奈之等理豆婆
右一首大使

【題意】その筑紫の館に於いて、やがて七月七日を迎へて七夕の宴を開いて、この一首は、大使阿倍磯麻呂の作つた歌。織女の心になつて詠んでゐる。

【口譯】秋萩の花摺りにしたわたくしの裳は濡れても、君が御船の綱を取つてならば、満足でございます。

【釋義】秋萩にほへるわが裳 秋萩の花に染めて美しくしたわが裳。濡れぬとも 天の河を漕いで來た牽牛の舟の綱を取つて岸に引き寄せようとして、濡れたとしても意。君がみ船の 君は男星、すなはち牽牛をいふ。綱し取りてば シは助辭。男星の舟の綱を取つてならば、よし濡れても満足であるの意。

【餘論】海上を航して來た人の歌として、み舟の綱をとるといふ點が、意味深く感ぜられる。

七三六五

年にありて 一夜妹に逢ふ 牽牛も 我に益りて 思ふらめやも

【原文】等之爾安里豆 比等欲伊母爾安布 比故保思母 和禮爾麻佐里豆 於毛布良米也母

【口譯】一年の内で一夜だけ妻にあふ牽牛星も、わたしに勝つて物は思はないであります。

【釋義】年にありて 一年の内にあつて。一年中で。思ふらめやも ラメは助動詞ラムの活用。ヤは反語の助辭。思ふことであらうか、否余に勝つては思ふまい。

【餘論】この歌は、七夕に寄せて、作者自身の、妻を思ふ情の激しさを叙してゐる。わが思は、年に一度妻に逢

ふといふ、あの牽牛の思にも優つてゐるの意。

八三六五

夕月夜 影立ち寄り合ひ 天の河 こぐ舟人を 見るが羨しさ

【原文】由布豆久欲 可氣多知與里安比 安麻能我波 許具布奈妣等乎 見流我等母之佐

【口譯】夕月の影が立ち添うて、天の河を漕ぐ舟人を見るは、羨しいことである。

【釋義】夕月夜 夕の月で、夜は添へたまでである。影立ち寄り合ひ 月の影が立ち添うて寄り合つて。こぐ舟人 牽牛のことをいふ。見るが羨しさ 見るが羨しきことよと歎じてゐる。

【餘論】一年に一度だけ逢ふ牽牛が羨しいと、作者自己の境遇を憐んでゐる。七夕の夜更けて、今や牽牛が織女に逢ふ爲に、天の川に舟を漕ぎ出してゐる。と想像して、遠來の使人たちの心は、堪らなくなつてゐるであらう。

九三六五

大使の第二男

秋風は 日に時に吹きぬ 吾妹子は 何時とか我を 齋ひ待つらむ

【原文】海邊望月作歌九首

安伎可是波 比爾家爾布伎奴 和伎毛故波 伊都登加和禮乎 伊波比麻都良牟

大使之第二男

三遣新羅使

【題意】 同じく筑紫の館に泊つてゐる時のことであらう。海邊に月を見て詠んだ歌で、この一首は、大使阿倍繼麻呂の第二子の作である。

【口譯】 秋風は日に時に吹いてゐる。わが妻は何時歸ることと、神を祭つてわたしを待つてゐるであらうか。

【釋義】 日に時に吹きぬ 日毎に吹いてゐる。吾妹子は 妻をいふ。この人も相當の年配であつたと見える。

夕されば 秋風寒し 吾妹子が 解き濯ひ衣 行きて早著む

【原文】 由布佐禮婆 安伎可是左牟思 和伎母故我 等伎安良比其呂母 由伎豆波也伎牟

【口譯】 夕方になると、秋風が寒い。わが妻の解き洗つた衣を、早く行つて著たいものだ。

【釋義】 解き濯ひ衣 汚れた衣服を、解いて濯つて、仕立てた衣服である。

【餘論】 當時も、衣食の事は、婦人の掌る所であつた。わが妻の、夫の爲に、解き洗つてさつぱりとして仕立てた衣服を思つてゐる旅情がいとほしい。

○筑前の國志麻の郡の韓亭に到りて 船泊てて三日を経たり 時に夜月の光皎皎として流照せり たちまち此の華に對して 旅情悽噓す 各

心緒を陳べて聊裁せる歌六首(二首略)

大君の 遠の御門と 思へれど 日長くしあれば 戀ひにけるかも

右の一首は大使

【原文】 到筑前國志麻郡之韓亭 船泊經三日 於時夜月之光皎皎流照 奄對此華 旅情悽噓 各陳心緒

聊以裁歌六首

於保伎美能 等保能美可度登 於毛敬禮杼 氣奈我久之安禮婆 古非爾家流可母

右一首大使

【題意】 筑前の國の志麻郡の韓亭に到つて、船を泊めて三日を経た。時に夜月の光皎皎として照り渡つてゐる。そこでこの華やかなる景に對して、旅情が痛み心に泣かれる。各心中の思を述べて作つた歌。この一首は、大使阿倍繼麻呂の作。韓亭は、韓といふ地の驛舎で、韓地との交通の衝に當つてゐるから、この名を得たのであらう。

【口譯】 天皇陛下の御外門と思ふけれども、日が多く積つたから、戀しく思はれることである。

【釋義】 大君の遠の御門と わが國土の外邊の地をいふ。(二八一頁參照)。け長くしあれば ケナガクは、時日も多く經過することの形容。シは助辭。戀ひにけるかも 家を戀しく思つたの意。

旅にあれど 夜は火燭し 居る我を 闇にや妹が 戀ひつつあるらむ

右の一首は大判官

【原文】 多妣爾安禮杼 欲流波火等毛之 乎流和禮乎 也未爾也伊毛我 古非都追安流良牟

右一首大判官

【題意】 同じ時に、大判官壬生宇太麻呂の詠んだ歌。

【口譯】 旅にあるけれども、夜は火を燭して居るわたしを、わが妻は燈火もない中で戀ひてゐるでありませうか。

【釋義】 闇にや妹が 闇中に居てか、わが妻がの意である。心の闇に云々と説くのはわるい。

【餘論】 當時燈油は貴重であつたので、普通の家には、照明の用には木を焚くだけであるが、それもせずに妻は闇中にゐるか、家郷を思つたのが人情のあついでである。

○三六七

韓亭 能許の浦浪 立たぬ日は あれども家に 戀ひぬ日は無し

【原文】 可良等麻里 能許乃宇良奈美 多多奴日者 安禮孺母伊徹爾 古非奴日者奈之

【口譯】 韓亭の能許の浦浪は、立たぬ日はあるけれども、家に戀ひぬ日とは無い。

【釋義】 韓亭 前出。能許の浦浪 能許は地名である。延喜式に筑前國能巨島牛牧とあつて、島である。今福岡灣内の殘島か。

一三六七

ぬばたまの 夜渡る月に あらませば 家なる妹に 逢ひて來ましを

【原文】 奴婆多麻乃 欲和多流月爾 安良麻世婆 伊徹奈流伊毛爾 安比豆許麻之乎

【口譯】 夜渡る月であつたならば、家なる妻に逢つて來ようものを、さうで無くて残念である。

【釋義】 ぬばたまの 枕詞。あらませば 實際に反する假設の語法。あつたならば。しかしさうでは無いがの意。逢ひて來ましを 逢つて來ようもの。しかしそれが出来ないの意。ヲは詠歎の助辭。

四三六七

草枕 旅を苦しみ 戀ひ居れば 可也の山邊に さを鹿鳴くも

【原文】 引津亭船泊之作歌七首

久左麻久良 多婢乎久流之美 故非乎禮婆 可也能山邊爾 草乎思香奈久毛

【題意】 筑前の引津の驛亭に船を泊めて作つた歌で、以下二首は、大判官壬生宇太麻呂の作である。

【口譯】 旅の苦しさに家を戀ひ居れば、折しも可也の山邊に、妻戀ひに壯鹿が鳴いてゐる。

【釋義】 可也の山邊に 可也山は、絲島郡にある山の名。さを鹿鳴くも サは接頭語。ヲシカは男鹿。モは感歎の助辭。

五三六七

沖つ浪 高く立つ日に 遇へりきと 都の人は 聞きてけむかも

【原文】 於吉都奈美 多可久多都日爾 安徹利伎等 美夜古能比等波 伎吉豆家牟可母

【口譯】 沖の浪が高く立つ日に逢つてゐたと、都の人は聞いたことであらうか。

【釋義】 都の人は 家人を主として、大體に都の人と云つてゐる。

六三六七

彌夜故類聚古集
等由西本願寺本
都等は西本願寺本
等由西本願寺本

天飛ぶや 雁を使に 得てしかも 奈良の都に 言告げ遣らむ

【原文】 安麻等夫也 可里乎都可比爾 衣豆之可母 奈良能彌夜故爾 許登都導夜良武

【口譯】 天を飛ぶ雁を、使者として得たいものである。奈良の都に、言葉告げて遣らうと思ふ。

【釋義】 天飛ぶや ヤは助辭で、詠嘆の意を表す。天飛ぶ雁と續く語法である。得てしかも 得たいことであるよの意。

○壹岐の島に到りて 雪連宅滿が忽鬼病に遇ひて死去りし時 作れる

歌一首并に短歌

天皇の 遠の御門と 韓國に 渡る我が夫は 家人の 齋ひ待たねか 壘かも 過しけむ 秋さらば 歸りまさむと たらちねの 母に申して 時も過ぎ 月も経ぬれば 今日か来む 明日かも来むと 家人は 待ち戀ふらむに 遠の國 いまだも 著かず 大倭をも 遠く離りて 石が根の 荒き島根に 宿する君

【原文】 到壹岐島 雪連宅滿 忽遇鬼病 死去之時 作歌一首并短歌

須賣呂伎能 等保能朝廷等 可良國爾 和多流和我世波 伊徹妣等能 伊波比麻多禰可 多太未可母 安夜麻知之家牟 安吉佐良婆 可徹里麻左牟等 多良知禰能 波波爾麻乎之豆 等伎毛須疑 都奇母倍奴禮婆 今日可許牟 明日可蒙許武登 伊徹比等波 麻知故布良牟爾 等保能久爾 伊麻太毛都可受 也麻等乎毛 登保久左可里豆 伊波我禰乃 安良伎之麻禰爾 夜杼理須流君

乎朝廷、麻
夜杼理は
類聚古集
等による

八三六八

【題意】 壹岐の島に到つた時に、一行の中の雪宅滿が、忽疫病に罹つて、死んだ時、これを悼んで詠んだ歌。鬼病は、恐しい病であらう。

【口譯】 天皇陛下の外圍の御門として、朝鮮に渡るわが友は、家の人が神を祀つて待つて居ない故か、座所でも過失をしたのか、秋になつたなら歸つておいでになるであらうと、母に申して、時も過ぎ月も経たから、今日は来るであらうか、明日は来るであらうかと、家人は待つて戀うて居るであらうに、遠方の國に、いまだ著かないで、倭をも遠く離れて、岩が根の荒い島根に、宿をする君よ。

【釋義】 韓國 朝鮮で、新羅をさしてゐる。渡るわが夫は セは男子に對していふ稱である。齋ひ待たねか 齋ひて待たねばかの意で、條件法。カは疑問の助辭。壘かも過しけむ 旅に人の出た跡は、その人の居た壘を大切に、不淨のことの無いやうにしたものである。然るに、その壘に、何か過失をしたのであらうかの意である。母に申して 妻が、夫の母に申して。宿する君 死んで埋葬せられるのを、宿すると叙してゐる。

○反歌二首

伊波多野に 宿する君 家人の いづらと我を 問はば如何に言はむ

【原文】 反歌二首

伊波多野爾 夜杼里須流伎美 伊徹妣等乃 伊豆良等和禮乎 等波婆伊可爾伊波牟

【口譯】 伊波多野に宿する君を、家人が、何處にと問はば、何と云ひませうぞ。

【釋義】 伊波多野に 壹岐の島の石田郡の野であらう。家人の 死んだ宅滿の家の人である。いづらと吾を問は

九三六八
等波婆は
代匠記に
よる

ば 歸京した時に、わが夫は何處ぞと問はばである。吾を問ふは、吾に問ふの意。

【餘論】 家なる妻は、旅に出た夫の死んだのをも知らずに待つてゐる。一行の人々の歸京した時に、待ちに待つた夫の見えない驚は、思ひやるだに哀である。

世の中は 常斯くのみと 別れぬる 君にやもとな 吾が戀ひ行かむ

右の三首は 挽歌

【原文】 與能奈可波 都禰可久能未等 和可禮奴流 君爾也毛登奈 安我孤悲由加牟

右三首 挽歌

【口譯】 世の中の常はかくのみと、死に別れて行つた君に、自分は、よしなく戀ひつつ行くことであらう。

【釋義】 世の中の常かくのみと 世の中の常態は、この通り無常のものであるとて。死んだ人は、無常を悟つて死んだやうに云つてゐる。君にやもとな 君にや戀をして行かうかの意。ヤは疑問の助辭。モトナは、よしなく、根據なく。

わたつみの 恐き路を 安けくも 無く惱み來て 今だにも 喪無く行かむと 壹
岐の海人の 最手の卜筮を 兆灼きて 行かむとするに 夢の如 道の空路に わ
かれする君

【原文】 和多都美能 可之故伎美知乎 也須家口母 奈久奈夜美伎豆 伊麻太爾母 毛奈久由可牟登 由吉能安

末能 保都手乃宇良徹乎 可多夜伎豆 由加武士須流爾 伊米能共等 美知能蘇良治爾 和可禮須流伎美

【題意】 以下の長短歌三首も、同じく雪宅滿の死去を悼んだ歌で、作者は六鯖とある。六鯖は、六人部鯖麻呂の略稱であらうと云はれてゐる。

【口譯】 海上の恐しい道を、安き心も無く惱んで來て、せめて今だけでも凶事無く行かうと、壹岐の海人の上手な卜筮を、龜の甲を焼いて行かうとするに、夢のやうに道の空へ行く道に別れ行く君よ。

【釋義】 海若のかしこき道を ワクツミは、海神で、海洋の意に用ゐる。カシコキは恐しい。安けくも無く惱み來て 安けくも無くと二句に跨つて云つてゐる。五七調のやうやく素れ行かうとするを示してゐる。今だにもせめて今だけでも。喪無く行かむと モは凶事。壹岐の海人の最手の卜筮を 壹岐は、大陸との交通の要地であつて、早くから大陸風の卜筮を傳へ、これをよくする者を出した。ホツテは最上の手技の意。兆灼きて 兆は、卜の表れた兆をいふ。又卜筮は、最初は、鹿の肩骨を灼いて、これによつて現はれる形によつて卜つたものであるから、後に龜甲を使ふやうになつても、それが残つて肩灼きてといふともいふ。卜筮をして航海の可否を下して進んで行くので、遣唐使の中には、卜者が居たのであるから、遣新羅使の中にも居たであらう。さうして雪宅滿の雪連、すなはち壹岐連で、その祖は壹岐の島出身であるから、この人が、一行中の卜者であつたらうと云ふ(萬葉集新考)。 夢の如 死去の、夢のやうに、思ひがけぬをいふ。道の空路 ソラヂは、空に行く道で、一行は、この地上を行くに、ひとり天空へと志して行く君よの意である。

○反歌二首

五三六九

昔より 云ひける言の 韓國の 辛くも此處に 別するかも

【原文】 反歌二首

牟可之欲里 伊比祁流許等乃 可良久爾能 可良久毛已許爾 和可禮須留可聞

【口譯】 昔から云つて来たことだが、韓國の辛くもこゝに別れをする君よ。

【釋義】 昔より云ひける言の 昔から云つてゐる言葉の通り。韓國の辛くも 韓國の辛くと、カラを重ねて云つてゐる。韓國の辛しといふことは、昔から云ひ來つたことであるがの意。

六三六九

新羅へか 家にか歸る 壹岐の島 行かむたどきも 思ひかねつも

右の三首は 六鯖の作れる挽歌

【原文】 新羅奇傲可 伊傲爾可加反流 由吉能之麻 由加牟多登伎毛 於毛比可禰都母

右三首 六鯖作挽歌

【口譯】 新羅へ行かうか、家に歸るべきか、壹岐の島で、行くべき手段も、思ひ得ぬことである。

【釋義】 新羅へか 新羅へ行くべきかと迷つてゐる心を表してゐる。家にか歸る 家に歸るべきか。壹岐の島 ユキの島ユカムたどきと、類音を重ねてゐる。タドキは、手段、方法。思ひかねつも たよりにする宅満が死んだので、行くか歸るか、迷はれて、思ひ得ないの意。

○對馬島の淺茅の浦に到りて船泊てし時 順風を得ず 經停まること五

七三六九

百船の 泊つる對馬の 淺茅山 時雨の雨に もみたひにけり

【原文】 到對馬島淺茅浦船泊之時 不得順風 經停五箇日 於是瞻望物華 各陳慟心作歌三首

毛母布禰乃 波都流對馬能 安佐治山 志具禮能安米爾 毛美多比爾家里

【題意】 對馬の淺茅の浦に到つて、船泊りをした時に、順風を得ないで、五箇日を経過した。こゝに風物を望み見て、各痛む心を述べて詠んだ歌。

【口譯】 多くの船の碇泊する對馬の淺茅山は、時雨の雨に紅葉したことである。

【釋義】 百船の泊つる 以上は對馬のツに係る序である。時雨の雨 秋の雨を時雨といふ。もみたひにけり モミタヒは、動詞モミツの連続状態を表するもので、草木の黄變するをいふ。雨に降りこめられてゐる間に、山の木の葉が、だん／＼色が變つて行つたことを寫してゐる。

○竹敷の浦に船泊てし時 各心緒を陳べて作れる歌十八首(十七首略)

竹敷の 玉藻靡かし 榜ぎ出なむ 君が御船を いつとか待たむ

右の二首(一首略)は對馬の娘子名は玉槻

【原文】 竹敷浦船泊之時 各陳心緒作歌十八首

多可思吉能 多麻毛奈婢可之 已藝低奈牟 君我美布禰乎 伊都等可麻多牟

右二首 對馬娘子名玉槻

三 遣新羅使

五三七〇

【題意】對馬の竹敷の浦に船を泊めた時、各心緒を述べて作つた歌。この一首は、對馬の娘子、名は玉槻といふものの作である。この娘子は、遊行女婦で、旅客の宴席を助けるを業としたものと思はれる。

【口譯】竹敷の浦の玉藻靡かせて漕ぎ出るでせうが、その貴方の御船を、何時とお待ち申しませうか。

【釋義】玉藻靡かし 船を漕ぎ出すにつれて、浦の玉藻が靡くので、靡かせて漕ぎ出ると云つてゐる。漕ぎ出なむ 漕ぎ出るであらうと、豫想してゐる。連體形。

玉敷ける 清き渚を 潮満てば 飽かず吾行く 還るさに見む

右の一首は大使

六三〇

【原文】多麻之家流 伎欲吉奈藝佐乎 之保美豆婆 安可受和禮由久 可反流左爾見牟

【口譯】玉を敷いてある清い渚であるのを、潮が満ちて来れば、飽きないがわたしは行くのである。歸り途にまた見ませう。

【釋義】玉敷ける 玉を敷いたやうなと云ふべきを、直に玉敷けると云つてゐるのは、美しさを強調しようとしてである。飽かず吾行く 潮が満ちて来るので、止むを得ず立ち去る意である。終止形。

【餘論】この一首は、大使阿倍繼麻呂の作であるが、繼麻呂は、新羅へ渡つたまま、彼の地で死んでしまつた。その人が、對馬の竹敷での歌を留めてゐるのが、永き世の記念ともなり、かつ、歸るさに見ようと歌つてゐるのが殊に哀である。

○筑紫に廻り来て 海路京に入るに 播磨の國の家島に到りし時 作れ

る歌五首

家島は 名にこそありけれ 海原を 吾が戀ひ來つる 妹もあらなくに

【原文】廻來筑紫 海路入京 到播磨國家島之時 作歌五首

伊敷之麻波 奈爾許曾安里家禮 宇奈波良乎 安我古非伎都流 伊毛母安良奈久爾

【題意】途中に多くの困難があり、大使以下死歿するものもあつたが、ともかく殘の者は、九州に廻り来て、海路で京に入らうとし、播磨の國の家島まで来て、詠んだ歌五首。

【口譯】家島は、名ばかりであつた。海原をわたしの戀うて來た妻も居ないことであるよ。

【釋義】名にこそありけれ 家島といふは、たゞ名であつて、その實の伴はないことであつたの意。

草枕 旅に久しく あらめやと 妹に言ひしを 年の經ぬらく

【原文】久左麻久良 多婢爾比左之久 安良米也等 伊毛爾伊比之乎 等之能倍奴良久

【口譯】旅には久しくはないであらうと、わが妻に云つたのに、年が經たことよ。

【釋義】あらめやと アラメヤは反語。年の經ぬらく 年の經ぬることよ。都を出發してから、豫想外に時日を費して、はや翌年になつたことを歌つてゐる。

わきもこを 行きて早見む 淡路島 雲居に見えぬ 家づくらしも

三遣新羅使

五四五

八三七一
廻は西本願寺本等による。

九三七一

〇三七二

【原文】 和伎毛故乎 由伎豆波也美武 安波治之麻 久毛爲爾見延奴 伊敏都久良之母
 【口譯】 わが妻を、行つて早く見よう。淡路島が雲ゐる方に見えた。家が近づくやうである。
 【釋義】 雲居に見えぬ 雲居は、雲の居るところ。空の彼方。家づくらしも 家に馴染み來るやうである。家が近づくと思はれる。モは感動の助辭。前に、秋づきぬらしの句があつた。

ぬばたまの 夜明しも船は こそ行かな 御津の濱松 待ち戀ひぬらむ

【原文】 奴婆多麻能 欲安可之母布禰波 許藝由可奈 美都能波麻末都 麻知故非奴良武
 【口譯】 夜通しも、船は漕いで行きたいものである。御津の濱松、待ち戀うてゐるであらう。

【釋義】 ぬばたまの 枕詞。夜明しも 夜を明しても、夜通しに、終夜にも。漕ぎ行かな 願望の句法。御津の濱松待ち戀ひぬらむ 御津は、攝津の御津で、船出をしたところ。松と待ちと同音を重ねてゐる。濱邊の松が吾等を待つてゐるであらうの句意。御津の濱松が懐しい意である。家人が待ち戀ふ意とするはわるい。家人が御津に來てゐるとは豫想してゐない。「いざ子ども早も日本へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」(卷一、六三)

大伴の 御津の泊に 船泊てて 龍田の山を 何時か越え往かむ

【原文】 大伴乃 美津能等麻里爾 布禰波豆豆 多都多能山乎 伊都可故延伊加武

【口譯】 大伴の御津の泊に船を泊めて、龍田の山を、何時越えて行くことであらうか。

【釋義】 大伴の御津の泊に 大伴は、御津の地を含む一帯の地名である。泊は、船を泊むるところ。龍田の山を

御津から大和へ行くに越えてゆく山。出發の時には生駒山を越えたことを歌つてゐた。生駒の方が順路であらうが、龍田の方が道が平易なのであらう。

【餘論】 以上の五首は、長い旅を終つて、いよいよ家郷近くなつて、一層望郷の念に堪へやらず、一時も早く歸りたいと思ふ心をよく表してゐる。

四 遣渤海使

渤海國は、文武天皇の朝に、大祚榮といふ者が、滿洲、東蒙古の地に、國を開いたのが始で、聖武天皇の以後、使節を通じた。萬葉集に見えるのは、天平寶字二年の遣渤海使であるが、遣唐使、遣新羅使を叙した縁を以つて、こゝにこれを録する。

○二月十日 内相の宅にて 渤海大使小野田守の朝臣等を饒する宴の歌

一首

蒼海原 風波なびき 行くさ來さ つつむことなく 船は早けむ

右の一首は 右中辨大伴宿禰家持誦せし

【原文】 二月十日 於内相宅 饒渤海大使小野田守朝臣等宴歌 一首

阿乎宇奈波良 加是奈美奈妣伎 由久左久佐 都都半許等奈久 布禰波波夜家無

四 遣渤海使

右一首 右中辨大伴宿禰家持未誦之

【題意】 天平寶字二年の二月十日、紫微内相藤原仲麻呂の家にて、遣渤海大使小野田守等を饒した時の宴に、大伴家持の詠んだ歌。しかし宴に誦まかつた歌である。小野田守は、天平勝寶五年に、遣新羅使となつて、行つたこともある。

【口譯】 蒼海原に風や波が立たずに、往く時も歸る時も、災害無くして、船は早いでありませう。

【釋義】 風波靡き 靡きは、伏せられて立たないのをいふ。風も波も立たずに。行くさ來さ 行く時も歸る時も。つつむことなく つつみなくといふに同じで、災害をツツミといふ。災禍無く、無事にの意。

五 葛井 廣 成

葛井廣成、もとの姓は白猪史、養老三年に新羅に使し、同四年、葛井連の姓を賜つた。天平二十年八月、車駕その家に幸して留宿せられてゐる。詩歌文章に練達した才人である。著者は、かつて、懷風藻は廣成の編するところにあらざるなきかを疑つて、一文を草したことがある。歌は、三首しか傳はつてゐないが、その中に特に興趣の多いものがあるから、この一項を作る。

○冬十二月十二日 歌舞所の諸王臣子等 葛井連廣成の家に集ひて宴せる歌二首

比來古儂盛に興りて 古歳漸く晚れぬ 理宜しく共に古情を盡して 同じく古

歌を唱ふべし 故に此の趣に擬へて すなはち古曲二節を獻る 風流意氣の士

儂し此の集の中に在らば 争ひて念を發し 心々に古體に和せよ

わが屋戸の 梅咲きたりと 告げやらば 來ちふに似たり 散りぬともよし

【原文】 冬十二月十二日 歌舞所之諸王臣子等 集葛井連廣成家宴歌二首

比來古儂盛興 古歳漸晚 理宜共盡古情 同唱古歌 故擬此趣 軋獻古曲二節 風流意氣之士

儂在比集之中 争發念 心々和古體

我屋戸之 梅咲有跡 告遺者 來云似有 散去十方吉

【題意】 天平八年十二月十二日、歌舞所の諸王臣子等が、葛井廣成の家に集つて宴をした時の歌で、序がついてゐる。序も廣成の作であらう。

【序意】 この頃古風の儂が盛に興つて、しかも古き年はこゝに暮れようとしてゐる。道理上、共に昔風の感情を盡して、共に古い歌を唱ふがよい。故にこの趣に擬へて、古い曲の歌二首を獻じます。風流意氣を解する方が、もしこの宴の中に在らば、争つて念を發して、心々にこの古體の歌に和して下さい。

【口譯】 わが宿の梅が咲いてゐると告げてやつたなら、おいでなさいと云ふやうである。さて散つても差支な

【釋義】 告げやらば 人に告げやらばの意。來ちふに似たり 來よといふに似てある。散りぬともよし 梅が咲いたと云つてやつたならば、もう梅には用はないから散つてしまつてもよいの意。

【餘論】古今集、戀四、讀人しらす、

月夜よし夜よしと人に告げやらば來ちふに似たり、待たずしもあらずといふ歌は、この歌と類した發表形式を取り、たゞ梅を月に代へただけである。散りぬともよしは、媒介に用ゐた梅に對して放心の狀を示し、待たずしもあらずは、云ひやつた言に纏綿してゐる。萬葉の歌には、意を以つて言を補ふべき、古風なところがあり、古今の歌には、人を待つ心の動搖を巧に描いてゐる。同型の歌でありながら、別種の趣の生じてゐるのは五句の相違にもとづくものである。

春さらば ををりにををり 鶯の 鳴く吾が山齋ぞ 止まず通はせ

【原文】 春去者 乎呼里爾乎呼里 鶯之 鳴吾山齋 不息通爲

【口譯】 春になつたならば、鶯が枝を踏み撓めて、鳴くわたくしの庭園でございます。常にお訪ね下さい。

【釋義】 **ををりにををり** ヲヲリは、撓むをいふ。花が咲きををると常に用ゐる語で、その時は、枝が撓むまでに花咲くことである。このヲヲリにヲヲリを、花の咲いた形容とする説もあるが、それは無理で、鶯が枝うつりして、枝も撓みに撓み鳴くと續く句法と思はれる。**鳴く吾が山齋ぞ** シマは、庭園、林泉をいふ。**止まず通はせ** 止まずは、止むことなく、常に。通はせは、お通ひなさい。常に訪ね來よの意である。

【餘論】 この廣成の歌二首は、序に古曲二節といひ、歌儂所の人々を集めての宴の歌でもあるので、その時歌はれたもの、もしくは歌ひ得べきものとして、意味がある。古い曲に適するやうに作られた替歌の意義を有するものであらう。

六 元興寺の僧

元興寺の僧は、何者とも知られない。身に才がありながら、世に遇せられざることを歎いてゐる。僧中に才能あるものを見ると、還俗せしめて登庸した時代の次を承けて、僧形のまゝで國家から重く見られ、社會的に勢威を振はうとしつゝあつた時代である。さういふ時代といふことを念頭に於いて、彼の歌を讀んで見よう。

○十年戊寅 元興寺の僧のみづから嘆く歌一首

白珠は 人に知らえず 知らずともよし 知らずとも 吾し知られば 知らずともよし

右の一首は 或る人云はく 元興寺の僧 獨覺めて智多けれども いまだ顯聞するところあらず 衆諸押侮す よりて この僧この歌を作りて みづから身の才を贊むるなり

【原文】 十年戊寅 元興寺之僧自嘆歌一首

白珠者 人爾不知所 不知友縦 雖不知 吾之知有者 不知友任意

右一首 或云 元興寺之僧 獨覺多智 未有顯聞 衆諸押侮 因此僧作此歌 自贊身才也

【題意】 天平十年に、元興寺の僧のみづから嘆いた歌。この僧は獨覺めて智慧も多かつたけれども、いまだ顯れ

ず、人々が押し侮つてゐた。よつて僧がこの歌を作つてみづからその才を贖したのであるといふ。

【口譯】 白珠は人に知られずにあるが、知られないでもよい。人が知らないでも、自分一人知つて居れば、それでよいのだ。

【釋義】 白珠は 自分の才能を譽へてゐる。人に知らえず 人に知られない。知らずともよし 人は知らないでも差支ない。吾し知れらば シは助辭、自分が知つてゐるならば。

【餘論】 才能を抱いて、しかも遇せられざる嘆は、いつの代にもあることで、同情もせられるが、みづから知つてゐればそれでよいと爲したところに、この僧の貴いものがある。譽を白珠に借りたのは、下和の故事などによつたのであらう。

七 中 臣 宅 守

中臣宅守は、父祖を審にしない。藏部の女孀、狹野の茅上の娘子に通じて越前に流された時の相聞の歌を卷十五に留めてゐる。當時の風流才子といふべきであらう。六十三首の贈答のうちには、おのづから目留むべきも無いではない。流されたのは何時とも知られないが、天平十二年の大赦には赦されなかつたところを見ると、いまだ間の無い頃であつたであらう。後に赦されて官位にも就いてゐる。

○中臣朝臣宅守と狹野の茅上の娘子と 贈り答ふる歌

三三七二

あしひきの 山路越えむと する君を 心に持ちて 安けくもなし

【原文】 中臣朝臣宅守 與狹野茅上娘子贈答歌

安之比奇能 夜麻治古延牟等 須流君乎 許許呂爾毛知且 夜須家久母奈之

【題意】 中臣宅守と狹野の茅上の娘子と贈答した歌で、以下二首は、宅守の流されようとするに臨み、娘子の贈つた歌である。この題詞は、目錄には、「中臣朝臣宅守、娶藏部女孀狹野茅上娘子之時、勅斷流罪、配越前國也。於是夫婦相嘆易別難會、各陳慟情贈答歌六十三首」とあつて、詳審である。

【口譯】 山路を越えようとする君を、心に持つてゐますと、安きそらもございません。

【釋義】 あしひきの 枕詞。山路越えむとする君 越前に流されて山路を越えようとしてゐる君で、宅守をいふ。

君が行く 道の長手を 繰り疊ね 焼き亡ぼさむ 天の火もがも

右の四首は(二首略)娘子の別に臨みて作れる歌

【原文】 君我由久 道乃奈我氏乎 久里多多禰 也伎保呂煩散牟 安米能火毛我母

右四首 娘子臨別作歌

【口譯】 貴方のおいでになる道の長い道程を繰り疊んで、焼き滅してしまふ天の火も欲しいことでございます。
【釋義】 道の長手を 長手のテは、行く手、稻の手中、奥手などの手と同じで、その方面をさしていふ。従來、長手は長道に同じとしてゐるが、必、道の長手と云つてゐるところを見ると、長道と長手とは別であらう。た

四三七二

だし防人の歌に道の長道(卷二十、四三四一)が一つある。繰り疊ね 原文に久里多多禰とあるが、舊説、古葉略類聚鈔に、禰を彌に作つてゐるのによつて、繰り疊みの誤だとしてゐる。ところがあひにく、古葉略類聚鈔は、禰を悉く彌に作つてゐるので、證據にならない。元來タタミは、古くナ行にも活用したことは、タタナヅク、タタナハルの語の存するによつても知られる。よつてこゝも原文のまゝに、繰り疊ねと讀むべきものと思はれる。

【餘論】 この歌は、内容に激しいところがあるので、人の注意を惹いてゐる。思ひ餘つて、天の火を望んだ娘子の熱情が、よく現れてゐる。

八三三七二

あをによし 奈良の大路は 行きよけど この山道は 行き悪しかりけり

【原文】 安乎爾與之 奈良能於保知波 由吉余家杼 許能山道波 由伎安之可里家利

【題意】 以下三首は、宅守が、道に上つて詠んだ歌である。

【口譯】 かの奈良の大路は行きよいけれども、この山道は行き難いことである。

【釋義】 あをによし 枕詞。行きよけど 行き易けれど。行き悪しかりけり 山路の行き難いことを云つてゐる。殊に思はぬ旅であることが、加つて、山路の行きよく無いのである。

九三三七二

愛しと 吾が思ふ妹を 思ひつつ 行けばかもとな 行き悪しかるらむ

【原文】 宇流波之等 安我毛布伊毛乎 於毛比都追 由氣婆可母等奈 由伎安思可流良武

【口譯】 可愛く思つてゐる彼の女を、思ひつつ行く故にか、致し方無く行き悪しくあるのであらうか。

【釋義】 行けばかもとな カは疑問。モトナは、理由なく、わけもなく、よしもなくの意。行き悪しかるらむ 山路の行き難い理由を推量してゐる。

【餘論】 前の歌に、山路の行き難いことを叙してあるのに續いて、否山路の難きにあらず、愛すべく思へる妹を思ひつつ行けば、行き難いのであらうかと疑つてゐる。連作として、二首を併せて、全き意を見るべき歌。

畏みと 告らずありしを み越路の 手向に立ちて 妹が名告りつ

右の四首(三首略)は 中臣朝臣宅守 道に上りて作れる歌

【原文】 加思故美等 能良受安里思乎 美故之治能 多武氣爾多知豆 伊毛我名能里都

右四首 中臣朝臣宅守上道作歌

【口譯】 わが妻の名を告るは、憚られて云はなかつたが、この越の國に通ずる山上に立つて、遂に妹が名を呼んだことである。

【釋義】 畏みと告らずありしを 人の名を呼ぶ時は、その人の魂は、これに引かれて寄り來るものである。それで妹は戀しいけれども、その名を呼ぶことは、恐るべくあつたので、呼ばずに居たものをの意。告るは、高聲に物いふこと。恐みとは、恐るべきが故にと。み越路の 越の國に行く通路。手向に立ちて タムケは、手向の祭をする場所。道中の安泰を祈つて、山の上など、手向の祭をする場所が定つてゐる。タウゲ(峠)とは別語だが、場所はしばしば一致する。手向は、峠の外、山麓や岡の路傍でもするし、海津、また海上でもする。妹

〇三三七三

が名告りつ 遂に戀しさに堪へやらずして、妹の名を呼んだのである。

六三七四

人の植うる 田は植ゑまさず 今更に 國別れして 吾はいかにせむ

【原文】 比等能宇字流 田者宇惠麻佐受 伊麻左良爾 久爾和可禮之豆 安禮波伊可爾勢武

【題意】 以下六首は、娘子から贈つた歌。

【口譯】 世の人の植ゑる田はお植ゑにならないで、今更、國を別れることとなつて、わたくしはどういたしませう。

【釋義】 人の植うる田は植ゑまさず 人並の事はしないでの意。人は田を植ゑるのに、貴方は田をお植ゑにならないで。田を植ゑるは、譬喩で、借り來つたままでである。國別れして 國を別れて住んで。

七三七四

わが宿の 松の葉見つつ 吾待たむ 早歸りませ 戀ひ死なぬとに

【原文】 和我屋度能 麻都能葉見都都 安禮麻多無 波夜可反里麻世 古非之奈奴刀爾

【口譯】 わたくしの宿の松の葉を見ながらお待ち申しませう。はやくお歸り下さいませ。戀ひ死なぬ内に。

【釋義】 松の葉見つつ 松は待つと音が似てゐるから、特に松を持ち出したのである。ただ松の葉と、細く云つたのがこの歌の力強いところ。戀ひ死なぬとに トは内で、わたくしの戀ひ死なぬ内にの意。「わが夫子をな巨勢の山の喚子鳥君喚びかへせ、夜の更けぬとに」(卷十、一八二二)

八三七四

他國は 住み悪しとぞいふ 速けく 早歸りませ 戀ひ死なぬとに

【原文】 比等久爾波 須美安之等曾伊布 須卒也氣久 波也可反里萬世 古非之奈奴刀爾

【口譯】 他國は住みにくいさうであります。速に早くお歸りなさいませ。わたくしの戀ひ死なぬ内に。

【釋義】 他國は 他國は。

【餘論】 この歌も、前の歌に引き續いて、早歸りませ戀ひ死なぬとにの意を強調したものと見るべきである。前の歌と併せて全形を爲すものである。

九三七四

他國に 君をいませて 何時までか 吾が戀ひ居らむ 時の知らなく

【原文】 比等久爾爾 伎美乎伊麻勢豆 伊都麻豆可 安我故非乎良牟 等伎乃之良奈久

【口譯】 他國に貴方を居させて、いつまでかわたくしの戀ひて居るべき時の知られぬことであります。

【釋義】 君をいませて 君を居らしめて、居させて。時の知らなく 時の知らぬことよの意。

〇三七五

天地の そこひのうらに 吾が如く 君に戀ふらむ 人は實あらじ

【原文】 安米都知乃 曾許比能宇良爾 安我其等久 伎美爾故布良牟 比等波左禰安良自

【口譯】 天地の限の内に、わたくしのやうに君に戀うてゐるでせう人は、ほんとにございますまい。

【釋義】 そこひのうらに ソコヒは、限、果。ウラは、内である。天地の範囲内ではの意。人は實あらじ サネは、誠、眞實。

三七五

逢はむ日の 形見にせよと 手弱女の 思ひ亂れて 縫へる衣ぞ

右の九首(三首略)は娘子

【原文】 安波牟日能 可多美爾世與等 多和也女能 於毛比美多禮互 奴敝流許呂母曾 右九首娘子

【口譯】 逢ふでありませう日に、悲しかつた時代の形見にせよと思つて、た弱き女の心が亂れて、縫つた衣でございます。

【釋義】 逢はむ日の形見にせよと この衣は、やがて逢ふであらう、その喜の日に、形見として悲しく別れてゐた時代を思ひ起す種にせよとて。せよは、男に對して云つてゐる。手弱女の 娘子みづから云つてゐる。縫へる衣ぞ 縫つた衣を男に贈つたのである。

三七六

魂は あしたゆふべに 魂ふれど 吾が胸痛し 戀の繁さに

【原文】 多麻之比波 安之多由布敝爾 多麻布禮杼 安我牟禰伊多之 古非能之氣吉爾 以下三首も、娘子から贈つた歌である。

【口譯】 魂は、朝夕に鎮め祭りますが、それでも戀の繁きにより、わたくしの胸は堪へ難くございます。

【釋義】 魂は 娘子みづからの魂である。魂ふれど 人の體から、靈魂の浮かれ出るのを鎮める祭を、タマフリといふ。朝夕にその鎮魂をすれども意。吾が胸痛し 魂が浮かれ出るによつて、體も平ならず、胸痛く苦し

くあるよしをいふ。

三七七

歸りける 人來たれりと いひしかば ほとほと死にき 君かと思ひて

【原文】 可敝里家流 比等伎多禮里等 伊比之可婆 保登保登之爾吉 君香登於毛比互

【口譯】 歸つて來た人が來たと云つたから、貴方かと思つて、殆死にさうになりました。

【釋義】 歸りける 歸つて來る。ほとほと死にき ホトホトは殆で、あやふく死んだ、あはや死にさうになつたの意。春されば蝶羸なす野のほととぎす、ほとほと妹に逢はず來にけり(卷十、一九七九)

【餘論】 天平十二年八月に、穗積老等を赦して入京せしめた時、宅守等は赦されなかつたことが傳つてゐる。その穗積老等の入京した時の作であらう。

我が夫子が 歸り來まさむ 時のため 命残さむ 忘れたまふな

右の八首(五首略)は 娘子

【原文】 和我世故我 可反里吉麻佐武 等伎能多米 伊能知能己佐牟 和須禮多麻布奈 右八首娘子

【口譯】 貴方様の歸つておいでになるでせう時の爲に、命を残しておきませう。お忘れ下さいますな。

三七七

今日もかも 京なりせば 見まく欲り 西の御廐の 外に立てらまし

七中臣宅守

【原文】 家布毛可母 美也故奈里世婆 見麻久保里 爾之能御馬屋乃 刀爾多豆良麻之

右二首 中臣朝臣宅守

【題意】 宅守から贈った歌である。

【口譯】 今日も亦、もし都に居ることであつたならば、見たいと思つて、西の御厩の外に立つてゐるであらうものを。

【釋義】 今日もかも 今日もかやうであらうかと疑つてゐる。都なりせば 流されずに都に居たならば。見まく 欲り 見むことを願つて。見たいと思つて。西の御厩の 西の御厩は、右馬寮をいふ。外に立てらまし 外に立ちあらまして、外に立つてゐるであらうものを。然し身は越前にあつてさうではないの意。

【餘論】 青年宅守が、女を見ようと思つて、右馬寮の外に立つてゐたであらう情景が思ひやられる。以上、宅守と狭野の茅上の娘子との贈答は、前にもいふやうに、當時の廢類的な青年の生活を代表するものとして、柔弱な歌風を留めてゐるが、流罪といふやうな脅威を背景としてゐるだけに、さすがに見られるものも存してゐる。深沈なものを留めぬのは、年が若いからであらう。

八 石上乙麻呂

石上乙麻呂は、左大臣石上麻呂の第三子である。名家の子として、才氣穎秀、官位頻に進んだが、天平十一年三月、久米若賣わかひめに對するによりて、土佐の國に流された。その間の詩を録して、銜悲藻二卷があつたといふが、そ

は今傳はらない。ただ懷風藻に四首を載せるだけである。十三年九月の大赦に、乙麻呂も赦されて入京したものであるべく、爾來官位進んで、天平勝寶二年九月に、中納言從三位兼中務卿を以つて薨じた。歌は數首を傳へてゐるが、中にも、土佐に流される時の作が、最異色がある。

○石上乙麻呂の卿の土佐の國に配せられし時の歌三首并に短歌

石の上 布留の尊は 手弱女の 惑に縁りて 馬じもの 繩取り附け 獸じもの
弓矢圍みて 大君の 命 恐み 天離る 夷邊に退る 古衣 又打の山ゆ 還り來ぬかも

【原文】 石上乙麻呂卿 配土佐國之時歌三首并短歌

石上 振乃尊者 弱女乃 惑爾縁而 馬自物 繩取附 肉自物 弓 圍而 王 命恐 天離 夷部爾退 古衣 又打山從 還來奴香聞

【題意】 天平十一年三月、石上乙麻呂が土佐の國に流された時の歌。乙麻呂自身の作であらうが、婦人の位置に身を置いて叙してゐる。

【口譯】 石の上の布留の御方は、美人に惑つた爲に、馬のやうに繩を取り著け、獸のやうに弓矢で圍んで、天皇の命令の恐多さに、遠い田舎に行きます。あの眞土山から、還つて來ませぬ。

【釋義】 石の上布留の尊は 乙麻呂をさしてゐる。その姓を石上といふより、石の上といひ、これを枕詞として布留の尊はと云つてゐる。布留は、石の上といふ土地の中の小地名で、石の上布留と云ひ慣はしたもの。こゝ

には乙麻呂の姓を縁として、乙麻呂その人を布留の尊といふので、乙麻呂の別名ではない。尊は、尊稱。布留は、普通に古いといふことを連想する語であるが、いくらか自嘲の意味で、布留の尊と稱してゐるのであらう。手弱女の惑によりて 婦女子の惑によつて、女に惑うた爲に。馬じもの 馬のやうに。繩取り著け 繩を繫けて。獸じもの 獸のやうに。命恐み 勅命の恐しさに。天さかる 枕詞。夷方に退る 田舎の方に罷る。マカルは退出する。古衣 枕詞。古い衣を又打つといふ意に、マタウツ山、即マツチ山に續く。眞土の山ゆ 紀の川の右岸にあつて、大和から紀州に行くに越えてゆく山。土佐に行くには、紀州に出て船を發したものである。還り來ぬかも 還り來ぬことよと詠嘆したのである。

二〇、一
一〇
〇二

大君の 命恐み さし竝ぶ 國に出でますや 吾が夫の君を 懸けまくも ゆゆ
し恐し 住吉の 現人神 船の舳に 領き賜ひ 著き給はむ 島の埼埼 依り賜は
む 磯の埼埼 荒き浪 風に遇はせず つつみなく 疾あらせず 急けく 還し賜
はね 本の國邊に

刺並、繫
巻裳、は
づれも元
唇校本等
草管見は
元唇校本
長と本居
る。に宜よ

【原文】 王 命恐見 刺竝 國爾出座耶 吾背乃公矣 繫卷裳 湯湯石恐石 住吉乃 荒人神 船舳爾 牛吐賜
付賜將 島之埼前 依賜將 磯乃埼前 荒浪 風爾不令遇 莫管見 身疾不有 急 令變賜根 本國部爾
【口譯】 天皇の勅命のかしこさに、竝んでゐる國においてになる、わが夫の君を、申すも恐多き住吉の、現人神
は、船の舳に主宰し給ひ、舟のお著きになる島の埼々、お依りになる磯の埼々に、荒い浪風に遭はせずに、障
りや病あらせずに、速にもとの國邊にお歸し下さいませ。

【釋義】 さし並ぶ 枕詞。サシは、意を強くするだけの語。隣を修飾してゐる。卷九には、原文もと刺並之とあ

つて、サシナミノと讀んでゐたが、元唇校本等の古本には、之の字が無いから、それもサシナラブと讀むべき
ものである。國にいでますや ヤは、連體形につく助辭で、國においてになるわが夫の君の意に、下へ續く。
繫けまくも忌々し恐し 口にかけて申さむことも憚りあり恐しき意。ユニシは忌むべくあること。ユニシカシコ
シは、終止形ではなく、連體の古法である。愛し妹、うつし世などの例である。住吉の現人神 住吉の神は、
底筒の男の命、中筒の男の命、上筒の男の命で、海路を守る神である。アラヒトカミは、アラは顯れる意で、
人と形を現す神をいふ。古く、住吉の神の現形したことが傳へられてゐる。領き給ひ ウシハクは領知する、
占領する意。著き給はむ 船の著くであらうの意で、連體形。つつみなく 原文、寛永版本には、草菅見とあ
る。菅は論なく管なること、古本によつて證せられる。さて仙覺以來、クサツツミと訓んでをり、眞淵は枕詞
としたのであるが、本居宣長の説に草は莫の誤として、ツツミナクと讀むに従ふ。ツツミは、災難に遭つて憤
み居る意。不祥の事をいふ。それが無く無事にの意である。疾あらせず 疾病あらしめずの意。すむやけく
速にの意の形容詞の副詞形。還し給はね この一首は、すべて、住吉の現人神に對して、ものいふ形を取つて
ゐるので、その神に對して、早くお歸し下さいと願ふのである。もとの國邊に 出發した國の方に。

【餘論】 この歌は、古くは、初からわが夫の君をまで、切つて、これを一首の短歌とし、その以下を別の長歌
としてゐたものである。本居宣長に至つて、出座の下に字を脱してゐるとして、「いでますはしきやし吾が夫の
君をかけまくも」云々と續くと爲した。今宣長の説に従つて併せて一首とし、ただ字句を補はないで、もとの
儘としておく。これは五七調に適はぬところもあるが、もと／＼古調の歌であるから、多少變則のところはあ

つて然るべきである。この外にも文字を補ふ説はあるが、首肯せられない。

二〇二

父公ちひさみに 吾は愛子あたごぞ 母刀はと自よに 吾は愛兒あたごぞ 參まの昇のぼる 八十やそ氏ぢ人の 手向たむけする
恐かしこの坂さかに 幣奉はにまつり 吾はぞ退たがる 遠とほき土佐とさ道を

【原文】 父公爾 吾者眞名子叙 妣刀自爾 吾者愛兒叙 參昇 八十氏人乃 手向爲 恐乃坂爾 幣奉 吾者叙退 遠杵土左道矣

手向爲は本
元曆校よる
等にはよる
退長に本居
る宜長によ

【題意】 前の二首が、婦人の位置にあつて作つてゐるに對して、これは、男子の立場として詠んでゐる。

【口譯】 父君に取つては、わたしは愛する子であるし、母上に取つても愛する子である。上京して來る多くの氏の人が、手向の祭をする恐しい坂に、幣を奉つて、わたしは退去します。遠き土佐への道を。

【釋義】 吾は愛子ぞ マナゴは、愛する子。自分は愛する子であることをの意。母刀自に トジは家事を司る婦人の稱。參まの昇のぼる 田舎から都をさして參上して來る意で、氏人に續く。八十やそ氏ぢ人の 多くの氏々の人の。恐かしこの坂に 大和から河内に出る道に、恐の坂といふがあつたことは、天武天皇紀に見えてゐるが、そは高安の附近と思はれるから、眞土山を通つて紀州に出るといふ土佐路に適しない。この恐の坂は別で、神ありて恐るべき坂を云つたものと思はれる。幣奉はにまつり すなはち手向の祭をして、行路の安全を願ふのである。我はぞ退たがる 原文もと吾者叙追とあつた。本居宣長の説に従つて、追を退の誤とする。自分は退出する。遠とほき土佐道を 土佐への遠路なるものをの意。

三〇二

○反歌一首

大崎の 神の小濱せまはまは 狭せまけども 百船ももふねびと人も 過すぐといはなくに

【原文】 反歌一首

大崎乃 神之小濱者 雖小 百船純毛 過迹云莫國

【口譯】 大崎の神の小濱は、狭いけれども、多くの船の人も、過ぎ去ると云はれてゐないのに。

【釋義】 大崎の神の小濱は 大崎は、紀伊の國の和歌の浦の南にある小灣である。神の小濱は、神工をほめたのである。百船ももふね人も 原文、百船純毛とある。今一つ用例があるが、純をヒトと讀ませるのは、略解に、純一の義に取つたものと云つてゐる。過すぐといはなくに 過ぐとは云はぬことであるに。百船人も停るところなるにの意。大崎の濱は、百船人の停る處なるに、自分は停り得ずして、土左路に立出する意である。

【餘論】 乙麻呂が土佐に流されたのは、相當の年配になつてからであらう。以上傳ふる處の歌は、いづれも擬古の風に近く、物語中の歌のやうな感じを與へてゐるのは、彼が文藝練達の士であることを證してゐる。

九門部の王

門部の王は、皇胤紹運錄に、長の親王の孫、川内の王の子と傳へてゐる。天平年間に大原真人の姓を賜ひ、十七年四月、大藏卿從四位上を以つて卒した。天平六年の歌垣には、頭となつたことが傳はり、才藝の士であつたとが知られる。

○門部の王 東の市の樹を詠みて作れる歌一首後姓大原真人氏を賜へり

ひひかしの 市の植木の 木垂るまで 逢はず久しみ うべ戀ひにけり

【原文】 門部王 詠東市之樹作歌一首後賜姓大原真人氏也

東 市之殖木乃 木足左右 不相久美 宇倍戀爾家利

【題意】 門部の王が、都の東の市の樹を詠んだ歌。市は東西に置いたので、東といふ。樹は、道路に蔭を成す爲に樹を植えたのである。

【口譯】 東の市の植木の繁茂して枝が垂れるまで、逢はないで久しくなつた故、誠に戀をしたことである。

【釋義】 市の植木の 市に植ゑつけた木の。木垂るまで 繁つて枝が垂れるまで。植ゑた木がだん／＼勢力を得

て繁つて来るまでといふので、久しい時を表してゐる。逢はず久しみ 逢はないで久しい故に。うべ戀ひにけ

り 宇倍の下、もと吾の字があつたが、古本によりて除く。ウベは、首肯せられる意で、ほんに、げにもとい

ふほどの意。

【参考】 西の市の歌

西の市にただ一人出て眼並べず買へりし絹の商じこりかも(卷七、一二六四)

○出雲守門部の王 京を思ふ歌一首後大原真人氏を賜へり

飲宇の海の 河原の千鳥 汝が鳴けば 吾が佐保川の 念ほゆらくに

●三 一 〇
後賜姓大原真人氏也
原は神田
也は神田
本等に
宇倍は類
聚古集等
による

【原文】 出雲守門部王 思京歌一首後賜大原真人氏也

飲海乃 河原之乳鳥 汝鳴者 吾佐保河乃 所念國

【口譯】 飲宇の海の河原の千鳥よ、そなたが鳴けば、わが故郷の佐保川の思はれることである。

【釋義】 飲宇の海の 原文、飲海乃とあつて、宇に當る字が無い。省略して書いたのであらう。出雲の意宇郡の

海、萬葉集攻證には、飲を食の過多なる義に取つてオホと讀み、出雲椽安宿奈杼麻呂の歌「大君の命かしこみ

於保乃宇良をそがひに見つつ都へのぼる」(卷二十、四四七二)の於保の浦と同地としてゐる。河原の千鳥 海に

流入する川口の原の千鳥である。その千鳥を呼びかけて歌つてゐる。汝が鳴けば 千鳥よ、そなたが鳴けば。

わが佐保川の 大和の京の佐保川で、親み馴れた地であるから、わがと云つてゐる。思ほゆらくに 思はれる

ことよの意。

【餘論】 佐保川には、しば／＼千鳥を詠み合せてゐる。飲宇の海に鳴く千鳥に誘はれて、千鳥鳴く佐保川が思ひ出されることを詠んでゐる。

一〇 湯原の王

湯原の王は、天智天皇の皇孫、志貴の親王の子で、光仁天皇の弟である。子として登志濃の王のあることが知られるだけで、何時世を去られたか未詳である。

湯原の王の歌は、短歌ばかりであるが十七首傳つてゐる。その歌の製作時代も詳でないが、大體天平年間の歌の

中に入つてゐる。その作風が、集中でも新しい方面を代表してゐるので特に注意せられる。以下歌についてその特色を見よう。

○湯原の王 芳野にて作れる歌一首

吉野なる 夏實の川の 川淀に 鴨ぞ鳴くなる 山かげにして

【原文】 湯原王 芳野作歌一首

吉野爾有 夏實之河乃 川余杼爾 鴨會鳴成 山影爾之氏

【題意】 湯原の王が、芳野で作られた歌。

【口譯】 吉野なる夏實の川の、川の淀みに鴨が鳴いてゐる。ちやうど山陰であつて。

【釋義】 夏實の川の 吉野にある夏實の川であるが、恐らくは、吉野川の一部の名稱であらう。川淀に ヨド

は、水の流れない、静なところ。川淀は、川の中で水流の静なところ。鴨ぞ鳴くなる 鴨が鳴くことよと詠歎

した調子。句切である。

【餘論】 静な山中の情景を寫した、よい歌である。吉野川の山陰の淵に鴨が鳴いてゐる。それだけであるが、

いかにも物静けさを見透した歌である。而してこの歌の表現技術が、直叙法によらずして、第四句で切り、第

五句は回顧の手段に出たのは、集中でも新しい時代の作者としての特色がある。著者が少年のころ、横濱に住

んでゐた時分、家兄が買つて來た佐佐木信綱博士の少年歌話といふ書を読んでから、萬葉集の歌として記憶し

た最初の歌が、この歌であつた。今この歌を釋し來つて、かの横濱の家を憶ふことが深い。

○湯原の王 酒を打つ歌一首

燒刀の 稜うち放ち 丈夫の 禱ぐ豊御酒に 吾酔ひにけり

【原文】 湯原王 打酒歌一首

燒刀之 加度打放 大夫之 禱豐御酒爾 吾醉爾家里

【題意】 湯原の王の、酒を打つ時の歌である。酒を打つは、一種の呪禁で、壽詞を唱へつつ、劍光を以つて、酒

を清める式と考へられる。この歌は集中天平五年の中に收めてある。

【口譯】 鋭い刀の切尖を振つて、勇士の祝ふ、このよい酒にわたしは酔つてしまつた。

【釋義】 燒刀の 火を以て鍛冶して作つた刀で、鋭い刀である。稜うち放ち カドは舊説にシノギの異稱として

ゐる。シノギは、刀の刃と峰との中間の、小高いところをいふ。しかしシノギを打ち放つといふことは意味を

成さない。カドはやはり刀の角で、刃の稜角と見るべく、切尖と解するがよいと思ふ。打放を、ウチハナツと讀

んで、丈夫の習性を叙してゐると爲す説もあるが、ウチはハナツの語勢を強めるもの。カドをウチハナツと

は、双先を鋭く放出することで、切り付ける意である。ウチハナチと讀んで、禱ぐことの叙述と見るがよい。

酒に切り付けて、悪靈を祓ふのである。丈夫の 丈夫は、劍を揮つて酒を祝ふ勇士で、湯原の王その人では無

い。禱ぐ豊御酒に 上古酒を飲むに當つては、まづ祝言を以つて酒を祝ひ、然る後に宴を聞く。サカホガヒの

本義である。トヨミキは、酒の豊満してゐることを讃めてゐる。

【餘論】 古來酒を讚める歌も多いが、この歌では、刀を抜いて酒を打つといふ、特殊な行事が描かれてゐる。そ

れがいかにも昔風の酒宴を思はせる材料となつてゐる。表現も卒直で力強い歌である。

四八 一五四

○湯原の王の 七夕の歌二首

牽牛の 念ひ坐すらむ 情ゆも 見る吾苦し 夜の更けゆけば

【原文】 湯原王 七夕歌二首

牽牛之 念座良武 從情 見吾辛苦 夜之更降去者

【題意】 以下二首は、湯原の王の、七夕を詠んだ歌である。

【口譯】 男星の思つてゐるであらう心よりも、それを見てゐるわたしの方が苦しい。夜の更けて行くに従つて。

【釋義】 牽牛の 一年に一度だけ、七月七日の夜に、織女星と逢ふことを許されてゐるといふ星の名。男性である。念ひ坐すらむ 思つておいでになるであらうと推量してゐる。連體形。情ゆも 心よりも。牽牛星の心よりも。見る吾苦し 吾は作者自身。

【餘論】 集中七夕の歌は多いが、この歌には、下界の人の心が強く表れてゐる點が看取される。天上の戀を、ただ見てゐるに堪へやらぬ、作者自身の焦燥の心を叙してゐる。大陸渡來の傳説を、その儘直譯した前時代の作に比して、一層自分等の生活に引きつけて解釋してゆく傾向の進んだことがわかる。

五八 一五四

織女の 袖つぐ三更の 五更は 河瀬の鶴は 鳴かずともよし

【原文】 織女之 袖續三更之 五更者 河瀬之鶴者 不鳴友吉

【口譯】 織女星が、袖に袖を續ける宵の、その明け方は、天の川に居る鶴は、鳴かないでもよい。

【釋義】 織女の 七夕傳説の女性の星で、機を織つてゐるといふので、タナバタといふ。袖つぐ三更の 女星の袖に、男性の袖を續けるので逢うた夜であることを表してゐる。三更は夜中。一夜を五更に分ち、初更より五更に至つて、その夜中の時間を表す。河瀬の鶴は 天の川を隔てて、牽牛と織女とは住んで居り、七夕には、それを渡つて牽牛が逢ひに行く和解せられてゐる。天の川といふので、多分鶴も住んでゐることと想像し、これを點出したのである。鳴かずともよし 鶴は曉に鳴くので、今曉に限つて、特に鳴いて曉を知らせないがよいといふのである。二星の相會に同情して詠んでゐる。

〇 一五五

○湯原の王の 鳴鹿の歌一首

秋萩の 散りの亂りに 呼び立てて 鳴くなる鹿の 聲の遙けさ

【原文】 湯原王 鳴鹿歌一首

秋芽之 落乃亂爾 呼立而 鳴奈流鹿之 音遙者

【題意】 湯原の王の、鹿の聲を詠んだ歌。

【口譯】 秋萩の散り亂れるに、妻を呼び立てて鳴くところの鹿の聲の遠いことよ。

【釋義】 呼び立てて 妻を呼び立てての意。

【餘論】 秋萩が散り亂れるので、鹿の心も、これに誘はれて、狂燥的になつて行く。その鹿の遠音を聞いた心で

ある。

○湯原の王の 蟋蟀の歌一首

夕月夜 心も萎に 白露の 置くこの庭に こほろぎ鳴くも

【原文】 湯原王 蟋蟀歌一首

暮月夜 心毛思努爾 白露乃 置此庭爾 蟋蟀鳴毛

【題意】 湯原の王の、蟋蟀を詠んだ歌である。蟋蟀は、コホロギと讀む。秋の夕、庭前にも室内にも鳴くやうに詠んでゐるから、今もいふコホロギのことであらう。

【口譯】 夕月のもとに、わが心も萎えるまでに、白露のおくこの庭に、蟋蟀が鳴いてゐる。

【釋義】 夕月夜 夜は軽く添へたものとして、ただ夕の月の意に用ゐてゐるものが多い。心もしぬに 心もうち萎えるまでに、心もなえくと(二九五頁参照)。こほろぎ鳴くも モは、詠嘆の辭。

【餘論】 この歌を、かの柿本人麻呂の

近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬに古思ほゆ

の歌に比較するに、この兩歌人の、時代の差ともいふべき相違が、はつきりと見られると思ふ。同じ、心もしぬにの句を用ゐてゐるのだが、人麻呂の歌は、近江の宮址の荒れたのを傷んで、かの聖朝を思つて、心もしぬに感激してゐるので、民衆としての感傷の上に立つてゐる。しかるに、湯原の王のは、庭前の小景、露のおく庭に蟋蟀が鳴くといふ細微な情景に胸を傷ましめてゐる。人麻呂の歌に、英雄譚仰の氣があるとすれば、これ

には凡人生活の一端が描かれてゐる。都會人としての作者の心は、物にふれて感じ易くなつてゐる。かういふ風に歌の作者の地位を、凡人の生活にまで引き下げたところに、この作者の特色はあつた。もとよりこれは時代の風潮であつて、この人一人の力ばかりではあるまいが、少くともそれを代表する一人であるとは云ひ得よう。

○湯原の王 娘子に贈れる歌一首

玉に貫き 消たす賜らむ 秋萩の 末わら葉に 置ける白露

【原文】 湯原王 贈娘子歌一首

玉爾貫 不令消賜良牟 秋芽子乃 宇禮和良葉爾 置有白露

【題意】 湯原の王が、ある娘子に贈つた歌。この娘子は誰とも知られないが、卷四に、湯原の王と娘子との贈答の歌十一首を載せてゐる。その同じ娘子であらう。

【口譯】 玉として緒に貫いて、消さないで戴きませう。秋萩の枝先のそそけた葉に置いてある白露を。

【釋義】 玉に貫き 玉と爲して緒に貫いて。消たす賜らむ 消たすは、消つの打消。露を消さないで。賜らむは、下さい、與へられぬの意。末わら葉に ウレは、草木の若い生長する枝先。ワワラハは、明白にはわかぬが、「海松の如わわけさがれる」(卷五、八九二)のワワケと、同じ語幹で、葉のそそけた破れたのをいふのであらうといふ。しかし秋萩の末葉の破れてゐるなどは疑問である。又略解の如く、ワワラハニを、葉と見ないで副詞と見る説もある。略解はワワラハニ置ける白露とし、新考は、ウレがワワラハであるといふ。

一一 遷 都

往古は、天皇御一代毎に、帝居を更める風であつたが、宮殿建築の發達と、これを圍む都會生活の發達とにより、歴代の遷都を不便とするに至つて、漸く帝都の固定を見るに至つた。平城の京に至つては、規模も宏大となり、これに附隨して官寺や名家の邸宅も經營せられたので、永久にこゝを帝都とせらるゝかに見えたが、天平十二年に、大宰大貳藤原廣嗣の叛するに及んで、車駕伊勢に幸し、幸に廣嗣の誅せらるゝに至つても、平城の京に還幸せられずして、十二月、山城の恭仁の宮に入らせ給ひ、こゝに新京を經營せしめられた。こゝに至つて、平城の京は廢京となり、恭仁の京は新京として仰がるるに至つた。しかも諸人、舊京に戀々として新京に遷るを好まなかつたことは、翌十三年閏三月に、今より後、五位以上、意のまゝ平城に住むことを得され。もし事故ありて應に退り歸るべくは、官符を被り賜りて然して後に聽せ。その平城に見在するは、今日の内を限りて悉皆に催し發たせといふ詔を下されたことによつても知られる。初平城の宮の大極殿并に歩廊を壊ちて、恭仁の宮に遷し造り、四年にして纔に終つたのであるが、十五年には更に紫香樂の宮を造つて、恭仁の宮の造作を止めた。紫香樂の宮は、近江の國甲賀の郡にあり、恭仁の宮から、山越しに到る處にある。天平十六年閏正月に、百官を集めて、恭仁と難波といづれを定めて都とせむと問ふに、恭仁の京の便宜なるを陳ぶるもの、五位以上二十三人、六位以下百五十七人、難波の京の便宜なるを陳ぶるもの、五位以上二十三人、六位以下百三十人であつた。更に巨勢奈氏麻呂、藤原仲麻呂をして市に就きて問はしむるに、市人は皆恭仁の京を都と爲し給はむことを願ひ、ただ難波を願ふもの一人、平城を願ふもの一人があつた。二月遂に難波の宮を皇都と定め給ふ勅を下された。この都も久しからず、翌十七年正月、俄に紫香樂の新京に遷り給うた。而して、その五月には恭仁の京に還り、ついで平城の京に行幸せられた。この時紫香樂の宮に人無く、盜賊充ちて、四邊の山には、山火事久しくして滅えなかつた。

○寧樂の故郷を悲みて作れる歌一首并に短歌

爲し給はむことを願ひ、ただ難波を願ふもの一人、平城を願ふもの一人があつた。二月遂に難波の宮を皇都と定め給ふ勅を下された。この都も久しからず、翌十七年正月、俄に紫香樂の新京に遷り給うた。而して、その五月には恭仁の京に還り、ついで平城の京に行幸せられた。この時紫香樂の宮に人無く、盜賊充ちて、四邊の山には、山火事久しくして滅えなかつた。

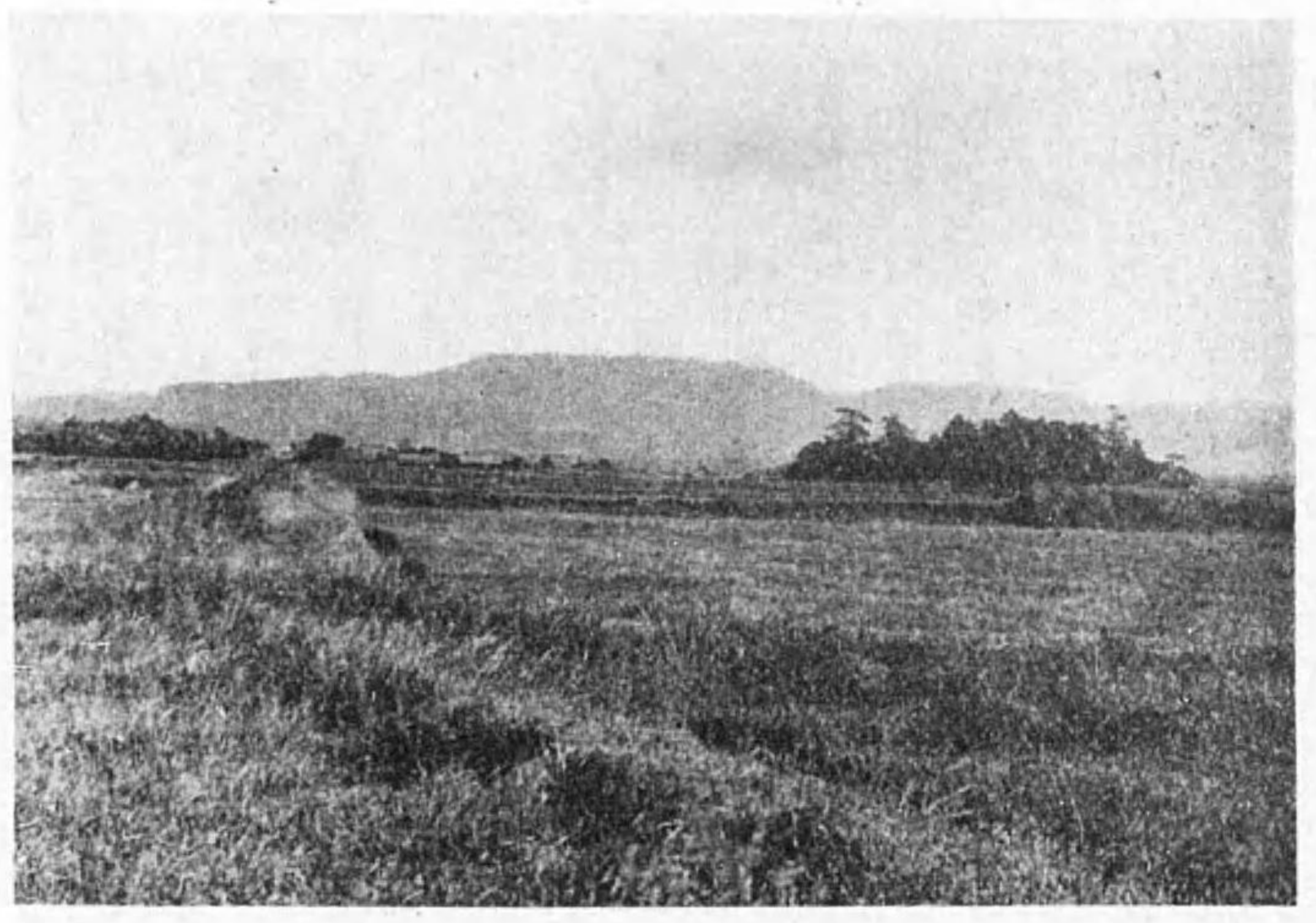
やすみしし 吾が大君の 高敷かす 日本の國は 皇祖の 神の御代より 敷きま
 せる 國にしあれば 生れまさむ 御子のつぎつぎ 天の下 知らしいませと 八
 百萬 千年を兼ねて 定めけむ 平城の京師は かぎりひの 春にしなれば 春日
 山 三笠の野邊に 櫻花 木の晚隱り 貌鳥は 問なく數鳴く 露霜の 秋さり來
 れば 射駒山 飛火が鬼に 萩の枝を しがらみ散らし さを鹿は 妻呼び響む
 山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住みよし もののふの 八十伴の緒の
 うち延へて 思へりしくは 天地の 依り會ひの限 萬代に 榮え行かむと 思へ
 りし 大宮すらを 恃めりし 奈良の京を 新世の 事にしあれば 大君の 引の
 まにまに 春花の うつろひ易り 群鳥の 朝立ちゆけば さす竹の 大宮人の
 踏みならし 通ひし道は 馬も行かず 人も往かねば 荒れにけるかも

【原文】 悲寧樂故郷一作歌一首并短歌

故郷は元
に本校本等

木晚、山、鹿、射、丹、山、壯、校、本、元、に、よ、る。

黒、煎、は、代、匠、記、に、よ、る。



平城宮址よる春日山を望む

八隅知之 吾大玉乃 高敷爲 日本國者 皇祖乃
 神之御代自 敷座流 國爾之有者 阿禮將座 御子
 之嗣繼 天下 所知座跡 八百萬 千年矣兼而 定
 家牟 平城京師者 炎乃 春爾之成者 春日山 御
 笠之野邊爾 櫻花 木晚宰 貌鳥者 間無數鳴 露
 霜乃 秋去來者 射駒山 飛火賀鬼丹 芽乃枝乎
 石辛見散之 狹男壯鹿者 妻呼令動 山見者 山裳
 見貌石 里見者 里裳住吉 物負之 八十伴緒乃
 打經而 思煎敷者 天地乃 依會限 萬世丹 榮將
 往迹 思煎石 大宮尙矣 特有之 名良乃京矣 新
 世乃 事爾之有者 皇之 引乃眞爾眞荷 春花乃
 遷日易 村鳥乃 且立往者 刺竹之 大宮人能 蹈
 平之 通之道者 馬裳不行 人裳往莫者 荒爾異類
 香聞

【題意】 都が恭仁に遷されて後、奈良の京の荒れたの
 を傷んで詠んだ歌。田邊福麻呂の歌集から出た歌で
 ある。福麻呂は傳未詳で、ただ天平二十年の頃、造

酒司の令史（書記長）であり、左大臣橘諸兄の使となつて、越中に下つたことが傳へられるだけである。

【口譯】 わが天皇陛下の、御統治遊ばされるこの日本の國は、皇祖の神代から領有遊ばされてゐる國であるか
 ら、御生誕になる御子の次第次第に、天下を御統治遊ばされよと、幾千萬年の後までもお定めになつたであり
 ませう平城の都は、陽炎の燃える春になると、春日山の三笠の野邊に、櫻の花の木暗きまで咲いてゐるのに隠
 れて、美しい鳥は、間もなく頻に鳴いてゐる。露霜の置く秋になつてくると、生駒山の飛火の岡に、萩の枝を
 搦み散らして壯鹿は妻を呼んで鳴いてゐる。山を見れば、山も見たくあり、里を見れば、里も住みよくなる。
 多くの人々の思つて居たことは、天と地の依り會つてゐる限、末長く榮え行くであらうと、思つて居た大宮で
 すら、恃み思つてゐた奈良の都であるに、新しい世のことであるから、天皇の率ゐられるまゝに、春の花のや
 うに色褪め、群鳥のやうに朝立ち去つたので、大宮人の踏み鳴らして通つた道は、馬も行かず人も行かないか
 ら荒れてしまつたことである。

【釋義】 高敷かず 高は、敷かず状態の壯大なるを美める辭。敷かずは、領有遊ばされる。皇祖の神の御代より
 皇室の御祖先なる神の時代から。生れまさむ御子のつぎつき アルは、出現、生誕の意。御出現遊ばされる御
 歴代の天皇の義。八百萬千年を兼ねて 八百萬は、数の多い極限を現す。八百萬年を兼ね、千年を兼ねての意。
 カネテは、前から豫期して。かぎろひの 春は陽炎の立つものであるから、春の枕詞とする。木の晩隠り 櫻
 花が咲き満ちて、木暗くある、それに隠れて。貌鳥 喚子鳥と同じといふ説もあるが未詳である。中世の歌
 に、かほよ鳥と詠んでゐるものと同じとすれば、貌よき鳥の意で、美しい鳥のことであらう。本集では、春に
 詠み、「朝井代に來鳴く貌鳥」（卷十、一八二三）とも見えて、美しい鳥として差支へは無い。露霜の 秋の景物

を以つて、その枕詞とする。飛火が菟に トブヒは、燧燈で、遠國に事ある時、煙を擧げて急を報ずるもの。見通しのよい處に設けるので、その装置のある岡を、飛火が岡と稱してゐる。しがらみ散らし シガラミは動詞で、押し搦む意である。山も見が欲し ミガホシは、見たくある意。八十伴の緒の ヤソは数の多いのを表す。トモノヲは、集つて隊を成せるものをいふので、八十伴の緒は、多くの隊をいふ。トモノヲを、古事記傳には部屬の長と釋してゐるが、ヲは、緒のやうに系統あるものをいふと思はれる。トモは、多くの人の義。うち延へて 引き續いて。思へりしくは 原文もと思並敷者とあつて、オモヒナミシケバと讀んでゐた。萬葉童蒙抄に、里並敷者の誤とし、サトナミシケバと讀んで、家居し續いてゐる意とした。このあとに思煎石の字面があるにより、思煎敷者の誤とし、訓は代匠記によつて、オモヘリシクハと讀む。卷十三に、津煎袋無を、ツレモナクと讀む處があり、その一例、三三四三の煎を、類聚古集には並に誤つてゐる。煎をレ又はリと讀むのは、イル、イレのイが没收されるものと思はれる。オモヘリシクの例は、夜のほども吾が出て來れば吾妹子が思へりしくし(念有四九四) 面影に見ゆ(卷四、七五四)がある。オモヘリシクは、思つて居たことの意で、動詞思ふに、助動詞リとシとが添うたもの。クは、それを名詞にする爲に添うたもので、時の助動詞シに、クの添ふのは、寝しく、拾ひしくなどの例がある。さてオモヘリシクハは、思つて居たことはの意に取るべきものである。天地の依り會ひの限 天と地と依り會つてゐる限。永久にの意。思へりし 原文、思煎石とある。思つて居つたの意で、連體形である。持めりし 持んで居つたの意で、連體形である。新世の事にしあれば 新しい世の事であるから。新に進み行く世のことで、舊來の儘に滯つてゐない意である。引きのまにまに 天皇が先にお立ちになつて率ゐられるまゝに。ヒキは、導き引率せられる意。春花の遷ひ易り 春の花のやうにう

つるひ變つて。ウツロヒは、花色の衰退するをいふ。さす竹の 大宮の枕詞。語義未詳。

○反歌二首

立ち易り 古き都と なりぬれば 道の芝草 長く生ひにけり

【原文】 反歌二首

立易 古京跡 成者 道之志婆草 長生爾異煎

【口譯】 變つて古い都となつたから、道の芝草は長く生ひ伸びたことである。

【釋義】 立ち易り 從來とは相變つて。道の芝草 芝草は雜草をいふ。長く生ひにけり 交通が繁くあれば、草は踏まれて、長くも生ひぬのであるが、古き都となつて、人の通ふことも稀になつたので、草の伸びたことを云つてゐる。

【参考】 草の生ひたるを歎く。

御立せし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも(卷二、一八一)
いにしへの古き堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり(卷三、三七八)
疊薦隔て編む數通はさば道のしば草生ひざらましを(卷十一、二七七七)

馴著きにし 奈良の都の 荒れゆけば 出で立つごとに 嘆きし益る

【原文】 名付西 奈良乃京之 荒行者 出立毎爾 嘆思益

【口譯】 馴れ著いてゐた奈良の都が荒れ行くから、外に出で立つ毎に嘆が増ることである。

【釋義】 馴著きにし 住み馴れて、親しく狎染んでゐた。出て立つ毎に 外に出で立つ毎に。嘆きし益る ンは助辭。

○大原真人今城 寧樂の故郷を傷み惜む歌一首

秋されば 春日の山の 黄葉見る 寧樂の京師の 荒るらく惜しも

【原文】 大原真人今城傷惜寧樂故郷一歌一首

秋去者 春日山之 黄葉見流 寧樂乃京師乃 荒良久惜毛

【題意】 大原今城が、奈良の都の荒れたのを傷んで詠んだ歌である。今城は、もと諸王で、今城王と稱したが、天平年間、大原真人の姓を賜つた。續日本紀には、寶龜三年に駿河守となつたことまで見えてゐて、その後は傳はらない。

【口譯】 秋になれば、春日の山の紅葉を見るところの、奈良の都の荒れるのが惜しい。

【釋義】 黄葉見る 連體形。荒るらく惜しも 荒れることが惜しい。モは詠嘆を表す助辭。

○久邇の新京を讀むる歌二首(一首略)并に短歌

明つ神 わが大君の 天の下 八島の中に 國はしも 多くあれども 里はしも 多にあれども 山並の 宜しき國と 川次の 立ち合ふ郷と 山城の 鹿脊山の際

四一六〇

故郷は神田本等に

に 宮柱 太敷き奉り 高知らず 布當の宮は 河近み 瀬の音を清き 山近み 鳥が音響む 秋されば 山もとどろに さを鹿は 妻呼び響め 春されば 岡邊も 繁に 巖には 花開き撓り あな何怜 布當の原 いと貴 大宮處 諧しこそ わ が大君は 君の隨 聞き給ひて さす竹の 大宮此處と 定めけらしも

【原文】 讀久邇新京二歌二首并短歌

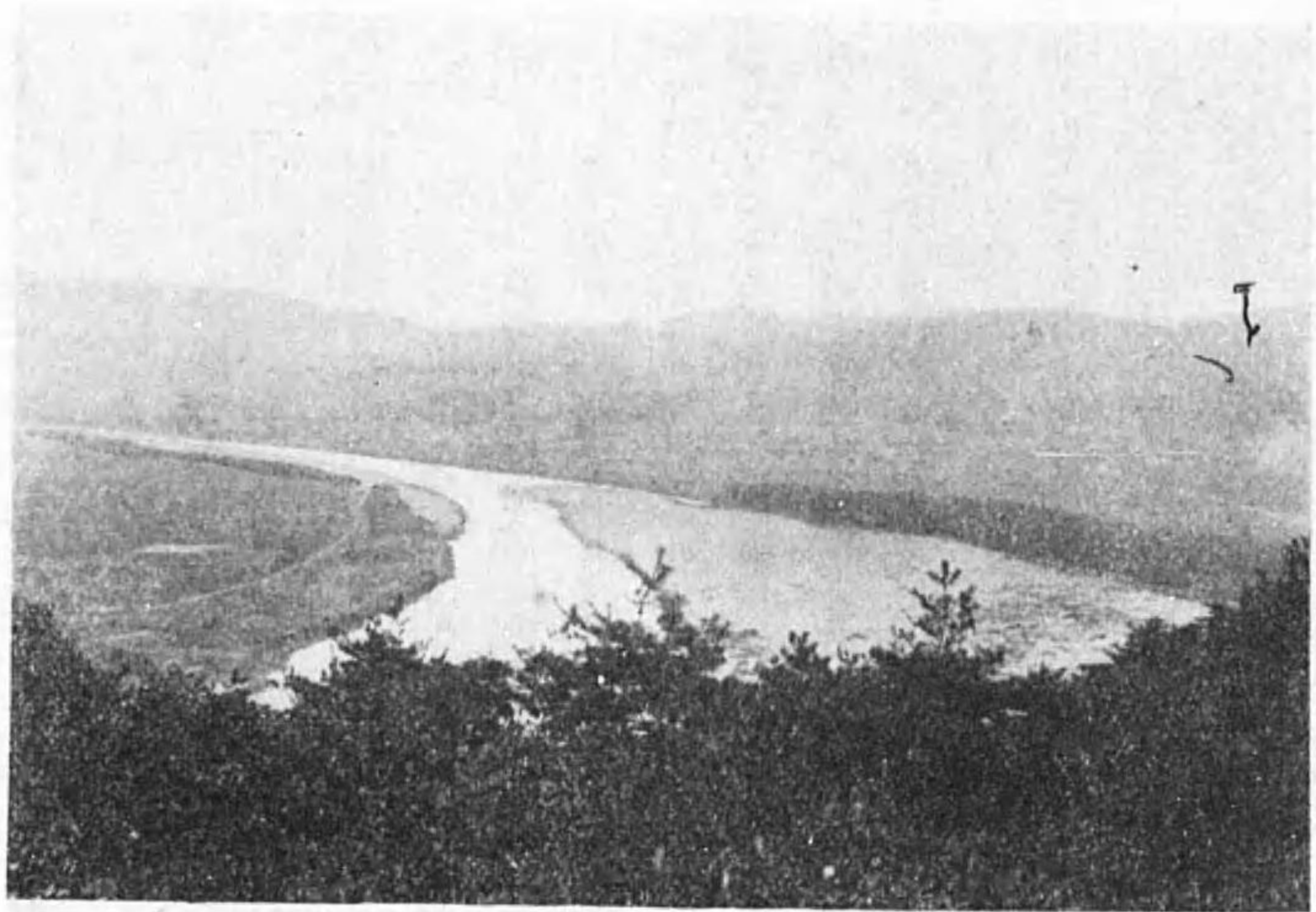
明津神 吾皇之 天下 八島之中爾 國者霜 多雖有 里者霜 澤爾雖有 山並之 宜國跡 川次之 立合郷 跡 山代乃 鹿脊山際爾 宮柱 太敷奉 高知爲 布當乃宮者 河近見 湍音叙清 山近見 鳥賀鳴働 秋去者 山裳動響爾 左男鹿者 妻呼令響 春去者 岡邊裳繁爾 巖者 花開乎呼理 痛何怜 布當乃原 甚貴 大宮處 諧己曾 吾大王者 君之隨 所聞賜而 刺竹乃 大宮此跡 定異等霜

【題意】 天平十二年十二月に久邇の新京を定められた後の作で、春の歌とおぼえるから、翌十三年の春の作であらう。これも田邊福麻呂の歌集から出て、その人の作品と思はれる。

【口譯】 現實の神にましますわが天皇陛下の、天下諸國の中に、國は多く里は多くありますが、山容の宜しい國として、川の姿の立ち廻れる里として、山城の國鹿脊山の間に、宮柱を太く敷き奉つて、御座遊ばされる布當の宮は、河が近いから瀬の音が清く、山が近いから鳥の音が響いてゐます。秋になれば山も響くまでに小壯鹿は妻を呼んで鳴き、春になれば、岡邊も繁きまで巖には花が咲いて撓み、おもしろい布當の原、いとも貴い大宮の處であります。ほんたうにわが天皇陛下は、主君としてお聞き遊ばされて、大宮を此處とお定め遊ばされたさうにございます。

郷は神田本等に

岡邊は元曆校本等による



鹿脊山より泉川を望む

【釋義】 明つ神 實在の世界に、目のあたり見得る神の義。天皇の威光を神の如くに感ずるより起つた語で、天皇の修飾に用ゐる。八島の中に、ヤは相當数の多いことを示すのがもとで、後に八の數に限つていふ、古事記には、淡路、四國、隱岐、九州、伊岐、津島、佐度、本洲の八島を數へてゐる。山並山の並んでゐる有様。山の姿。川次の立ち合ふ郷と川次は、川のありがた、川の姿容。立ち合ふは、川の來り會する意。川の姿の流れ添へる里として。鹿脊山の際に 鹿脊山は、恭仁の京よりいへば川を隔てて南方にある。川の下流の方から行くと、ちやうど鹿脊山の山間に恭仁の京が見える。布當の宮は布當は地名。山にも野にも云つてゐる、取つて宮の名としたのである。山近み鳥が音響む この恭仁の京は、山が近いから鳥の音が響き渡るといふ意。あな何怜 感興に堪へぬ意を表してゐる。諾しこそウベは、道理として諾ふ意。シコソは助辭。君の隨

主君でおいで遊ばすがまゝに。主君にましますが故に。

○反歌二首

三日の原 布當の野邊を 清みこそ 大宮どころ 一に云ふこ 定めけらしも と標さし

【原文】 反歌二首

三日原 布當乃野邊 清見社 大宮處一云此 定異等霜 跡標刺

【口譯】 三日の原の布當の野邊の清らかさに、大宮の地とお定めになつたのでございませう。

【釋義】 三日の原 恭仁の京の地で、布當をも含んでゐるのであらう。ここと標さし この處を標をさして。標をさすは、占領を表示する爲に、標木を樹てること。

【餘論】 この歌の、一云此跡標刺の六字は、古寫本のみにあつて通行本には無い。しかも第四句の大宮處の下にあるので、普通の例に従つて、第四句を代へて、「三日の原布當の野邊を清みこそ」と標さし定めけらしも」とする時は、内容の表出が不安定である。五句の校異とする時は、「清みこそ大宮處ここと標刺せ」と讀むべきであるが、句調上これも落ちつかない。これらの理由で、通行本には削られたものと覺しい。或は「三日の原布當の野邊を清みこそ大宮處此處と標刺し定めけらしも」と讀んで、六句體の歌であつたものを、そのうちの一句に誤つて一云の冠を附して、校異の形としたものではあるまいか。もとより臆測に過ぎないけれども、さうも考へられる。六句體の歌は、佛足跡歌碑の歌のやうに、第六句は獨立句であるが普通であるが、長歌の末を、五七七七と結ぶもののある上は、かやうな六句の遊離しない六句體の歌も考へられぬこともない。さて短

大宮、一
一〇五
云此跡
刺は元標
校本等に
よる。

歌全盛期に於いて、その形に習合せられたものかもしれないのである。

二六一〇五

山高來は考による

山高く 川の瀬清し 百世まで 神しみ行かむ 大宮どころ

【原文】 山高來 川乃湍清石 百世左右 神之味將往 大宮所

【口譯】 山が高く川の瀬が清くあります。百代までも、貴み仰いで行きませう、この大宮所は。

【釋義】 山高く、原文、弓高來とある、萬葉考によつて、弓は山の誤とする。神しみ行かむ 原文、神之味將往とある。代匠記に神之味をカムシミと讀んで、カムサビと同意としてゐるが、外に無い語である。止むを得ぬから、神を、神靈、神奇の義に取つて、今假にクスシミユカムと訓じた。クスシミは、奇妙に思ふ意。聞きし如きこと貴く奇しくも神さび居るかこれの水島（卷三、二四五）。ユカムは連體形。

九六一〇五

○春の日 三香の原の荒れたる墟を悲み傷みて作れる歌一首并に短歌
三香の原 久邇の京師は 山高み 河の瀬清し 住みよしと 人は云へども 在りよしと 吾は念へど 古りにし 里にしあれば 國見れど 人も通はず 里見れば 家も荒れたり 愛しけやし 斯くありけるか 三諸つく 鹿脊山の際に 咲く花の色めづらしく 百鳥の 聲なつかしく 在りが欲し 住みよき里の 荒るらく惜しも

【原文】 春日悲三香原荒墟作歌一首并短歌

任吉は類聚古集による

三香原 久邇乃京師者 山高 河之瀬清 住吉迹 人者雖云 在吉跡 吾者雖念 故去之 里爾四有者 國見跡 人毛不通 里見者 家藪荒有 波之異耶 如此在家留可 三諸著 鹿脊山際爾 開花之 色目列敷 百鳥之 音名束敷 在杲石 住吉里乃 荒樂苦惜哭

【題意】 恭仁の新京も久しからずして、都を他に遷された後、その荒れたのを傷んでよんだ歌で、これも田邊福麻呂の歌集から出てゐる。

【口譯】 三香の原なる久邇の京は、山が高いから、河の瀬が清くある。住むによいと人は云ひ、居るによいと自分も思ふけれども、古くなつた里であるから、國を見れば人も通はず、里を見れば里も荒れてゐる。いとしくもかく有ることよ。神の森の著く鹿脊山の間、咲く花の色の賞すべく、色々の鳥の聲が親しまれ、居りたく住みよき里の、荒れることが惜しい。

【釋義】 古りにし里にしあれば 都を他に遷して古き都となつたのであるから。愛しけやし 原文は波之異耶とある。前にもフリニシの四音の一句があるから、これもハシケヤと四音に讀むべきものかもしれない。しかし他にハシケヤシの句が數出してゐるから、今もハシケヤシとしておく。この句の下に句を脱したといふ説もあるが、もとのまゝでよい。ハシケヤシは、ハシキヨシ、ハシキヤシと同語で、ハシキ又はハシケは、愛すべくある意の形容詞の、その連體形で、ヨシ又はヤシは、助辭で、詠嘆の意を表す。さればこの句の下には、妹、君等の體言の來るのが原則であるが、この歌に於ける如きは、慣用の後に、愛しきことよといふ程の、詠嘆句となつたものである。かういふ用法の例としては、愛しきやし然る戀にもありしかも君におくれて戀しき念へば（卷十二、三一四〇）。斯くありけるか かくありけるよと詠嘆してゐる。三諸つく ミモロは神座で、森林、

神樹等をいふ。それが著いてゐる意で、鹿脊山を修飾してゐる。色めづらしく、メヅラシは、愛賞すべくあるをいふ。聲なつかしく、ナツカシは、馴れ親むべくあるをいふ。在りが欲し、在らむことの欲しい意で、見が欲し、住みが欲し等の類句がある。

○反歌二首

三香の原 久邇の京は 荒れにけり 大宮人の 遷ろひぬれば

【原文】 反歌二首

三香原 久邇乃京者 荒去家里 大宮人乃 遷去禮者

【口譯】 三香の原の久邇の京は荒れてしまつた。朝廷にお仕へする人が遷り去つてしまつたから。

【釋義】 遷ろひぬれば ウツロヒは、人々連続して移り行くことを表してゐる。

咲く花の色は 色はかはらず ももしきの 大宮人を 立ちかはりける

【原文】 咲く花の色は 色者不易 百石城乃 大宮人叙 立易矣流

【口譯】 咲く花の色は、ありしに變らないが、朝廷にお仕へする人は變つたことである。

【釋義】 色はかはらず 都のあつた時に變らず咲いてゐる意。ももしきの 大宮の枕詞。立ちかはりける 花のもとに馴れし大宮人も、今はこの地に居なくなつた意。タチは、カハルの意を強くする爲に著く。

【餘論】 恭仁の都の規模は、かなり大きくあつたことと思はれるが、都であつた時は短く、盛衰の變化のあまり

○一〇六
二首は元
曆校本等
による。

一〇六
一
流は元
曆校本等
による。

にも甚しいのに、歌人の心は傷んでゐる。新都の榮えを頌した歌が、いまだ墨も乾かぬに、もはや荒れた墟の春を悼んで歌はねばならなくなつてゐる。而して花は無心、都であつたと無くなつたとに論なく、にほひ満ちてゐる。唐詩に、年年歳歳花相似、歳歳年年人不同といへると、全く趣旨を同じくしてゐる。

一一 大伴坂上郎女

大伴坂上郎女は、大伴安麻呂の子、旅人の妹で、母は石川内命婦である。坂上の里に居たので、坂上郎女といふ。はじめ穂積の皇子に嫁し、寵せらるること儔が無かつたが、皇子の薨じた後、藤原麻呂が、甥うた。麻呂は不比等の子である。また坂上郎女には、大伴坂上大嬢等の女があり、その坂上大嬢は、後に家持の妻となつたが、大伴宿奈麻呂の女であるといふから、坂上郎女は、宿奈麻呂とも婚したことになる。天平の初には、旅人に従つて、大宰府にあり、天平二年に歸京して後は、佐保の宅等に在つて晩年を送つたものとおぼしく、天平勝寶二年に、その女坂上大嬢に與へた歌を最後として、その後の消息を傳へない。

坂上郎女は、婦人の身を以つて、神龜天平間の男子の間に伍して遙色なき歌を詠んでゐる。短歌に巧な婦人は、外にも見受けるが、坂上郎女は、ひとり長歌をもよくし、數篇の作を留めてゐる。その作品といひ閑歴といひ、才色兼備を以つて評するにふさはしい人である。古の額田の王と併せて、萬葉を代表すべき女流歌人と爲すべきである。

九六三

○冬十一月 大伴坂上郎女 帥の家を發し道に上りて 筑前の國宗形の
郡名兒山を越ゆる時作れる歌一首
大汝 少彦名の 神こそは 名づけ始めけめ 名のみを 名兒山と負ひて 吾が戀
の 千重の一重も 慰めなくに

【原文】 冬十一月 大伴坂上郎女 發帥家上道 超筑前國宗形郡名兒山之時作歌一首

大汝 少彦名能 神社者 名著始雜目 名耳乎 名兒山跡負而 吾戀之 千重之一重裳 奈具佐米七國

【題意】 天平二年、大伴旅人が上京することになったので、十一月にまづその家族等が上京した。大伴坂上郎女は、旅人の妹で、旅人に従つて九州に居たものと見える。この歌は、上京の途上、筑前の國の名兒山を越えた時の作。この歌は長歌であるが、反歌を伴はない。

【口譯】 大汝少彦名の神こそは、名兒山とこの山を名づけ初めたであらう。しかも名ばかり名兒山といひながら、わたしの戀の例へば千重もある中の一重だけでも慰めてくれないことだ。

【釋義】 大汝少彦名の神こそは この二神は、國作りの神として信ぜられてゐた。古事記日本書紀では、伊弉諾、伊弉册兩神の國土經營を傳へるが、萬葉では伊弉諾伊弉册の二神は現れない。風土記等と共に、大國主少彦名の國作りを傳へるだけである。名づけ初めけめ ケムは過去推量の助動詞であるが、上にコソがあるから、ケメ活を用ゐたのである。山の名を名兒山と名づけたのであらうといふのである。こゝで一段落である。名のみを名兒山と負ひて 言語精靈の信仰によつて、名を負へるものは、その名相應の力があると信ぜられてゐた。しかるにこの山はナゴ山といふ名でありながらの意である。ナゴ山のナゴと、慰めるのナグと、音が似てゐる

から、ナゴ山を慰め山の意に取つて、その名ばかりを負つてゐる意である。千重の一重も 幾重にも重りあつてゐる、その一重だけの意。慰めなくに 慰めないことである。ナクはヌコト。ニは助辭である。

【参考】 類歌

名草山言にしありけり、吾が戀ふる千重の一重も慰めなくに(卷七、一一一三)

類句、大汝少彦名

大汝少彦名のいましけむ志都の石室は幾代經ぬらむ(卷三、三五五)

大汝少御神の作らしし妹背の山は見らくしよしも(卷七、一二四七)

大汝少彦名の神代より言ひ續きけらく(下略、卷十八、四一〇六)

類句、我が戀ふる千重の一重も

(上略)我が戀ふる千重の一重も、慰もる情もありやと(下略、卷二、二〇七、卷四、五〇九)

(上略)我が戀ふる千重の一重も、人知れずもとなや戀ひむ、氣の緒にして(卷十三、三二七二)

○大伴坂上郎女 姪家持が佐保より西の宅に還るに與ふる歌一首

吾が夫子が 著る衣薄し 佐保風は いたくな吹きそ 家に至るまで

【原文】 大伴坂上郎女 與姪家持 從佐保還歸西宅上歌一首

吾背子我 著衣薄 佐保風者 疾莫吹 及家左右

【題意】 西宅に住んでゐた姪の家持が、叔母の坂上郎女を佐保の宅に訪うて、歸らうとした時に、坂上郎女の詠

宗形郡は
元曆校本
等具佐米
奈具佐米
は元曆校
本等によ

九七九

んで與へた作。家持は、坂上郎女の兄旅人の子であるから姪といふ。姪は甥と同じに用ゐてゐる。後に坂上郎女の生んだ坂上大嬢を娶つて妻とした。この歌は、集中、天平五年に編してある。

【口譯】 あなたの著てゐる衣は薄い。お宅に歸るまで佐保風は強く吹いてはいけませぬ。

【釋義】 吾が夫子が 姪の家持をさしていふ。夫子は男子に對して親みいふ稱である。著る衣薄し ケルは、キルに同じ。著用する意の動詞で、下一段活。佐保風は 佐保の地を吹く風。初瀬風、明日香風の類である。いたくな吹きぞ イタクは甚しく。ナは勿れの意。家に至るまで 家持が、その家に到着するまではの意。

【餘論】 婦人らしい、やさしい情が溢れてゐる。叔母としての心遣ひが歌はれてゐる。女婿としての心構へも既に含まれてゐるであらう。

○大伴坂上郎女の月の歌三首

猶高の 高圓山を 高みかも 出で来る月の 遅く光るらむ

【原文】 大伴坂上郎女月歌三首

猶高乃 高圓山乎 高彌鴨 出來月乃 遅將光

【題意】 坂上郎女の月の歌三首で、やはり天平五年の作である。

【口譯】 猶高の高圓山が高いからか、出で来る月が遅く照るのであらう。

【釋義】 猶高 地名で、高圓山を含む一帯の名であらう。高圓山 春日山中の一峰。山容圓形で豊麗なる山であらう。高みかも 山を高みは、山が高さに、山高きが故に、カモは疑問と詠嘆の語意。遅く光るらむ 遅く照

る原因を推量する語意で、遅くなつてから月が照るのは、山が高いからであらうかと推量してゐる。

【参考】 類歌

倉梯くらはたの山を高みか夜ごもりに出でくる月の光ともしき(卷三、二九〇)

雨ごもり三笠の山を高みかも月のいで來ぬ、夜はくだちつつ(卷六、九八〇)

ぬばたまの 夜霧の立ちて 鬱しく 照れる月夜の 見れば悲しさ

【原文】 烏玉乃 夜霧立而 不清 照有月夜乃 見者悲沙

【口譯】 夜の霧が立つて、ぼんやりと照つてゐる月を見れば悲しいことである。

【釋義】 ぬば玉の 枕詞。鬱しく 鬱陶しくはつきりしない意の形容である。

山の端の ささらえ壯子 天の原 門渡る光 見らくしよしも

右の一首の歌 或は云ふ 月の別名をささらえをとこと曰ふ 此の辭によりて

この歌を作る

【原文】 山葉 左佐良椶壯子 天原 門度光 見良久之好藻

右一首歌 或云 月別名曰佐散良衣壯士也 緣此辭作此歌

【題意】 月の別名を、ささらえ壯子といふので、この詞を用ゐて作つた歌。

【口譯】 山の端にゐるささらえ壯子が、廣い天の戸を渡つて行く光は、見るに好ましいことである。

【釋義】 ささらえ壯子 月の別名である。ササラは、小き義、「妹なるがつかふ河津のささら荻」(卷十四、三四四六) など用ゐてゐる。エヲトコは美男で、古事記に、「あなにやしえをとこを」と見える。月を男性とすることは、月人壯子、月讀壯子など稱してゐる。天の原 天の廣い意を表す詞。門渡る光 トは、門の義で、東から出て西に入る、その途中を門と稱してゐる。トワタルは、天上を渡る意。見らくしよしも ミラクは、見ること。シは強める助辭。ヨシは、その好ましくあるをいふ。モは詠嘆の助辭。

○大伴坂上郎女 神を祭る歌一首并に短歌

ひさかたの 天の原ゆ 生れ來たる 神の命 奥山の 榊の枝に 白香つけ 木綿
とりつけて 齋瓮を 忌ひ穿り居る 竹玉を 繁に貫き垂り 鹿猪じもの 膝折り
伏せ 手弱女の 襲衣取り懸け かくだにも 吾は祈ひなむ 君に逢はじかも

【原文】 大伴坂上郎女祭神歌一首并短歌

久堅之 天原從 生來 神之命 奥山乃 賢木之枝爾 白香付 木綿取付而 齋戸乎 忌穿居 竹玉乎 繁爾貫垂 十六自物 膝折伏 手弱女之 押日取懸 如此谷裳 吾者祈奈牟 君爾不相可聞

【題意】 天平五年十一月に、大伴氏神を祭つた時、この歌を作つて、思を述べたもの。大伴氏の神は、その祖先神と信ぜられてゐる天の忍日の命で、外にも大伴氏の守護神が配祀せられてゐるであらう。

【口譯】 天上から御出現遊ばした神様よ。奥山の榊の枝に白香や木綿を取り付けて、齋戸を地上に据ゑ立て、竹玉を繁く貫き垂れ、獸のやうに膝を折り伏せ、婦人の襲衣を懸けて、かやうにもわたくしは祈りませう。それ

新奈牟は
神田本等
による。

三七九

でも君にあはないでございませうか。

【釋義】 ひさかたの 枕詞。生れ來たる アレは、出現する意。天にある神が、地上に現れ來るのである。神の命 ミコトは敬稱。神を呼びかけてゐる語法。賢木が枝に サカキは、葉の繁つた樹をいふ。榊を用ゐるやうになるのは、最その條件に適つてゐるからである。白香つけ シラガは、麻、楮などの樹の皮の纖維を、白く酒して、細く裂いたもので、白髪のような感じを與へるもの。それを賢木の枝につける。舊説に白い紙を細く裂いたものといふが、それは紙が得易くなつた中世以降のことである。木綿取り付けて ユフは楮の樹皮のさしたしたもの。前の句と同一のことを言を換へて重ね云つたままで、白香の中に木綿は含まれる。齋戸 舊説に神酒を盛る瓶としてゐる。恐らくは、神籬を鎮める神殿を意味するものと思はれる。齋ひ穿り居る 清淨に地上に据ゑ附ける意である。竹玉を繁に貫き垂り 竹もしくは竹のやうな形の玉を多く緒に貫いて垂れ下げる。鹿猪じもの 鹿猪のやうに。襲衣取り掛け オスヒは、頭から被る衣。吾は祈ひなむ コフは祈請する。ナムは助動詞。君に逢はじかも カは疑問で、君に逢ひ得ぬであらうかの意。モは感動詞。

○反歌

木綿疊 手に取り持ちて 斯くだにも 吾は祈ひなむ 君に逢はじかも
右の歌は 天平五年冬十一月を以ちて 大伴の氏の神に供へ祭る時 聊この
歌を作る 故神を祭る歌といふ

【原文】 反歌

一二 大伴坂上郎女

三八〇

木綿疊 手取持而 如此谷母 吾波乞骨 君爾不相鴨

右歌者 以天平五年冬十一月 供祭大伴氏神之時 聊作此歌 故曰祭神歌

【口譯】 木綿疊を手に取り持つて、かやうにもわたくしは祈りませう。それでも君に逢ふことが出来ませんでせうか。

【釋義】 木綿疊 木綿で織つた敷物で、疊まれるから木綿疊といふ。神を祭るに、手に織物を持つことは、「一手には木綿取り持ち、一手には和細布奉り、平けく眞幸く坐せと、天地の神祇に乞ひ禱み」(卷三、四四三) などある。

【餘論】 この神を祭る歌は、當時の神祭の状態が詳述されてゐる點で注意される。神を祭るのは、普通に婦人の任務とされてゐたので、集中特に婦人の神を祭ることを叙したものが多し。

○天皇に獻れる歌二首

大伴坂上郎女春日の里にありて作れり

鳩鳥の 潜く池水 ころあらば 君に吾が戀ふる 情示さね

【原文】 獻天皇歌二首 大伴坂上郎女在春日里一作也

二寶鳥乃 潜池水 情有者 君爾吾戀 情示左禰

【題意】 大伴坂上郎女が、春日の里に在つて、天皇に獻つた歌。天皇は聖武天皇である。天皇と大伴坂上郎女とは、いかなる關係であつたかは、いまだ審でない。

【口譯】 鳩鳥の潜つてをります池水よ、どうかわたくしの戀ふる心を現して下さい。

大伴坂上郎女春日の里にありて作れり

校本等に

【釋義】 鳩鳥 ニホは水禽で、かいつぶりの別名。水中を潜つて魚を捕へて食ふ。潜く池水 カヅクは水中に潜り入ること。

【餘論】 この歌は、初二句と、三四五句との關係がはつきりしない。多分天皇から御苑の池に寄せて賜つた御製があつて、その詞句を取つて、御返事申しあげてゐるのであらう。

外に居て 戀ひつつあらずは 君が家の 池に住むとふ 鴨にあらましを

【原文】 外居而 戀乍不有者 君之家乃 池爾住云 鴨二有益雄

【口譯】 外に居て戀をして居りませうよりは、陛下の御園の池に住むといふ鴨でありたいことでございます。

【釋義】 戀ひつつあらずは 戀ひつつは居ないで、むしろ進んでの意。徒に戀をせむよりは。君が家の 天皇の宮室をさすので、語意に敬意を具してゐないのは、親しい恩寵に狎れてであらう。池に住むとふ トフは、トイフの義。鴨にあらましを 鴨であつたらうものを、さうでは無くて残念であるの意。

○大伴宿禰駿河麻呂の歌一首

丈夫の 思ひ佗びつつ 度遍く 嘆く嘆を 負はぬものかも

【原文】 大伴宿禰駿河麻呂歌一首

大夫之 思和備乍 遍多 嘆久嘆乎 不負物可聞

【題意】 大伴駿河麻呂が、坂上郎女に贈つた歌。駿河麻呂は大伴御行の孫で、御行は、坂上郎女の父なる安麻呂

一二 大伴坂上郎女

五九五

大夫は元曆校本等による

四六四六

四七二六

と兄弟であるので、駿河麻呂と坂上郎女とは親しく交つて、歌の贈答をも爲したのである。

【口譯】 男子が思ひ侘びながら、幾度となく嘆いてゐるのにそなたは感じないことであるか。

【釋義】 度遍く 度数多く、何遍となく。嘆く嘆を 太息をつくその嘆息を。負はぬものかも そなたは身に首擔を感じないのか。心に受けないことであるかの意。負ふは、引き受ける、背負ふ。

○大伴坂上郎女の歌一首

心には 忘るる日無く おもへども 人の言こそ 繁く君にあれ

【原文】 大伴坂上郎女歌一首

心者 忘日無久 雖念 人之事社 繁君爾阿禮

【題意】 前の歌に對する坂上郎女の答である。

【口譯】 心では忘れる日もなく、思つて居ますが、あなたは人から、いろ／＼と云ひ騒がれる方でありませうものを。

【釋義】 人の言こそ 他の人の云ひ寄る詞が。繁く君にあれ 人の云ひ寄る言が繁く君の上にあるの意。上にコソがあるので、これを受けてアレと結んでゐる。

○大伴坂上郎女の歌二首

ひさかたの 天の露霜 置きにけり 宅なる人も 待ち戀ひぬらむ

四六五一

【原文】 大伴坂上郎女歌二首

久堅乃 天露霜 置二家里 宅有人毛 待戀奴濫

【題意】 いかなる時の作とも、記しては無いが、歌意によつて事情が推量せられる。

【口譯】 天から降る露霜が置いた寒い晩です。あなたのお宅の人も、待ち慕つて居るでございませう。

【釋義】 ひさかたの 枕詞。天の露霜 天のは、天から降るものとの感じを表す爲に添へてゐる。ツユジモは、露から霜におきかはる頃の霜。宅なる人も 家にある人で、留守をしてゐる人をさす。その誰であるかは、この歌の表からはわからない。待ち戀ひぬらむ ヌラムは、強く推量する語法。

【餘論】 この歌、上三句は、目前の實景を叙したものと問題は無いが、下の四五句が、作者自身、外出でもしてゐて、自分の家に残して來た人を思つてゐるか、又は口譯欄に記したやうに、歌を贈つた先方の人の、家に残した人が、待つてゐるだらうと推量したかは、問題とすべきである。今、次の歌と連絡あるものと見て、坂上郎女が、自分の女子を與へた男に對し、早くお歸りなさい、あなたの新妻なるわたくしの子も、あなたの家で待つてゐるでありませうとの意を表した、母の心の歌として解しておいた。なほ、次の歌の解を参照すべきである。

玉主に 珠は授けて かつがつも 枕と吾は いざ二人宿む

【原文】 玉主爾 珠者授而 勝且毛 枕與吾者 率二將宿

【口譯】 玉の持主に、珠は授けて、まあまあ、わたくしは枕と二人で寝ませうよ。

一一二 大伴坂上郎女

四六五二 勝且毛は 神田本等 による。

【釋義】玉主に タマヌシ、又はタマモリと讀む。玉の所有者。この歌では、坂上郎女の、娘を與へた婚をさしてゐる。珠は授けて 娘を與へたことを、珠を與へたと、譬喩に叙してゐる。かつがつも まづまづ、まあ。

【餘論】永らく育て養ひ來つた娘を、嫁入らせた母親の寂しさがよく出てゐる。坂上郎女の娘は二人あつて、家持と駿河麻呂とに嫁してゐる。この歌は、從來駿河麻呂に娘を與へた時の作としてゐる。恐らくは家持に嫁せしめた時の作ではなからうかと思はれる。

○大伴坂上郎女 跡見の庄より 宅に留まれる女子の大嬢に賜へる歌一
首并に短歌

常をにと 吾が行かなくに 小金門に もの悲しらに おもへりし 我が兒の刀自
を ぬばたまの 夜晝といはず 思ふにし 吾が身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへぬ
れぬ 斯くばかり もとなし戀ひば 古郷に この月頃も 在りかつましじ

【原文】大伴坂上郎女 從跡見庄 賜留宅女子大嬢一歌一首并短歌

常呼二跡 吾行莫國 小金門爾 物悲良爾 念有之 吾兒乃刀自緒 野干玉之 夜晝跡不言 念二思 吾身者 瘦奴 嘆丹師 袖左倍沾奴 如是許 本名四戀者 古郷爾 此月期呂毛 有勝益士

【題意】坂上郎女が、跡見の庄から、宅に留つてゐた坂上大嬢に與へた歌で、大嬢の贈つた歌に答へたもの。

【口譯】行ききりにはわたくしは行きませんが、門のほとりに、物悲しさうに思つてゐた、わが子の奥様を、

賜は元曆
校本によ

夜晝といはず、思ふのでわたくしは瘦せました。嘆くので袖さへも濡れました。そなたがかやうに落ちつかず
に戀をしてゐるならば、故郷にこの月頃も居ることは出来ませぬ。

【釋義】常をにと 原文、常呼二跡とあるので、トコヲニト、又はツネヲニトと讀むほか、讀みやうも無い。し
かしそれでは解しにくいので、常世二跡の誤であらうと云はれてゐる。或はさうかも知れない。常世は仙郷
で、この世の人が行くと、久しくして歸らないと信ぜられてゐた國。小金門に ヲは接頭語。金門は、金屬の
節のある門。もの悲しらに 何とはなしに悲しさうに。我が兒の刀自を 刀自は、家の主婦の稱で、老若に關
せず用ゐてゐる。思ふにし シは、下の嘆くにしのシと共に、助辭。もとなし戀ひば モトナは由縁無く、根
據なき意。シは助辭。次の反歌によるに、大嬢が理由もない戀をするならばの意であらう。古郷に こゝでは、
古くなつた里の意に用ゐてゐる。在りかつましじ カツは、堪へる、うち勝つ意。マシジは、中世以後のマシ
に相當する古語。在り得まいの意。そなたがあまり戀ふるやうならば、かく古郷に月を重ねては居られまいの
意である。

○反歌

朝髪の 思ひ亂りて 斯くばかり なねが戀ふれど 夢に見えける
右の歌は 大嬢の進れる歌に報へ賜へるなり

【原文】反歌

朝髪之 念亂而 如是許 名姉之戀會 夢爾所見家留

一二 大伴坂上郎女

進歌は元
曆校本等
による。

右歌 報賜大嬢進歌二也

【口譯】 かやうに思ひ亂れて、そなたが戀ふる故に、夢に見えました。

【釋義】 朝髪の 亂るの枕詞。なねが戀ふれぞ ナネは、ナは汝、ネは親愛を表す接尾語で、そなたといふ義。戀ふれぞは、戀ふればその意で、條件法である。

一三防人

防人は、兵士に徴されて邊を守る者をいふ。天智天皇の三年に、對馬の島、壹岐の島、筑紫の國等に、防人と烽とを置くところがあるが、文獻に見えた初である。これらの兵士は、諸國から徴されるのであるが、いつの頃よりか、東國の人を徴してこれに宛てることになった。その後、天平寶字元年に、東國の人を宛てることを停めて、九州の人を以つてこれに代へた。これより前、天平九年にも筑紫の防人を停めて、筑紫人を差して壹岐對馬を守らしめたことが見えるが、それは一時のことであつたと見えて、本集には、天平勝寶七歳に、東國から徴されて、筑紫の防人に下る者の歌を載せてゐる。防人の年限は三年であるが、毎年順次に一部分を交替せしめるのである。今これを中心として、その他、時代未詳の防人の歌、防人を憐む歌等を集めて、この項を作る。防人の心情については、歌みづからこれを語るであらう。純朴なる東國人の聲として、殊に作歌年代、及び作者の明なるもの多くを留めてゐるのは、萬葉集の特に寶重すべき所以の一を爲すものである。

○天平勝寶七歳乙未二月 相替りて筑紫に遣さえし諸國の防人等の歌

畏さや 命被ふり 明日ゆりや 草が共寐む 妹無しにして

右の一首は 國造の丁長 下の郡物部秋持

【原文】 天平勝寶七歳乙未二月 相替遣筑紫諸國防人等歌

可之古伎夜 美許等加我有理 阿須由利也 加曳我牟多禰牟 伊牟奈之爾志互

右一首 國造丁長下郡物部秋持

【題意】 前行文にも書いたやうに、天平勝寶七歳に、交代して九州に遣される、東國の兵士等の歌である。これらの防人等は、一國毎に、その國の防人部領使に引率せられて難波に到り、兵部の役人に引き繼がれるのであるが、防人部領使は、部下の防人およびその家族の歌を集録して、當時難波に出張して事務を執つて居つた兵部少輔大伴家持に報告し、家持は、その中から拙劣なる歌を除いたものを筆録し、これが家持の他の筆録と共に今日萬葉集に残つてゐるのである。この歌を報告することは、政府から命令されたことで、家持の私に集めたものでは無いと思はれる。家持は、當時、職を兵部に奉じた關係上、これを自家の集にも抄録しておいたのであらう。

天平勝寶七歳は、孝謙天皇の御代であるが、この年正月勅して、天平勝寶七年の年を歳に改めしめ、八歳、九歳まで、歳の字を用ゐたが、九歳八月十八日に天平寶字元年と改められてから、ふたたび年の字を用ゐるやうになつた。その天平勝寶七歳の防人、および防人の家族の歌を、遠江、相摸、駿河、上總、常陸、下野、下總、信濃、上野、武藏の十國に亘り、合せて、八十四首の歌が録せられてゐる。遠江の國からは十八首の歌が進上

牟多禰牟
は元曆校本
等による。

せられ、そのうち拙劣歌十一首を除いて、七首が採録せられてゐる。今こゝには、その七首のうち、四首を載せることとした。すなはちこの歌は、遠江の國の長下の郡の人物部秋持の作である、國造の丁は、古くは、國造より出せる人足と爲してゐるが、國造で兵士に出たものをいふとなす萬葉集新考の説がよい。國造は、その地方の名族である。

【口譯】 恐多い勅命を蒙つて、明日からは、妻なしに草と共に寝ることでありませうか。

【釋義】 畏きや ヤは詠嘆の助辭。畏き命と續く連體法である。カシコキは、恐るべき、恐多い。命かがふり

ミコトは御言で、命令、勅命。勅命を蒙つて。明日ゆりや ユリは、ヨリに同じ。ヤは疑問の辭。草が共寝む原文もと加曳我伊牟多禰乎とあつて、諸説があつたところであるが、いづれも解き得ない。元曆校本によつて、加曳我牟多禰牟とする時は、よく通ずるのである。カエはカヤの方言で、草である。ヤとエと通ずることは、正倉院文書にも、同一の人の名を、眞枝足女、眞屋足女と二様に書いてゐる。ムタは、其の古言である。ムタがガを受けるのは、「君がむた行かましものを」(卷十五、三七七三)の例がある。草と共に寝ようといふので、野宿をすること、すなはち旅に出ることを云つてゐる。妹なしにして 妹をイムといふのは方言である。すべて防人の歌には、東國の方言が多く出てゐるので、その點、特に注意すべきである。

時時の 花は咲けども 何すれぞ 母とふ花の 咲き出來ずけむ

右の一首は 防人山名の郡支部眞麻呂

【原文】 等伎騰吉乃 波奈波佐家登母 奈爾須禮曾 波波登布波奈乃 佐吉泥已受禰牟

④四三二
三
佐吉泥は
元曆校本
等による

右一首 防人山名郡支部眞麻呂

【題意】 同じく遠江の國山名の郡から出た防人、支部眞麻呂の作である。

【口譯】 四季時々の花は咲くけれども、何としてか、母といふ花は、咲いて來ないのであらうか。

【釋義】 時時の 時節時節の。何すれぞ 何とすればか、いかにしたことかの意。母とふ花の トフは、トイフの義。母といふ花のの義で、母を花に譬へてゐる。咲き出來ずけむ 咲いて出て來ないといふ意。ケムは過去を推量するのであるが、母といふ花は何として咲いて來ないのであらうかと、その花の咲いてこない理由を尋ねてゐる。

【餘論】 母を花に譬へた、幼い譬喩があはれである。山野を行けば、野山に時の花は咲いてゐる。しかも母は野にも山にも咲いてゐないといふ心である。

孝徳紀に、川原満といふものが、皇太子妃の薨去を悼み奉つて詠んだ歌に、

本ごとに花は咲けども何とかもうつくし妹が復咲き出來ぬ

といふのがあつたのは、似た歌である。

④四三二
六

父母が 殿の後方の 百代草 百代いでませ 我が來たるまで

右の一首は 同じき郡(佐野郡)生玉部足國

【原文】 父母我 等能能志利弊乃 母母余具佐 母母與伊豆麻勢 和我伎多流麻豆

右一首 同郡生玉部足國

一三 助 人

【題意】遠江の國佐野郡から出た生玉部足國の作である。

【口譯】父母が住んでゐる家の後の、百代草、そのやうに百代までもおいでなさいませ、わたくしの歸つて参りますまで。

【釋義】殿の後方の トノは建築物、家屋。シリへは、後の方。百代草 草の名であるが、いかなる草とも知られない。以上は序で、次の百代を起す料としてゐる。百代いてませ いつまでもおいでなさいの意。我が來たるまで 筑紫から歸り到るまで。

我が妻も 晝にかきとらむ 暇もが 旅行く我は 見つしぬばむ

右の一首は 長 下の郡物部古麻呂

二月六日 防人部領使遠江の國の史生坂本朝臣人上が進れる歌の數十八首 但

拙劣なる歌十一首あるは取り載せず

【原文】和我都麻母 晝爾可伎等良無 伊豆麻母加 多比由久阿禮波 美都都志努波牟

右一首 長下郡物部古麻呂

二月六日 防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上 進歌數十八首 但有拙劣歌十一首 不取載之

【題意】遠江の國長下郡から出た防人、物部古麻呂の作である。以上の遠江の防人の歌は、防人部領使の、遠江の國の史生の役をしてゐる坂本人上が、二月六日に十八首進上したのであるが、そのうち拙劣歌十一首は、取り載せないといふのである。さて本書には、集に載つてゐる七首のうち四首を載せておく。

【口譯】わたくしの妻を晝に書き取る程の暇もほしいものです。旅に行くわたくしは、それを見て思ひやりませうのに。

【釋義】暇もが イツマはイトマに同じ。ガは願望の辭。

【餘論】肖像晝といふことを歌つたものとして注意される歌である。

難波津に 装ひ装ひて 今日の日や 出でて罷らむ 見る母なしに

右の一首は 鎌倉の郡の上丁丸子連多麻呂

二月七日 相摸の國の防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麻呂が進れる歌の

數八首 但拙劣なる歌五首は取り載せず

【原文】奈爾波都爾 余曾比余曾比豆 氣布能日夜 伊田豆麻可良武 美流波波奈之爾

右一首 鎌倉郡上丁丸子連多麻呂

二月七日 相摸國防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麻呂 進歌數八首 但拙劣歌五首者不取載之

【題意】二月七日に、相摸の國の防人部領使なる、相摸守藤原宿奈麻呂が進上した歌八首のうち、本集には五首を捨てて三首を載せてゐる。今そのうちの一首をこゝに載せる。この歌は、鎌倉郡から出た上丁、丸子連多麻呂の作である。壯丁のうち、上丁、助丁に分つ。上丁は上等の丁の義である。

【口譯】難波の舟著で、飾りに飾つて、今日の日に出でて行くことであるか。見る母も無しに。

【釋義】装ひ装ひて 裝飾し裝飾してと、同語を重ねて意を強調するのである。今日の日や ヤは疑問。今日と

いふ日にか。出でて罷らむ 筑紫にむけて舟を出すこと。マカルは退出する。難波を出て、彼方へ行くよしである。

二四三四

真木柱 讃めて造れる 殿の如 いませ母刀自 面變りせず

右の一首は 坂田部首麻呂

【原文】 麻氣波之良 寶米豆久禮留 等乃能其等 已麻勢波波刀自 於米加波利勢受

右一首 坂田部首麻呂

【題意】 駿河の國の防人、坂田部首麻呂の作である。

【口譯】 立派な柱を、壽詞を申して作った御殿のやうに、面變りしないでおいでなさいませ、母上よ。

【釋義】 真木柱 立派な木の柱。讃めて造れる 讃め言葉を申して作ったの意で、壯大な建築をするに、まづ壽

詞を申して柱を立てるのをいふ。いませ母刀自 イマセは、おいでなさい。刀自は、一家の主婦の稱。面變りせず 壯健にの意。オメガハリといふは、方言である。

六四三四

父母が 頭かき撫で 幸く在れて いひし言葉ぜ 忘れかねつる

右の一首は 丈部稻麻呂

二月七日 駿河の國の防人部領使守從五位下布勢朝臣人主 實 進れるは九日

歌の數二十首 但拙劣なる歌は取り載せず

【原文】 知知波波我 可之良加伎奈豆 佐久安禮天 伊比之氣等婆是 和須禮加禰津流

右一首丈部稻麻呂

二月七日 駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主 實進九日 歌數二十首 但拙劣歌者不取載之

【題意】 駿河の國の防人丈部稻麻呂の作である。

二月七日に、駿河の國の防人部領使、駿河守布勢人主が、進上した歌二十首。實は二月九日であるが、その中から拙劣歌を除いて、本集には十首を載せてゐる。今そのうちの二首を録した。

【口譯】 父母が、わたくしの頭を撫でて、無事でおいでと云はれた言葉は、忘れることが出来ませぬ。

【釋義】 幸く在れて 幸福に在れと。テはトの方言。いひし言葉ぜ 原文もと伊比之古度婆會とある。今元曆校本等に、伊比之氣等婆是とするに従ふ。ケトベゼは、言葉その方言である。

【餘論】 内容は實に平凡である。しかもそれでゐて、父母の慈愛と、子の親を思ふ情とが十分に表れてゐる。方言まるだしであるのも、地方色が發揮せられておもしろい。一體に防人の歌の中でも、この駿河の國のは、方言が多く目に立つ。これは防人部領使が手を入れなかつた爲であらう。

七四三四

家にして 戀ひつつあらずは 汝が佩ける 刀になりても 齋ひてしかも

右の一首は 國造の 丁目下部使主三中の父の歌

【原文】 伊閉爾之豆 古非都都安良受波 奈我波氣流 多知爾奈里豆母 伊波非豆之加母

一三防 人

日下部は元曆校本に、父は四本願寺による。

右一首 國造丁日下部使主三中之父歌

【題意】 以下は上總の國の防人の歌で、これは、國造丁日下部三中の父が、子の出立を送つて詠んだものである。
【口譯】 家にあつて戀をしてはゐないで、そなたの佩びてゐる太刀になつても、身を守護して上げようものを。
【釋義】 戀ひつつあらずは 戀をしてはゐないで、さうして。(二七一頁參照) 齋ひてしかも 三中の佩刀となつて、不淨を斥け、身邊を守護したいものであるの意。希望を表す語法。モは感動の助辭。

庭中の 阿須波の神に 木柴さし 吾は齋はむ 歸り來までに

右の一首は 帳丁若麻績部諸人

【原文】 爾波奈加能 阿須波乃可美爾 古志波佐之 阿例波伊波波牟 加倍理久麻泥爾

右一首 帳丁若麻績部諸人

【題意】 上總の國の帳丁、若麻績部諸人の作。績を原文に續と書けるは、通用である。帳丁は、具には主帳丁とも云ひ、書記をする壯丁である。防人のうち、文筆を解するもの。

【口譯】 庭前に祀つてある阿須波の神に、木柴をさして、わたくしは齋ひませう、還つて來るまでを祝つて。

【釋義】 庭中の 自家の前庭のの意。旅行先の旅宿での義に取る説もあるが、さうではない。阿須波の神に 阿須波の神は、古事記に大年の神の子と見え、祈年祭の祝詞、神名帳等に見える神で、名義は未詳であるが、民間信仰の中に生きた神である。その神を民家の庭に祀つてあつたことと思はれる。木柴さし 樹枝をさすのである。呪禁の意である。吾は齋はむ 禍災の無いやうにみづからその旅行を祝ふのである。

麻泥爾は類聚古集による

〇四三五

二四三五

【餘論】 この歌、若麻績部諸人の作とせずに、その家族のもの、作とする説があるが、防人自身の作として、みづから旅行を祝ふところに意味がある。

道の邊の 茨の末に はほ豆の からまる君を 離れか行かむ

右の一首は 天羽の郡の上丁丈部鳥

【原文】 美知乃倍乃 宇萬良能宇禮爾 波保麻米乃 可良麻流伎美乎 波可禮加由加牟

右一首 天羽郡上丁丈部鳥

【題意】 上總の國天羽郡の防人丈部鳥の作。

【口譯】 道ほとりの茨の末枝に蔓ふ豆のやうに、からまりつく妻を、別れて行くことであらうか。

【釋義】 茨の末に ウマラはイバラに同じ。はほ豆の ハホは、蔓ふであるが、ハホといふのは、方言である。以上は序で、次句のカラマルを起すのである。からまる君を カラマルは今でもいふ語で、纏ひ著く意。君は妻をさしてゐるであらう。離れか行かむ ハカレはワカレである。ハとワと通することは、ハシルとワシルなどの例である。カは疑問の辭。

【餘論】 路傍の茨に蔓つてゐる豆のやうな、田野のものを取つて序としたのが、野人の姿さながらであつて興趣が深い。

筑紫方に 舳向る船の 何時しかも 仕へ奉りて 本郷に舳向かも

一三防 人

九四三五

右の一首は 長柄の郡の上丁若麻績部羊

二月九日 上總の國の防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂が 進れる歌の數十
九首 但拙劣なる歌は取り載せず

【原文】 都久之閉爾 敏牟加流布禰乃 伊都之加毛 都加敏麻都里豆 久爾爾閉牟可毛

右一首 長柄郡上丁若麻績部羊

二月九日 上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂 進歌數十首 但拙劣歌者不取載之

【題意】 上總の國長柄郡の防人、若麻績部羊の作。以上は、二月九日に上總の國の防人部領使、上總少目茨田沙彌麻呂が十九首進上したうち、本集には十三首を録してゐるが、今は三首を載せる。

【口譯】 筑紫の方に船を向ける船の、何時になつたら、勤仕を終つて、國の方に船が向ふことであらうか。

【釋義】 筑紫方に 九州の方に。船向る船の へは船の前方。船の船先を向ける船がの意。何時しかも シは強

める助辭。カは疑問。モは詠嘆。仕へ奉りて 防人の任をお仕へ申し上げて。國に船向かも 家郷の方に船が向くであらうの意。ムカモは、向かむに同じ。助動詞ムをモといふ例は往々ある。「八十國は難波に集ひ舟飾り我が爲む日ろを見も人もがも」(卷二十、四三二九)。見むをミモと云つてゐる。

防人に 發たむさわぎに 家の妹が 業るべきことを 言はず來ぬかも

右の二首(一首略)は 茨城の郡の若舍人部廣足

【原文】 佐伎牟理爾 多多牟佐和伎爾 伊敏能伊牟何 奈流敏伎己等乎 伊波須伎奴可母

四四三六

右二首 茨城郡若舍人部廣足

【題意】 以下は、常陸の防人の歌で、これは茨城郡の若舍人部廣足の歌二首中の一首を録したのである。

【口譯】 防人に立たうとする騒ぎに、家の妻が業とすべきことを云はないで來てしまつた。

【釋義】 業るべきことを ナリは職業で、その動詞である。家に残しておく妻の生業のことである。

【餘論】 防人の跡に心の残される情があはれである。家の妻が生活をも心配して行かねばならなかつたのに、それを顧みる隙なくして出たといふのである。この外にも、急に防人に召される旨の歌は多い。次にこれを載せるが、政治上の都合から逃亡を防ぐ爲に急に出發せしめたものと見える。

水鳥の發ちの急ぎに父母に物言はず來にて今ぞ悔しき(四三三七)

旅行きに行くに知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ(四三七六)

潮船の舳越そ白波俄しくも科せ給ほか思はへなく(四三八九)

我が面の 忘れも時は 筑波嶺を ぶり放け見つつ 妹はしぬばね

右の一首は 茨城の郡の占部小龍

【原文】 阿我母豆能 和須例母之太波 都久波尼乎 布利佐氣美都都 伊母波之奴婆尼

右一首 茨城郡占部小龍

【題意】 常陸の國茨城郡の防人占部小龍の作。

【口譯】 わたくしの顔の忘れさうな時は、筑波山をぶり仰いで見つつ、そなたは思ひ慕つて下さい。

一三 防 人

六一一

七四三六

之奴婆尼
は元曆校
本等によ

【釋義】我が面の モテはオモテで、顔容である。忘れも時は 忘レモは、忘れむに同じ。シダは時。

【参考】類句、我が面の忘れむ時は、

我が面の忘れむ時は國溢り嶺に立つ雲を見つつ偲ばせ(卷十四、三五一五)
面形の忘れむ時は大野ろにたなびく雲を見つつ偲ばむ(同、三五二〇)

八四三六

久慈河は 幸く在り待て しほ船に 眞機繁貫き 吾は歸り來む

右の一首は 久慈の郡の丸子部佐壯

【原文】久自我波波 佐氣久阿利麻豆 志富夫禰爾 麻可知之自奴伎 和波可徹里許牟
右一首 久慈郡丸子部佐壯

【題意】常陸の國久慈郡の防人、丸子部佐壯の作。

【口譯】久慈河は無事にあつて待つてゐて下さい。海ゆく船に機を十分につけて、わたしは歸つて來ませう。

【釋義】久慈河は 常陸の久慈郡にある川、今も久慈川といふ。幸く在り待て サケクはサキクに同じ。アリは 存在しつつの意。しほ船に 海上を行く舟をいふ。眞機繁貫き 機を完全に十分に取り著けて。カヂは水を撃つて船を進める具。

【餘論】懐しい家郷の地に對して、變化することなくあれかしの意を歌つてゐる。

【参考】類歌

白埼は幸くあり待て、大船に眞機繁貫きまたかへり見む(卷九、一六六八)

四三七

霰降り 鹿島の神を 祈りつつ 皇御軍に 吾は來にしを

右の二首(一首略)は 那賀の郡の上丁大舍人部千文

【原文】阿良例布理 可志麻能可美乎 伊能利都都 須米良美久佐爾 和例波伎爾之乎
右二首 那賀郡上丁大舍人部千文

【題意】常陸の國的那賀郡の上丁、大舍人部千文の作二首のうちの一である。

【口譯】かの鹿島の神を祈りながら、天皇の御軍にわたくしは來たことであるよ。

【釋義】霰降り 枕詞、霰が降つて暮しいといふ義に、鹿島に懸かる。鹿島の神を 今の鹿島神社の神で、建御雷の命を祀つてある。この神は軍神である。皇御軍に 天皇の御軍にである。イクサは軍卒をいふ。我は來にしを ヲは感動の助辭。

足柄の み坂た廻り 願みず 吾は越え行く 荒し男も 立しや憚る 不坂の關
越えて吾は行く 馬の蹄 筑紫の埜に 留り居て 吾は齋はむ 諸は 幸くと申す
歸り來までに

右の一首は 倭文部可良麻呂

二月十四日 常陸の國の部領防人使大目正七位上息長真人國島が 進れる歌の
數十七首 但拙劣なる歌は取り載せず

四三七

【原文】阿志加良能 美佐可多麻波理 可閉理美須 阿例波久江由久 阿良志乎母 多志夜波婆可流 不破乃世
伎 久江豆和波由久 牟麻能都米 都久志能佐伎爾 知麻利爲豆 阿例波伊波波牟 母呂母呂波 佐祢久等麻
乎須 可閉利久麻豆爾

右一首 倭文部可良麻呂

二月十四日 常陸國部領防人使大目正七位上息長真人國島進歌數十七首 但拙劣歌者不取載之

【題意】常陸の國の防人倭文部可良麻呂の作で、これは長歌である。防人の歌として長歌はこれのみである。以上常陸の國の防人の歌は、二月十四日に、防人部領使息長國島の進上した歌が十七首であつたが、本集にはそのうち十首を録してゐる。

【口譯】足柄の坂を廻つて、顧みもしないでわたくしは越えて行きます。勇士も立ち憚る不破の關を越えてわたくしは行きます。かの筑紫の埜に留つてゐて、わたくしは皆さん御無事にと祝ひ言をいたませう。わたくしの歸つてくるまでに。

【釋義】足柄のみ坂た廻り 足柄の御坂は、相摸の國の足柄山を越える道である、タマハリのタは接頭語。吾は越え行く クエは、越えに同じ。荒し男も アラシヲは、荒い勇悍なる壯士。立しや憚る タシは、立ちである。東語には、しばしばチをシと記してゐる。大刀をタシ、歩をカシなど。ヤは助辭で、調子を助けるもの。立ち憚るの意で、その立ちは、憚るの意を強くするもの。勇士も躊躇する不破の關の意である。馬の爪 枕詞、馬は爪を突いて歩むより、筑紫のツクに懸かる。馬を牟麻と書いてゐるのは、方言で、中世の書き方に一致してゐる。筑紫の埜に 九州の地の岬角に。留り居て チマリはトマリと同じ、駐屯すること。吾は齋はむ 吾

倭文は西本願寺本等による

は歌の作者可良麻呂。イハハムは、呪禁しよう、祝ひ言しようの意。諸は幸くと申す 作者可良麻呂が云ふので、前句の吾は齋はむの内容である。諸は家に残した人々、父母妻子などの族をいふ。皆様お達者であれと、旅先で祝ふのである。歸り來までに 郷里に歸り來るまでの意で、齋はむに懸かるであらう。

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つ吾は

右の一首は 火長今奉部與曾布

【原文】 祢布與利波 可敝里見奈久豆 意富伎美乃 之許乃美多豆等 伊彥多都和例波

右一首 火長今奉部與曾布

【題意】 以下は下野の國の防人の歌で、これは火長なる今奉部與曾布の作である。火長は、軍防令に、「凡兵士十人爲一火」とあつて、一火は十人であるから、その十人の長である。

【口譯】 今日からは顧みることなくして、天皇陛下の、下等の護りとして、わたくしは出で立ちます。

【釋義】 顧みなくて 後を顧みること無くして。醜の御楯と シコノは、自卑の詞。役にも立たない、下等などいふ程の意に、罵詈して用ゐるのが普通であるが、こゝでは、自分の上に用ゐてゐる。醜の醜草、醜ほととぎす、醜つ翁、醜屋、醜の醜手、醜の丈夫などの用語例がある。御楯は、楯となるべきものゝ意で、兵士の譬喩に用ゐてゐる。出で立つ吾は 出で立つは、出發する、身を處する等の意で、終止形である。

天地の 神を祈りて 幸矢貫き 筑紫の島を さして行く吾は

一三防 人

六一五

三四三七

四四三七

右の一首は 火長大田部荒耳

【原文】 阿米都知乃 可美乎伊乃里豆 佐都夜奴伎 都久之乃之麻乎 佐之豆伊久和例波

右一首 火長大田部荒耳

【題意】 下野の國の防人、火長の大田部荒耳の作。

【口譯】 天や地の神を祈つて、武器を携へて、九州の島をさしてわたくしは参ります。

【釋義】 幸矢貫き サツヤは、狩獵に供する矢の稱で、實用に適する矢の意である。ヌキは、身に帯ぶること。

さして行く吾は イクはユクに同じ。さして行くで切れる。吾はと主格を下に置いたのは、前の歌と同じく倒置法である。

松の木けの 竝なみたる見れば 家人いはびとの 吾われを見送ると 立たたりし如もころ

右の一首は 火長物部眞島

二月十四日 下野の國の防人部領使正六位上田口朝臣大戸が進れる歌の數十

八首 但拙劣なる歌は取り載せず

【原文】 麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等乃 和例乎美於久流等 多々理之母己呂

右一首 火長物部眞島

二月十四日 下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戸 進歌數十八首 但拙劣歌者 不取載之

【題意】 下野の國の防人、火長の物部眞島の作。以上の下野の防人の歌は、二月十四日に、その國の防人部領使

の田口大戸が進上した十八首のうち、十一首を載せてゐる。

【口譯】 松の木けの竝なんでゐるのを見れば、家人いはびとの人がわたしを見送ると立つてゐたやうである。

【釋義】 松の木けの 木をケといふは、古語で、他にも例がある。「朝霜あさしもの御木みぎのさ小橋こはし、廷臣たうじんい渡わたらすも、御木みぎのさを橋はし」（日本書紀、景行天皇卷）。竝なみたる見れば 竝なんでゐるのを見れば。古代研究民俗學篇（折口信夫君）

六三九頁に、撓たがえてゐることで、松の木けのぐにやりとしてゐる意であると爲してゐるのは、一解である。家人いはびとの イハヒトは、家人に同じ。家に残した人々である。吾われを見送ると 作者の出發を見送ると。立たたりしもころ 立ちありし如しの意。モコロは、如しの意の古語。「立てば玉藻たまものもころ」（卷二、一九六）、「沖うに住すも小鴨こものもころ」（卷十四、三五二七）。

旅りと云いふ 眞旅またびになりぬ 家の妹いもが 著ちせし衣ころもに 垢あかつきにかり

右の一首は 占部虫麻呂

【原文】 多妣等弊等 麻多妣爾奈理奴 以弊乃母加 枳世之己呂母爾 阿加都枳爾迦理

右一首 占部虫麻呂

【題意】 以下は下總の國の防人の歌で、これは、千葉郡の防人占部虫麻呂の作。

【口譯】 旅りといふが、ほんとに旅りになつた。家の妻いもが著ちせた衣ころもに垢あかがついてしまつた。

【釋義】 旅りと云いふ 旅りといふほどの意。イフのイを沒收していふのである。眞旅またびになりぬ マタビは、眞の旅といふほどの意。家の妹いもが 妹をモとのみいふも、方言である。垢あかつきにかり カリはケリの方言。垢あかづいたこと

よと詠嘆してゐる。

四〇四三九

大君の 命かしこみ 弓の共 眞寢か渡らむ 長けこの夜を

右の一首は 相馬の郡の大伴部子羊

二月十六日 下總の國の防人部領使少目從七位下縣犬養宿禰淨人が 進れる歌の數二十二首 但拙劣なる歌は取り載せず

【原文】 於保伎美能 美已等加之古美 由美乃美他 佐尼加和多良牟 奈賀氣己乃用乎

右一首 相馬郡大伴部子羊

二月十六日 下總國防人部領使少目從七位下縣犬養宿禰淨人 進歌數二十二首 但拙劣歌者不取載之

【題意】 下總の國の相馬郡の防人、大伴部子羊の作。以上下總の國の防人の歌は、二月十六日にその國の防人部領使、下總少目縣犬養淨人の進上した歌二十二首のうち、本集に載せた十一首から採録したものである。

【口譯】 天皇陛下の御命令を奉じて、弓と共に寝ることでありませうか。長いこの夜を。

【釋義】 大君の命かしこみ 天皇の命令の恐多さに。弓の共 原文もと由美乃美仁とあつて、夢のみにと解してゐた。夢ばかり見つつの意である。然るに元曆校本類聚古集等の古本に、仁を他に作つてゐる。これによれば、ユミノミタと讀むべく、さてミタは、共にの意のムタの方言と解せられるから、弓と共にと解したのである。夢は本集には、イメであつて、ユメでは無く、かつ夢と共に寝ることは意を成さないであらう。さ寢か渡らむサは接頭語。カは疑問の助辭。渡らむは、夜を過さむの意で、寝て過すことであらうかの意。長けこの夜を

長きこの夜をである。

三〇四四〇

大君の 命かしこみ 青雲の 棚引く山を 越よて來ぬかむ

右の一首は 小長谷部笠麻呂

二月二十二日 信濃の國の防人部領使 道に上りて病を得て來たらず 進れる歌の數十二首 但拙劣なる歌は取り載せず

【原文】 意保伎美能 美已等可之古美 阿乎久牟乃 等能妣久夜麻乎 古與豆伎怒加牟

右一首 小長谷部笠麻呂

二月二十二日 信濃國防人部領使 上道得病不來 進歌數十二首 但拙劣歌者不取載之

【題意】 信濃の國の防人、小長谷部笠麻呂の作。この信濃の防人の歌は、二月二十二日に、その國の防人部領使は病氣で來ないで、歌十二首を進上して來た。そのうちの三首を集には録してゐる。

【口譯】 天皇陛下の御命令を奉じて、白雲の懸かつてゐる山を越えて參りました。

【釋義】 青雲の 青雲は白雲である。山の高いのを表さうとしてこの語を出してゐる。雲をクムと云ふは訛である。トノビタはタナビクに同じ。一體に掛かつてゐる意。越よて來ぬかむ 越えて來ぬかにも同じ。

【餘論】 信濃の國の防人の歌は、十二首のうち、拙劣歌として捨てられたのが九首で、採られたのはただ三首に過ぎない。その中でもこの歌は、かなりに訛が甚しい。また國造小縣郡の他田大島の作は、唐ころも裾に取り著き泣く子らを置きてぞ來ぬや母無しにして

等能、古與豆、長谷部、元曆校本に於ける

美他、元曆校本に於ける

右一首 妻椋椅部弟女

二十九日
は古葉略
類聚鈔に
よる。

二月二十九日 武藏國部領防人使椋正六位上安曇宿禰三國 進歌數二十首 但拙劣歌者不取載之

【題意】 武藏の國の防人、橋樹郡の上丁物部真根の妻なる椋椅部弟女の作。以上武藏の國の防人の歌は、二月二十九日に、その國の防人部領使、武藏椋安曇三國が二十首進上したうち、本集に十二首を録してゐる。

【口譯】 旅に出てそのまゝ寝るに、衣の紐が切れたならば、この針を持つて、わたくしの手と思つてお附け下さる。

【釋義】 草枕 枕詞。旅の丸寝の 旅にて、著た儘に寝るをいふ。紐絶えば 衣の紐が切斷したならば。我が手と著ける 我は、作者自身をいふ。旅に出た夫が、妻の手と思ひて、針を持つて紐を著けよの意である。口は助辭。これの針持し ハルはハリに同じ。モンはモチに同じ。針を旅立つ夫に贈つて詠んだので、これの針と、特に指定してゐる。

五四四二

佐伎毛利
は元曆校
本等に
よる。

防人さきもろに 行くは誰が夫と 問ふ人を 見るが羨しさ 物思ひもせず

【原文】 佐伎毛利爾 由久波多我世登 刀布比登乎 美流我登毛之佐 毛乃母比毛世受

【題意】 以下の四首は、いづれの年の交替の防人の作とも知れない。磐余諸君といふ者が八首抄寫して、大伴家持に贈つたのを、家特が録しておいた中の作である。さてこの一首は、防人を夫に持つた妻の作である。

【口譯】 防人に行くのは、どこの君かと問ふ人を見るに羨しいことである。その人は物思ひもしないでゐる。

【釋義】 行くは誰が夫と 行くのは、誰の夫であるかと。見るが羨しさ 見るに羨しくある意。物思ひもせず 問ふ人が物思ひもしないでゐるのである。物思ひもせずにあれば誰かと問ふとの由である。

七四四二

家の妹いはろ 吾わをしのぶらし 眞結まゆむすひに 結むすひし紐ひもの 解ゆるくらく思おもへば

【原文】 伊波乃伊毛呂 和乎之乃布良之 麻由須比爾 由須比之比毛乃 登久良久毛倍婆

【題意】 これは防人に出た男子の作である。

【口譯】 家の妻が、わたしを思つてゐるであらう。眞結びに結んだ衣の紐の解けることを思へば。

【釋義】 家の妹ろ イハは家の方言、前に家人とあつた。ロは接尾語。吾をしのぶらし シノブは思慕する。古くはシヌブであるべきに、シノブとあるは、方言であらう。ラシは、根據ある推量。眞結ひに マユスビは、マムスビに同じ。結ひし紐の ユスヒシはムスビシ。衣の紐である。解くらく思へば 解くることを思へば。人に思はれると、衣の紐のおのづから解けるといふ俗信によつてゐる。愛しと思へりけらし、勿忘れと結びし紐の解くらく思へば(卷十一、二五五八)

一四四三

小竹こたけが葉はの さやぐ霜しも夜よに 七重ななへ著かる 衣ころもに益ませる 子ころが膚はだはも

【原文】 佐左賀波乃 佐也久志毛用爾 奈奈辨加流 故呂毛爾麻世流 古侶賀波太波毛

【題意】 同じく男子の作である。

【口譯】 小竹の葉の騒ぐ冬の霜ふる夜に、七重重ねて著る衣にも増つて暖い、わが妻の膚はよ

【釋義】 さやく霜夜に 風が吹いて小竹の葉の騒ぐ寒夜にの意。七重著る 七重は、多く重ねるをいふ。カルは著るに同じ。衣に益せる 衣に増してある。子ろが膚はも 子ろは、妹ろと同じ語法。妻をいふ。膚はもは、詠嘆の語法で、別れて後に思ひ出してゐる。

障へ敢へぬ 命にあれば 愛し妹が 手枕離れ あやに悲しも
右の八首は 昔年の防人の歌なり 主典刑部少録正七位上磐余伊美吉諸君 抄
寫して兵部少輔大伴宿禰家持に贈れり

【原文】 佐辨奈辨奴 美許登爾阿禮婆 可奈之伊毛我 多麻久良波奈禮 阿夜爾可奈之毛

右八首 昔年防人歌矣 主典刑部少録正七位上磐余伊美吉諸君 抄寫 贈兵部少輔大伴宿禰家持

【題意】 これも男子の作である。

【口譯】 お断りの出来ない勅命であるから、愛すべき妻が手枕を離れて、ほんたうに悲しいことである。

【釋義】 障へ敢へぬ サヘニアヘヌで、障ふることの出来ない、謝絶の出来ない意。愛し妹が カナシは愛すべくある意で、妹に續く。あやに悲しも アヤニは、驚くべくある意を表す副詞。

○昔年相替りし防人の歌一首

闇の夜の 行く先知らず 行く吾を 何時來まさむと 問ひし兒らはも

【原文】 昔年相替防人歌一首

夜未乃欲能 由久左伎之良受 由久和禮乎 伊都伎麻左牟等 登比之古良波母

【題意】 これもいつの年何といふ人のとも知れない。やはり大伴家持が昔の防人の歌として筆録しておいたものである。

【口譯】 闇の夜のやうに行く先を知らずに行く我を、何時おいでになりますかと尋ねた妻は哀である。

【釋義】 闇の夜の 闇の夜の如くにの意。枕詞。問ひし兒らはも 尋ねた妻はまあといふ程の意。ハモは提示して詠嘆する助辭である。

今年行く 新嶋守が 麻衣 肩の糺ひは 誰かとりみむ

【原文】 今年去 新島守之 麻衣 肩乃間亂者 誰取見

【題意】 卷七にある作者未詳の歌で、古歌集から出たもの。防人の身の上を憐んで、その人の家族、又は他人の詠んだ作。

【口譯】 今年行く新しい島守の麻衣の肩の絲のよりは、誰が直して上げるでせう。

【釋義】 新島守が 原文新島守之とあつて、古くは、ニヒシマモリノと讀んで居り、後鳥羽院の「我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」の御製の詞もこれによつたのであるが、仙覺に至つて、ニヒサキモリカと讀み改めた。今、萬葉集新考に、「八百日行く濱の沙も我が戀にあに益らじか沖つ島守」(卷四、五九六)の歌を證として、島守とあるは、シマモリと讀めといふに従ふ。性質は防人に全く同じである。防人は埼をも嶋をも守るによつて、サキモリともシマモリともいふのである。新を冠したのは、交替して新に赴くものであるか

らである。麻衣 麻の衣は粗服である。肩の糺ひは マヨヒは、織物が古くなつて、織絲の片より透いてくるをいふ。誰かとりみむ トリミルは保護、修繕の意。誰か取り繕つてやるであらう。家族を離れて遠く行く人を憐んでゐる。

○防人の歌

あきて行かば 妹はまがなし 持ちて行く 梓の弓の 弓束にもがも

【原文】 防人歌

於伎氏伊可婆 伊毛婆摩可奈之 母知氏由久 安都佐能由美乃 由都可爾母我毛

【題意】 以下二首は問答で、この歌は誰とも知られない防人になつた男子の作である。

【口譯】 うち置いて行つたならば、わが妻は愛憐の情に堪へない。わたしの持つて行く梓の弓の束にでもあつて欲しいことである。

【釋義】 おきて行かば そなたを捨てておいて行つたならばの意。妹はまがなし そなたは切に愛すべくあつて堪へられない。持ちて行く 自分の持つて行くところの。弓束にもがも 弓束にてもあれかしと願望する句法。弓束は、弓の手に持つ部分。

あくれ居て 戀ひば苦しも 朝狩の 君が弓にも ならしもの

右の二首は問答

【原文】 於久禮爲氏 古非波久流思母 安佐我里能 伎美我由美爾母 奈良麻思物能乎

右二首問答

【題意】 前の歌に對する、その妻の答歌である。

【口譯】 後に残つて居て戀ふならば苦しいことあります。朝狩などをする、あなたの弓にもなりたいたいものでございます。

【釋義】 戀ひば苦しも 留守をして戀ふこととならば苦しいことであるの意。朝狩の 弓を修飾してゐる。弓の一部分の性質を擧げて、その語の枕詞となしてゐる。ならましものを なりたいたいものを、しかしさうでなくて残念である。

○防人の情に爲りて 思を述べて作れる歌一首并に短歌

大君の 命かしこみ 妻別れ 悲しくはあれど 丈夫の 情振り興し とりよそひ
門出をすれば たらちねの 母かき撫で 若草の 妻は取り付き 平けく 我は齋
はむ ま幸くて 早還り來と 眞袖持ち 涙を拭ひ 咽びつつ 言語すれば 群鳥
の 出で立ちがてに 滞り 顧みしつ つ いや遠に 國を來離れ いや高に 山を
越え過ぎ 蘆が散る 難波に來居て 夕汐に 船を浮け居る 朝なぎに 舳向け漕
がむと 侍候ふと 我が居る時に 春霞 鳥廻に立ちて 鶴が音の 悲しみ鳴けば
はるばるに 家を思ひ出 負征箭の そよと鳴るまで 歎きつるかも

奈遲は元
曆校本に
よる。

之麻未は
代匠記に
よる。波
呂爾は
總呂爾は
元曆校本
等による

【原文】 爲_二防人情_一陳_二思_一作歌一首并短歌

大王乃 美已等可之古美 都麻和可禮 可奈之久波安禮特 大夫 情布里於許之 等里與會比 門出乎須禮婆
多良知禰乃 波波可伎奈邊 若草乃 都麻波等里都吉 平久 和禮波伊波波牟 好去而 早還來等 麻蘇邊毛
知 奈美太平能其比 牟世比都都 言語須禮婆 群鳥乃 伊遲多知加豆爾 等騰已保里 可弊里美之都々 伊
也等保爾 國乎伎波奈例 伊夜多可爾 山乎故要須疑 安之我知流 難波爾伎爲豆 由布之保爾 船乎宇氣須
惠 安佐奈藝爾 倍牟氣許我牟等 佐毛良布等 和我乎流等伎爾 春霞 之麻未爾多知豆 多頭我禰乃 悲鳴
婆 波呂婆呂爾 伊弊乎於毛比邊 於比會箭乃 會與等奈流麻邊 奈氣吉都流香母

【題意】 天平勝寶三年に兵部少輔大伴家持が、難波に出張してゐて、防人に關する事務を取り扱つてゐる中、彼等の心情を憐んで作つた歌で、二月十九日の作である。防人になつた心で詠んでゐる。

【口譯】 天皇陛下の御命令を奉じて、妻と別れ悲しくはあるが、男兒の心を振り起し、装をして門出をすれば、母はかき撫で、妻は取り付き、平においてになるやうにお祝ひいたしませう。御無事に行つていらつしやいと、袖で涙を拭ひ、咽びながら話をするから、出で立ち難く、躊躇して、ふり返り見つつ、段々遠く國を離れ來、いよ／＼高く山を越え過ぎて、この難波に來て居て、夕の汐に船を浮べ居る、朝の風に舳を向けて漕がうと待つてゐるとして、わたくしが居る時に、春霞が島ほとりに立つて鶴の聲が悲しんで鳴けば、遙に家を思ひ出して、負うてゐる征箭が、そよと音を立てるまで、歎息をしたことである。

【釋義】 とりよそひ 装束を整へて。たらちねの 母の枕詞。若草の 妻の枕詞。ま幸くて 好去をマサキクと讀むは、この時代の慣用で、他にも例がある。眞袖持ち 眞袖は兩方の袖である。群鳥の 枕詞。群鳥のやう

に出で立つと續く。蘆が散る 難波の枕詞。夕汐に船を浮け居る 夕の満潮に船を下して浮べ居る。侍候ふと 朝の風を待つてゐるとして。はるばるに 遙にある形容の副詞。負征箭の 負ひたる征箭の。ソヤは、背にある矢の義で、兵士の背負へる矢をいふ。そよと鳴るまで ソヨは箭の音の擬音である。

海原に 霞たなびき 鶴が音の 悲しき宵は 國方し思ほゆ

【原文】 宇奈波良爾 霞多奈妣伎 多頭我禰乃 可奈之伎與比波 久爾弊之於毛保由

【題意】 前の歌の反歌である。原文にはもと反歌とあつたが、今古本に無いに従ふ。反歌と特にことわらないのは例が多い。

【口譯】 海上に霞がたなびいて、鶴の鳴く聲の悲しい夕は、國の方が思はれる。

【釋義】 國方し思ほゆ クニベは、國の方である。シは助辭。

【餘論】 海上に霞がたなびいて鶴の鳴く春宵の美しい景のもとに、大船に乗つてゐる壯士の國を思ふ、いかにも情景が悲壯である。鶴の音に旅情を催されるは、しば／＼歌はれてゐる。防人自身の作ではないが、防人の乗船を見送つた家持にして、始めて描き出される境地である。

家おもふと 寐を寝ず居れば 鶴が鳴く 蘆邊も見えず 春の霞に
右は十九日 兵部少輔大伴宿禰家持作る

【原文】 伊弊於毛負等 伊乎禰受乎禮婆 多頭我奈久 安之弊毛美要受 波流乃可須美爾

九四三九

原文もと
歌の前行に
反歌あり。今
元曆校本より
削る。

四四〇

右十九日 兵部少輔大伴宿禰家持作之

【題意】 反歌の、その二である。

【口譯】 家を思ふと、睡らずに居れば、春の霞がこめて、鶴の鳴いてゐる蘆邊も見えない。

【餘論】 春の霞の爲に、鶴の鳴く蘆邊も見えずの文脈である。前の宵を受けて、これもやはり春宵の霞がかつてゐる情景である。

この長歌および反歌は、すべて、防人が船に乗つて明日の船出を待つてゐる前宵の情を寫したものである。

○三月三日 防人を檢校する勅使 并に兵部の使人等 同に集へる飲宴

に作れる歌三首

朝なさな 揚る雲雀に なりてしか 都に行きて はや歸り來む

右の一首は 勅使紫微大弼安倍沙美麻呂の朝臣

【原文】 三月三日 檢校防人勅使并兵部使人等 同集飲宴作歌三首

阿佐奈佐奈 安我流比婆利爾 奈里豆之可 美也古爾由伎豆 波夜加弊里許牟

右一首 勅使紫微大弼安倍沙美麻呂朝臣

【題意】 同じく天平勝寶七歳の三月三日に、交替の防人を檢閲した勅使や、事に携つた兵部の役人たちが集つて酒宴を開いた時の歌。この歌は勅使安倍沙美麻呂の作である。紫微大弼といふは紫微中臺といふ役所の大弼。紫微中臺は、勅を奉じて諸の役所に頒ち行ふことを司る。大弼は、上から二番目の役。

三 四四三

五 四四三

【口譯】 朝毎に上る雲雀になりたいものである。都に行つてはや還つて來ようものを。

【釋義】 朝なさな アサナアサナの下のアが沒收されたもの。毎朝。なりてしか 願望の語法。

雲雀あがる 春べとさやに なりぬれば 都も見えず 霞たなびく

【原文】 比婆里安我流 波流弊等佐夜爾 奈理奴禮波 美夜古母美要受 可須美多奈妣久

【題意】 前と同じ時の歌で、以下二首は、大伴家持の作である。

【口譯】 雲雀の揚る春と正しくなつたから、都も見えないで霞がたなびいてゐる。

【釋義】 春べとさやになりぬれば 春べは、春の方。サヤニは、さやかに、はつきりと、明白に。

【餘論】 前の勅使の歌を承けて、同じく、雲雀あがる、都等の語を用ひて應唱してゐる。すべて答歌は、前の歌の語を用ひるのが例である。

含めりし 花の初めに 來し吾や 散りなむ後に 都へ行かむ

右の二首は 兵部の使少輔大伴宿禰家持

【原文】 布敷賣里之 波奈乃波自米爾 許之和禮夜 知里奈牟能知爾 美夜古徹由可無

右二首 兵部使少輔大伴宿禰家持

【口譯】 蕾んでゐた花の初に來たわたくしは、花の散る後に都へ行くでせうか。

【釋義】 含めりし フムは蕾む。蕾んでゐた、まだ咲かなかつた。來し吾や ヤは疑問の辭。

一三防

人

六三一

兵部使は
元曆校木
等による

五 四四三

一四 橘諸兄と藤原仲麻呂(惠美押勝)

橘諸兄は、敏達天皇の後裔、栗隈の王の孫、美努の王の子で、はじめ葛城の王と稱した。天平八年十一月、上表して皇族を辭し、橘宿禰の姓を賜つて臣下に列した。天平十五年左大臣となり、十八年大宰帥を兼ね、天平勝寶元年には正一位に進み、翌年、朝臣の姓を賜つた。天平勝寶八歳二月、致仕し、天平寶字元年正月を以つて薨じた。すなはち、位、人臣を極め、權勢比ふべきものが無かつたのであるが、晩年には、藤原仲麻呂、漸く天寵に狎れて權を專にした。諸兄の薨後、その長子橘奈良麻呂は、安宿の王、黄文の王、鹽燒の王、道祖の王、大伴胡麻呂等と謀つて、廢立を企て、仲麻呂を亡さうとしたこと顯れ、多く死罪流罪に處せられ、又は獄死した。奈良麻呂の處分は、傳へないが、やはりこの時に死んだものと思はれる。橘氏は、これによつて殆滅亡したのである。時に天平寶字元年六月で、諸兄の薨後、いまだ數月に過ぎざる時であつた。後、仁明天皇の承和十四年に太政大臣正一位を奈良麻呂に贈られたのは、天皇の外曾祖父であつたからである。

藤原仲麻呂は、鎌足の孫、武智麻呂の第二子である。孝謙天皇の恩を蒙つて、頻に官位昇進し、天平寶字二年には、姓のうちに惠美の二字を加へ賜ひ、名を押勝と改めしめ、よりに藤原惠美朝臣押勝と稱した。遂に正一位大師(太政大臣)に至つたが、道鏡が、新に天恩を恣にするに及び、これを除かうとして謀泄れ、近江に奔り、官軍と戦ひ敗れて斬られた。時に寶字八年九月であつた。

奈良朝後期に於ける名族の一榮一枯に至つては、眞に傷心のものがある。今、萬葉の歌を讀んで、いささか、橘氏と惠美氏とを併せ録して、彼等の興亡の跡を弔ひたいと思ふ。

七三〇

安積香山 影さへ見ゆる 山の井の 淺き心を 吾が思はなくに

右の歌は 傳へ云ふ 葛城の王 陸奥の國に遣さえし時 國司祇承緩怠異に
甚し 時に 王の意悦ばず 怒の色面に顯れ 飲饌を設けしかども 肯へて宴
樂せざりき ここに前の采女あり 風流の娘子なり 左の手に觸を捧げ 右の
手に水を持ち 王の膝を撃ちて 此の歌を詠みき ここにすなはち王の意解け
悦びて 樂飲すること終日なりき

【原文】 安積香山 影副所見 山井之 淺心乎 吾念莫國

右歌傳云 葛城王遣于陸奥國之時 國司祇承緩怠異甚 於時王意不悦 怒色顯面 雖設飲饌 不肯宴樂 於是前采女 風流娘子 左手捧觴 右手持水 擊之王膝 而詠此歌 爾乃王意解悦 樂飲終日

【題意】 葛城の王が陸奥の國に遣された時、國の役人が、迎接するに怠があつて殊に甚しかつた。時に王が意に、不愉快に思つて、飲食を設けたけれども、宴樂せられなかつた。こゝに前の采女があつて、風流の娘子であつたが、左の手に觴を捧げ、右の手に酒を持つて、王の膝を撃つてこの歌を詠んだので、王の意が解けて、終日宴樂したと傳へてゐる。

此歌、解
悦は類案
よる。等
古集等に

葛城の王は、橘諸兄の前名であるが、その外に、聖德太子時代にもあり、天武天皇の御代にも同名の人が卒してゐる。しかしこゝには大伴家持と縁故の深かつた諸兄の、前名の時代のことと解してよいであらう。すなはちこの歌は、陸奥の國から出た前の采女の、任を終へて國に歸つてゐたものゝ歌で、自作か、誦み習うた歌であるかは審でない。

【口譯】安積香山にある、影さへ見える山の井のやうに、浅い心をわたくしは持つては居りませぬ。

【釋義】安積香山 陸奥の國安積郡にある山。今、岩代の國に屬してゐる。影さへ見ゆる山の井の 山の井の清らかなるを表す爲に、影さへ見ゆると叙してゐる。さて以上初句から山の井のまでは序で、次の浅きと云はむが爲に置いたものである。我が思はなくに わたくしは思はぬこととありますの意。わたくしは深い心を持つてをります。深くあなたを思つてをりますの意。

○夫の君に戀ふる歌一首

飯喫めど 甘くもあらず 行き往けど 安くもあらず 茜さす 君が情し 忘れかねつも

右の歌一首は 傳へ云ふ 佐爲の王 近習の婢あり 時に宿直違あらずして 夫の君に遇ひ難し 感情馳せ結ばほれ 係戀實に深し ここに當宿の夜 夢の裡に相見る 覺寤めて探り抱くに 會て手に觸るることなし 爾及哽咽歎歎し 高聲に此の歌を吟詠しき 因王 聞きて哀慟して 永く侍宿を免しき

【原文】戀夫君歌一首

飯喫騰 味母不在 雖行往 安久毛不有 赤根佐須 君之情志 忘可禰津藻

右歌一首 傳云 佐爲王 有近習婢也 于時宿直不違 夫君難遇 感情馳結 係戀實深 於是當宿之夜 夢裡相見 覺寤探抱 會無觸手 爾乃哽咽歎歎 高聲吟詠此歌 因王聞之哀慟 永免侍宿也

【題意】佐爲の王に近習の婢があつて、宿直に違なくしてその夫に逢ふことが出来なかつた。戀ふるあまりに宿直の夜に、夢に夫を見て、覺めて詠んだ歌である。佐爲の王がこれを聞いて哀慟して、侍宿を免じたといふことである。佐爲の王は、諸兄の弟で、兄と共に姓を賜つて、橘佐爲と稱した人である。

【口譯】御飯を戴いてもおいしくございませぬ。あるきましても安くございませぬ。かの君の心が忘れかねました。

【釋義】茜さす 赤い色を帯ぶる義で、美しい意味に、君の枕詞とする。君が情し シは助辭。

【餘論】この歌は、七句から成つてゐる。五音七音の句を重ねて最後に五七七と止める、普通の長歌の形式として、最短の歌である。古今六帖にはゆる小長歌と稱するものである。形式に興味があるので、諸兄に縁は遠いが載せておく。

○冬十一月 左大辨葛城の王等に 姓橘の氏を賜へる時 御製の歌一首

橘は 實さへ花さへ その葉さへ 枝に霜降れど いや常葉の樹

右は 冬十一月九日 從三位葛城の王 從四位上佐爲の王等 皇族の高名を辭して外家の橘姓を賜ふこと已に訖りぬ 時に太上天皇 皇后共に皇后の宮にありて肆宴を爲し すなはち橘を賀ぐ歌を作り給ひ 并に御酒を宿禰等に賜ひき或は云ふ この歌一首は 太上天皇の御歌なり 但天皇皇后の御歌各一首ありといへり その歌遺落していまだ探り求むることを得ず 今案内を檢するに八年十一月九日 葛城の王等 橘宿禰の姓を願ひて表を上る 十七日を以ちて表の乞に依りて 橘宿禰を賜ふ

【原文】 冬十一月 左大辨葛城王等 賜姓橘氏之時 御歌一首

橘者 實左倍花左倍 其葉左倍 枝爾霜雖降 益常葉之樹

右 冬十一月九日 從三位葛城王 從四位上佐爲王等 辭皇族之高名賜外家之橘姓已訖 於時太上

天皇 皇后 共在_ニ于皇后宮_ニ以爲_ニ肆宴_ニ 而即御_ニ製賀_ニ橘之歌_ニ 并賜_ニ御酒宿禰等_ニ也 或云 此歌一首

太上天皇御歌 但天皇皇后歌 各有_ニ一首_ニ 其歌遺落 未得_ニ探求_ニ焉 今檢_ニ案内_ニ 八年十一月九日

葛城王等 願_ニ橘宿禰之姓_ニ上_ニ表_ニ 以_ニ十七日_ニ依_ニ表乞_ニ賜_ニ橘宿禰_ニ

【題意】 天平八年十一月九日葛城の王（橘諸兄）その弟佐爲の王等、皇族の高き名を辭して、母方の姓なる橘氏を賜はらむことを願うた。そこで十七日にその表の請によつて橘姓を賜つた。時に太上天皇（元正天皇）皇后（光明皇后）、共に皇后の宮にしまして、宴を爲し、橘を賀ぐ歌をお作りになり、酒を諸兄等に賜はつた。その時の天皇（聖武天皇）の御製の歌である。或る人のいふに、この歌は、太上天皇の御製である。天皇と皇后と

左大辨、
橘者、
實左倍、
花左倍、
其葉左倍、
枝爾霜雖降、
益常葉之樹、
等元曆は並に
に校本に
よる

にも御歌各一首があるといふが、その歌は落ちてしまつたので、探し求むることが出来ない。

諸兄等の母は、縣大養橘宿禰三千代といひ、はじめ美努の王に嫁して、諸兄等を生み、後に藤原不比等に嫁して光明皇后を生んでゐる。案内といふは、役所の記録の名。事務に便する爲に、諸事を記し留めおくもの。

【口譯】 橘は、實も花も賞すべき樹である。その葉さへも、枝に霜が降つても、一層冬枯のせぬ樹である。

【釋義】 實さへ花さへ この下に、賞すべくある意を省いてある。これを補つて解すべきである。いや常葉の樹イヤは、彌々、一層。トコハは、常緑で不變なるをいふ。

【餘論】 この歌は譬喩歌で、橘に寄せて、橘氏を賀し、いかなる事變に際しても一層榮ゆべきを祝して詠ませられたものである。

【参考】 橘を讀むる歌

かけまくもあやにかしこし、皇神祖の神の大御代に、田道間守常世に渡り、八矛持ち參來出し、非時の香の木、の實を、かしくも遺し給へれ、國も狭に生ひ立ち榮え、春されば孫枝萌いつつ、ほととぎす鳴く五月には、初花を枝に手折りて、嬢子等に裏にも遣りみ、白栲の袖にも扱入れ、か細しみ措きて枯らしみ、熟ゆる實は玉に貫きつつ、手に纏きて見れども飽かず、秋づけば時雨の雨零り、あしひきの山の木末は、紅にほひ散れども、橘の成れる其の實は、直照りに彌見が欲しく、み雪降る冬に到れば、霜置けどもその葉も枯れず、常盤なすいや榮はえに、然れこそ神の御代より、宜しなべこの橘を、非時の香の木の實と、名づけけらしも

反歌一首

橘は花にも實にも見れどもいや時じくに猶し見が欲し

閏五月二十三日、大伴宿禰家持作る。(卷十八、四一一、四一二)

○橘宿禰奈良麻呂 詔に應ふる歌一首

奥山の 眞木の葉凌ぎ 零る雪の ふりは益すとも 地に落ちめやも

【原文】 橘宿禰奈良麻呂 應詔歌一首

奥山之 眞木葉凌 零雪乃 零者雖益 地爾落日八方

【題意】 前の御製の歌に對する奈良麻呂の御答の歌である。奈良麻呂は、諸兄の子。

【口譯】 奥山の樹々をおし伏せて雪が降る、その降るといふやうに、年を経て古り益つても、零落することはございませぬ。

【釋義】 眞木の葉凌ぎ 眞木は、檜、杉、松の如き、立派な木をいふ。凌ぎは、打ち勝つて、押し伏せて。零る雪の 以上三句は序で、下のフリと云はむが爲に零ると云つてゐる。ふりは益すとも 上を受けて、古くなりまゐるとも、時世を歴ても意である。地に落ちめやも 橘を譬喩として、御製を賜はつたので、橘の實は、土に落ちることがありませうや、ないと結んでゐる。反語である。

○太上皇 難波の宮に御在しし時の歌七首 清足姫の天皇なり

左大臣橘宿禰の歌一首

掘江には 玉敷かましを 大君を 御船漕がむと 豫ねて知りせば

六四〇五

眞木は元
曆校本等
による。

六一〇一

太上皇は
元曆校本
等による

【原文】 太上皇 御在難波宮之時歌七首 清足姫天皇也

左大臣橘宿禰歌一首

保里江爾波 多麻之可麻之乎 大皇乎 美敷禰許我牟登 可年豆之里勢婆

【題意】 以下太上天皇(元正天皇)が、難波の宮においてになつた時の歌で、この歌は、御船が、江を浜つて遊宴した日に、左大臣の橘諸兄の奏した歌である。この時の歌は、後に天平二十年の三月に、田邊福麻呂が、越中守大伴家持のもとを訪れた時に誦したのを、家持が筆録しておいたものである。これより前何時、この遊覧があつたかは知られない。

【口譯】 掘江には玉を敷いておきませうものを。陛下の御船を漕ぐことと、前から存じて居りましたならば。

【釋義】 掘江には 難波の掘江にはで、今御船の浜つてゐる江のことである。玉敷かましを 玉を敷かうものを、敷かないで残念である意。大君を 陛下の御事を、かくかくと知つてをらばの意に、大君をと云ふ。

○御製の歌一首和

玉敷かず 君が悔いていふ 掘江には 玉敷き満てて 繼ぎて通はむ 或は云ふ玉こきしきて

右二首 件の歌は 御船江を浜りて遊宴する日 左大臣の奏并に御製

【原文】 御製歌一首和

多萬之賀受 伎美我久伊豆伊布 保理江爾波 多麻之伎美豆々 都藝豆可欲波牟 或云多麻古伎之伎豆

右一首 件歌者 御船浜江遊宴之日 左大臣奏并御製

一四 橘諸兄と藤原仲麻呂

七四〇五

【題意】 前の諸兄の歌に對する、元正天皇の御答への御製の歌。

【口譯】 玉を敷かないで、そなたの悔いて云ふこの掘江には、玉を敷き満して、引き續き来て見ませう。

【釋義】 君が悔いていふ 君は諸兄。諸兄の後悔して云ふところの。玉敷き満して 玉を一杯に敷き満して。繼ぎて通はむ 引き續いて通ひ來ようの意。玉こきしきて コキは、緒に貫ける珠を抜き解いての意。玉を扱いて敷いての意で、これは、第四句の別傳である。

○御製の歌一首

橘の 撓のたちばな 彌つ代にも 我は忘れじ この橘を

【原文】 御製歌一首

多知婆奈能 登乎能多知波奈 夜都代爾母 安禮波和須禮自 許乃多知婆奈乎

【題意】 以下三首は、前と同じ時、橘諸兄の邸で、宴遊せられた時の歌で、この一首は元正天皇の御製である。

【口譯】 橘の、枝も撓むばかりに榮えてゐる橘は、永き世にわたしは忘れますまい。この橘を。

【釋義】 撓のたちばな 原文登乎能多知波奈とあるが、考に乎は之の誤として、トノノヲチバナと読み、殿の橘の義としてゐる。(略解に乎は能の誤、古義に乎は乃の誤とし、訓義は皆同じである。)今原文の儘に従ふ。トヲは、撓むの語幹で、撓んでゐることをいふのであらう。他に體言として用ゐた例は無いが、トヲヨル(撓寄る)の語はある。彌つ代にも いやが世にも、重ね來る世にも、永久に。

【餘論】 この歌は譬喩歌で、諸兄一族の榮を、橘に寄せて祝はれてゐる。

八四〇五

九四〇五

○河内の女王の歌一首

橘の 下照る庭に 殿建てて 酒宴います 我が大君かも

【原文】 河内女王歌一首

多知婆奈能 之多泥流爾波爾 等能多豆天 佐可彌豆伎伊麻須 和我於保伎美可母

【題意】 同じ時の河内の女王の歌。河内の女王は、高市の皇子の女で、寶龜十年に薨じた。

【口譯】 橘の樹下に照り輝く庭に、御殿を立てて、御酒宴遊ばされる陛下でございまするよ。

【釋義】 橘の下照る庭に 橘の花が、樹の下までも照り輝かしてゐる庭の意。酒宴います サカミヅキは、酒に漬ること、酒宴。イマスは、おいであそばされる。我が大君かも 大君は元正天皇。カモは詠嘆の辭。

○粟田の女王の歌一首

月待ちて 家には行かむ 我が挿せる 明ら橘 影に見えつつ
右件の歌は 左大臣橘の卿の宅に在して 肆宴せし時の御歌 并に奏せる歌なり

【原文】 粟田女王歌一首

都奇麻知豆 伊敏爾波由可牟 和我佐世流 安加良多知婆奈 可氣爾見要都追

右件歌者 在ニ於左大臣橘卿之宅肆宴 御歌并奏歌

一四 橘諸兄と藤原仲麻呂

一首、奏
歌は西本
願寺本等
による。

四〇六

【題意】 同じ時の粟田の女王の歌。粟田の女王は、系統は詳でない。天平寶字八年五月に薨じた。
 【口譯】 月を得つてわたくしの挿頭としてゐる、あかるい橋の花が影にも見えつつ、家には歸りませう。
 【釋義】 家には行かむ 終止の語法。我が挿せる 挿頭として髪に挿してある意。あから橋 アカラは、明るい
 照り輝くばかりの意を表してゐる。あから娘子など用ゐてゐる。次の歌によるに、夏の行幸であるから、橋の
 花を挿頭し、これを襲めたのである。影に見えつつ 月影に見えつつで、見えつつ家には行かむの意。

一四〇六

掘江より 水脈引きしつつ 御船さす 賤男の伴は 河の瀬奏せ

【原文】 保里江欲里 水乎妣吉之都追 美布禰左須 之津乎能登母波 加波能瀬麻宇勢
 【題意】 以下二首は、同じ御幸の折、御船が、綱を以つて江を浜つて遊宴した時の作で、作者は傳はらない。
 【口譯】 掘江から、水脈に従つて御船を棹さす、卑しい者どもは、河の瀬を案内つかまつれ。
 【釋義】 水脈引きしつつ ミヲは、水の流れる筋。ミヲビキは、水脈に従つて案内すること。水先案内。イただ向
 ふ敏馬をさして、潮待ちて水脈引き行けば（卷十五、三六二七）。御船さす 御船を棹さす 賤男の伴は シツ
 ヲは、卑賤の男。トモは、その者ども。河の瀬奏せ マウセは、河の瀬のことを仕へ奉れ、御船を淺瀬などに
 乗り上げることの無きやうに、執り行への意である。

二四〇六

夏の夜は 道たづなづし 船に乗り 河の瀬ごとに 棹さし上れ
 右件の歌は 御船綱手を以ちて江を浜り遊宴しませる日作れり 傳へ誦する人

は 田邊史福麻呂なり

【原文】 奈都乃欲波 美知多豆多都之 布禰爾能里 可波乃瀬其等爾 佐乎左指能保禮
 右件歌者 御船以綱手之江遊宴之日作也 傳誦之人 田邊福麻呂是也
 【口譯】 夏の夜は道がたどどしい。船に乗つて、河の瀬ごとに、棹さし登るがよい。
 【釋義】 道たづなづし 夏の夜は暗いので、道がたどどしい。この道は、綱で船を引く岸上の道をいふものら
 しい。船に乗り 陸上を綱引くのは、道がおぼつかないから、船に乗つて棹をさせの意である。

○左大臣橋の卿を壽がむ爲 預ねて作れる歌一首

古に 君の三代經て 仕へけり 吾が大主は 七世申さね
 【原文】 爲壽左大臣橋卿預作歌一首
 古昔爾 君之三代經 仕家利 吾大主波 七世申禰
 【題意】 天平勝寶三年八月、大伴家持が、越中の國から上京する途上、京に入つてから橋諸兄を壽かむ爲、あら
 じめ作つた歌。
 【口譯】 昔の世は、天皇の三代までも仕へました。あなた様は、七世も、天下の政をお執りなさいませ。
 【釋義】 君の三代經て仕へけり 三世の君に仕へた長壽の古人をいふので、それとさす人があるであらうが、何
 人とも知られない。代匠記に武内宿禰のこととし、新考に漢土の霍光のこととしてゐる。吾が大主は オホヌ
 シは、二人稱の尊稱で、諸兄をさす。ヌシといふが普通であるが、オホヌシと云つてゐるのは特別の尊稱で

大主は類
葉古集等
による。

六四二五

ある。正倉院文書には、藤原仲麻呂のことを大主と稱してゐる。

【餘論】この項の作者大伴家持は、特に諸兄の眷顧を被つてゐる。諸兄が、家持の歌に訂正を試みたことなども傳つてゐる。それでこの詠があるのであらう。

○天平寶字元年十一月十八日 内裏にて肆^{とよのあかり}宴さこしめす歌二首

天地を 照らす日月の 極^{きはみ}無く あるべきものを 何をか思はむ

右の一首は 皇太子の御歌

【原文】天平寶字元年十一月十八日 於内裏肆宴歌二首

天地乎 互良須日月乃 極奈久 阿流倍伎母能乎 奈爾乎加於毛波牟

右一首 皇太子御歌

【題意】天平寶字元年十一月十八日、内裏にて宴遊せられた折の歌二首。この一首は、皇太子の御歌である。皇太子は、天武天皇の孫、舍人親王の御子なる、大炊の王で、後、天平寶字二年八月に帝位に即き、八年十月、先帝の爲に廢せられた淳仁天皇である。

【口譯】天地を照す日月のやうに極りなくあるべきものであるから、何事をか思ひませうや。

【釋義】天地を照らす日月の 以上は、極なくと云はむが爲の序である。極なくあるべきものを 極限は無くあるべきであるをの意。帝位の悠久にましますを祝つてゐる。何をか思はむ 何を思ひ、何を歎かうぞ。何も思ふべきことは無いの意。

さ^の子ども たはわざな爲そ 天地の 固めし國ぞ やまと島根は

右の一首は 内相藤原朝臣奏す

【原文】伊射子等毛 多波和射奈世曾 天地能 加多米之久爾曾 夜麻登之麻禰波

右一首 内相藤原朝臣奏之

【題意】藤原仲麻呂（惠美押勝）の作である。内相は、紫微内相の意で、内外の兵事を掌る官である。

【口譯】さあ人々よ、愚な事をしないがよい。この日本帝國は、天地の神の固め成した國であるぞ。

【釋義】いざ子ども イザは、人を誘ひ立てる詞。子どもは自分より輩下の者どもに對して呼びかける語である。天地の固めし國ぞ 天の神地の神の修理固成した國であるぞの意に、國體の堅固なることを説示してゐる。やまと島根は 廣く日本國の意にヤマトシマを用ゐてゐる。ネは、地上に根據ある意に附する接尾語。

【餘論】この年正月に橋諸兄薨じ、その六月には、諸兄の子奈良麻呂が主謀となつて、事を擧げて廢立を行ひ仲麻呂を逐はうとして、却つて事露れ、一黨悉く誅に伏した。仲麻呂のこの歌は、その敵の失脚を嘲つて、勝ち誇つた調子の歌である。たはわざなせそは、碎いて云へば、ふさけたまねをするな、この語氣である。しかしその仲麻呂も一時は天下を掌握したが、幾程もなく、八年九月には一族と共に近江の湖水のほとりに斬られたのである。

一五 市原の王

市原の王は、志貴の皇子の曾孫、春日の王の孫、安貴の王の子である。天平寶字七年、攝津大夫、また造東大寺長官となつた。天平勝寶年間に玄蕃頭であつたので自然寫經所に關係深く、自筆の書狀、自署の文書など、正倉院に尙藏せられてゐる。また天平勝寶三年のころ、寫經所に囑して、歌林七卷を寫さしめたことが傳つてゐる。市原の王の歌の傳つてゐるものは短歌のみである。奈良朝の初に活躍した名家の、多く凋落した後を受けて、また一方の雄であつたことは窺はれる。殊にその人格を仰ぐべき作品を留めてゐるのは、尙ぶべきことである。

○市原の王 宴に父安貴の王を禱ぐ歌一首

春草は 後は散り易し いくしく 常磐に坐せ 貴き我が君

【原文】 市原王宴禱父安貴王歌一首

春草者 後波落易 嚴來 常磐爾座 貴吾君

【題意】 市原の王が、酒宴の席で、父の安貴の王を祝つた歌。

【口譯】 春草は、後は散り易くございます。嚴として磐石のやうに遊ばしませ。貴きわが父上よ。

【釋義】 後は散り易し 春の草の散り易いといふこと、いささか適はぬやうでもある。しばらく文字の落易とあるがまゝに讀んでおく。いくしく 原文もと嚴成とある。今成を來の誤として、意を以つて改め嚴來として

九八八

嚴來は意を以つて改む。常磐は類聚古集等による。

類聚古集等の古訓により、イツクシクと讀む。卷六に弓高來（一〇五二）とあるを山高來の誤として、ヤマタカクと讀んでゐる例による。いかめしく儼乎としてある意である。但し、仙覺本に嚴成としてイハホナスと訓し、諸説これに従つてゐるが、下のトキハといふこと、元來、恒久性の磐石の義であらうから、これに更に嚴のやうにと修飾を加ふること、意を成さぬに近い。よつて舊訓に従つたのである。常磐に坐せ 恒久においてなされの意。貴き我が君 我が君は、父の安貴の王をさす。

○市原の王 獨子を悲める歌一首

言問はぬ 木すら妹と見 ありとふを ただ獨子に あるが苦しき

【原文】 市原王悲獨子歌一首

言不問 木尙妹與見 有云乎 直獨子爾 有之苦者

【題意】 市原の王が、ただ一人の子で兄弟の無いことを歎いた歌。

【口譯】 物を云はぬ木ですら、兄弟があるといふを、自分はただ一人の子であるのは、苦しいことである。

【釋義】 言問はぬ 物を云はない。清んで讀む。木すら妹と見 木ですら妹や兄が。イモトセは、男女の兄弟で、

古く、長幼を論ぜず、女子に對してイモといひ、男子に對してセと云つたので、兄弟姉妹の意に、イモセと云つたのである。

【餘論】 古くは、この歌は、市原の王がただ一人しか子の無いのを歎いた意に解し、市原の王には、知られてゐるだけでも、光仁天皇の皇女、能登内親王を娶つて、五百井の女王と、五百枝の王との子があるのを不當とし

七二〇〇

てゐた。これは萬葉集新考の説のやうに、市原の王が、父安貴の王に取つてただ一人の子であることを歎いたものとするのがよい。父のただ一人の子なる市原の王に對する慈愛、また市原の王の、父の寂しさを案じて、獨子なる心苦しさを歎いた、親子間の愛情の、前の歌と合せて涙ぐましまで汲み取られる。

○同じき月十一日 活道の岡に登り 一株の松の下に集ひて飲せる歌二首

一つ松 幾代か歴ぬる 吹く風の 聲の清めるは 年深みかも

右の一首は 市原の王の作

【原文】 同月十一日 登活道岡集一株松下飲歌二首

一松 幾代可歴流 吹風乃 聲之清者 年深香聞

右一首 市原王作

【題意】 以下二首は天平十六年正月十一日、活道の岡に登つて、一株の松のもとに集ひて飲せる時の歌で、この一首は、市原の王の作である。活道の岡は、山城の恭仁の地近くにある岡。この歌は恭仁の京時代の作である。

【口譯】 この一つ松は、幾代を経たのであらうか。吹く風の音の清んでゐるのは、年を重ねてゐる爲であらうか。

【釋義】 幾代か経ぬる カは疑問の辭。この句で切れる語法である。聲の清めるは 松風の聲が清らかに聞えるのは。年深みかも 年深き故にか、年を重ねて古くなつてゐる故であらうかの意である。

たまきはる 壽は知らず 松が枝を 結ぶところは 長くとぞ念ふ

右の一首は 大伴宿禰家持の作

【原文】 靈刻 壽者不知 松之枝 結情者 長等曾念

右一首 大伴宿禰家持作

【題意】 同じき活道の岡の宴に、これは大伴家持の作つた歌である。

【口譯】 われ等の壽命は、いつまでの命とも知らないが、この松の枝を結ぶ情は、命長くあれと思つてである。

【釋義】 たまきはる 枕詞。壽は知らず 壽命の長さは、いつまでとは知らない。人の命は測り難いものである。

意。松が枝を結ぶ情は 松が枝を結ぶは、命長く、幸福にあれとの呪禁である。(二九頁参照) 長くとぞ念ふ 長くあれかしと思ふ意。

○市原の王の歌一首

時待ちて 落つる時雨の 零り零りぬ 明けむ朝か 山のもみぢむ

【原文】 市原王歌一首

待時而 落鐘禮能 零零奴 聞朝香 山之將黃變

【題意】 市原の王が夜の時雨を詠んだ歌である。

【口譯】 時節を待つて降る時雨が、降りに降つた。明日の朝は、山が黄葉するであらうか。

【釋義】時待ちて 時雨は、後世は冬季のものとしてゐるが、萬葉では、秋の末から冬の初にかけて降る雨を稱してゐる。時節を定めて降る雨だから、時待ちてといふ。時の來るのを待つての謂である。零り零りぬ 原文もと雨令零奴とあつて、アメヤミテと讀んでゐた。萬葉考に、零り零りぬの誤としてゐる。今新訓萬葉集の改訂に従つて、零り零りぬの誤とした。雨降りしたことをいふのである。明けむ朝か 下句の原文もと、朝香山之將黃變とあつて、アサカノヤマノウツロヒヌラムと讀んでゐた。しかるに類聚古集等、朝の上に開の字があるによつて、今の如く讀むのである。明けなむ朝には山の草木が黃葉するであらうかと疑つてゐる。

○二月 式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にて宴せる歌十首(九首略)

梅の花 香をかぐはしみ 遠けども 心も萎に 君をしぞ思ふ

右の一首は 治部大輔市原の王

【原文】 二月於式部大輔中臣清麻呂朝臣之宅宴歌十首

宇梅能波奈 香乎加具波之美 等保家杼母 已許呂母之努爾 伎美乎之曾於毛布

右一首 治部大輔市原王

【題意】 天平寶字二年二月、中臣清麻呂の邸宅で宴を開いた時の歌で、この一首は市原の王の作である。

【口譯】 梅の花の香のよさに、遠いけれども心も萎れて君を思つてをります。

【釋義】 香をかぐはしみ カグハシは、香の微妙なる形容。香のよいこと。更に香をと云つたのは、カグハシの力とは、分化して久しく経たからである。聲のよさに。遠けども 遠くあるけれども。主人中臣清麻呂の宅

と、市原の王の宅と遠いことをいふ。心も萎に 心も萎えくこと。(七三頁参照)。君をしぞ思ふ 君は中臣清麻呂をさしてゐる。

【餘論】 梅は大陸から渡つて來た植物で、萬葉時代の文人の愛好の對象となつてゐる。本集に多く梅を愛する歌が出てゐるが、いづれも、梅の花を視覚に訴へてゐる歌ばかりである。しかるにこの歌は、梅の花の香を歌つてゐるもので、これは集中に、ただこの歌一首のみである。これが平安朝以後になると、ほとんど梅の香を歌つたものばかりになつてしまふのは、注意すべきである。

一六 大伴家持

大伴家持は、安麻呂の孫、旅人の子である。はじめ安積の親王の内舍人に身を起し、爾來官位順を逐うて進み、天平十八年六月には越中守となりて任地に赴き、天平勝寶三年七月には少納言に轉じて歸京し、天平寶字元年の橘奈良麻呂の亂に、大伴氏の人々多く連座したにも拘はらず、却つて榮任に就いた。これは彼と惠美押勝との姻戚關係に基くものと見られるが、天平寶字の末に押勝が漸く勢威を失ふに當り、家持まづ左遷せられて薩摩守となり、光仁天皇が即位せられてからは、官位も次第に進んで從三位參議左大辨兼春宮大夫に至つたが、延暦元年、氷上川繼の叛に座するを以つて官位を除かれた。幸に同年五月に赦されて原官に復し、更に進んで中納言兼春宮大夫持節征夷將軍となつて、延暦四年八月に薨じた。しかも彼が長逝してはまだ葬られず、二十餘日の時大伴繼人、竹良等は、長岡の新造宮の處に於いて、中納言藤原種繼を射殺した。繼人、竹良等は次いで誅せられ、事家

持に關すとして彼は官位を奪はれ、實は皇太子早良の親王の意に出でたものであるとして、やがて早良の親王も廢せられるに至つた。

以上略記した彼の經歷を見るに、亡び行く名族の最後の一人として、踏み留らうとして、留り得なかつた趣が見える。彼が萬葉集の最後の一人として、奈良朝末期の歌壇を飾つてゐる姿と、偶然とは云ひながら、似てゐることもあはれである。萬葉集の歌は、天平寶字三年正月、すなはち家持が因幡守となつた翌年の、國の廳での宴の歌に止つてゐる。その後の彼の作品は、残つてゐないので、萬葉集に載つてゐるのが、彼の作品として残つてゐる全部である。

彼の作品は、初期のものは模倣の分子に富んでゐる習作であつて、文學としての價值に乏しい。越中から都に歸つて後の、短歌の作には、漸くその特殊の境地を開いたものが見受けられる。清らかなしかし寂しい味を出して來たのである。平板から歩み進んで、ある深さに到達した。好んで長歌をも作つてゐるが、長歌は長大の作もあるが、類型的で、熱に缺けてゐるのは遺憾である。

彼の歌は、父の旅人、姑の坂上郎女の感化によるものであらう。先人として柿本人麻呂山上憶良の作品に傾倒してゐて、題材、手法、詞句の各方面に亘つて、多くの影響を受けてゐる。

○大伴宿禰家持の初月の歌一首

振仰ぎて 若月見れば 一目見し 人の眉引 おもほゆるかも

【原文】 大伴宿禰家持初月歌一首

九九四

人乃は元
曆校本等
による。

振仰而 若月見者 一目見之 人乃眉引 所念可聞

【題意】 大伴家持の初月を詠んだ歌である。初月は月初めの新月のこと。この歌は集中、天平五年の作のうち之列ねてあるので、彼の歌のうち、年代の知られる最初の作である。

【口譯】 天をふり仰いで新月を見れば、一目見た人の書き眉が思はれることである。

【釋義】 振り仰ぎて フリは仰ぎを強める爲に添へてゐる。人の眉引 マヨビキは、眉毛を刷つて、美しく黛で畫いた眉のこと。新月の形に似てゐるから、眉引が思はれると歌つてゐる。

○同じき坂上大嬢 家持に贈れる歌一首

春日山 霞たなびき 情ぐく 照れる月夜に 獨かも寝む

【原文】 同坂上大嬢 贈家持歌一首

春日山 霞多奈引 情具久 照月夜爾 獨鴨念

【題意】 大伴坂上大嬢が、大伴家持に贈つた歌で、前を承けてゐるから、同じきといふ。坂上大嬢は坂上郎女の女、父は大伴宿奈麻呂である。後に家持の妻となつた人であるが、この贈答は、家持が通つてゐた時代のものであらう。

【口譯】 春日山に霞がたなびいて心も鬱陶しく照つてゐる月夜に、わたくしは獨寝ることをごさいますか。

【釋義】 情ぐく 氣が沈んで、晴れやかにならない形容。情ぐく思ほゆるかも、春霞たなびく時に言の通へば（卷四、七八九、家持）、「情ぐきものにぞありける、春霞たなびく時に戀の繁きは」（卷八、一四五〇、大伴坂上郎女）

など、この語と、春霞たなびく時とを共に用ゐてゐる。この歌と同じやうな情趣である。

七三六

○また家持 坂上大嬢に和ふる歌一首

月夜には 門に出で立ち 夕占問ひ 足下をぞせし 行かまくを欲り

【原文】 又家持 和坂上大嬢歌一首

月夜爾波 門爾出立 夕占問 足下乎曾爲之 行乎欲焉

【題意】 前の歌に對する家持の返歌である。

【口譯】 月夜には行きたいと思つて、門口に立つて、夕占を問ひ、足占をも致しました。

【釋義】 夕占問ひ ユフケは、夕暮に道に出て、行人の語を聞いて吉凶を占ふをいふ。足下をぞ爲し アシウラは、あらかじめ一定の間を心に定め、その間を歩行して、その歩行数の奇數か偶數かによつて、吉凶を判すること。坂上大嬢の許に赴く可否を、占に問ふのである。この句、句切。行かまくを欲り ユカマクは、行かむこと。ホリは欲して。行きたいと思つての意で、上に返る句法。

○同じき大嬢 家持に贈れる歌二首

かにかくに 人はいふとも 若狭道の 後瀬の山の 後も會はむ君

【原文】 同大嬢贈家持歌二首

云々 人者雖云 若狭道乃 後瀬山之 後毛將會君

會は考に
よる。

七三七

【題意】 また大嬢から家持に贈つた二首の歌である。

【口譯】 とやかく人はいふとも、若狭路の後瀬の山のやうに、後も會ひませう君よ。

【釋義】 かにかくに かやうにもあのやうにも、とやかくと、種々に。人はいふとも 世の人が云ひ立てても。

若狭路の後瀬の山の この二句は序で、次の後もと云はむが爲に挿入した句である。若狭路は、若狭に行く道、後瀬の山は山の名。後も會はむ君 原文もと後毛將念君とあるが、ノチモモハムキミでは、情を爲さぬから、萬葉考によつて、念を會の誤とする。

【餘論】 この歌、若狭路の後瀬の山は、何等の緣故があるわけではない。ただ次句に後と云はむが爲に、便宜に取り用ゐたまでである。中世以後、歌人は居ながらにして名所を知るといひ、机上にて名所を詠んだ歌を作るのは、かかる處に端を發してゐる。

世間し 苦しきものに ありけらく 戀に堪へずて 死ぬべき思へば

【原文】 世間之 苦物爾 有家良久 戀二不勝而 可死念者

【口譯】 戀に堪へないで、死ぬべきを思ふと、これは、世の中での苦しいことであつたことだ。

【釋義】 ありけらく ありけることの義で、あつたことは。

○また家持 坂上大嬢に和ふる歌二首

後瀬山 後も逢はむと 念へこそ 死ぬべきものを 今日までも生けれ

一六 大伴家持

六五五

七三九

七三八

【原文】 又家持和坂上大嬢二歌二首

後瀨山 後毛將相常 念社 可死物乎 至今日毛生有

【題意】 前の二首に對する家持の返歌である。

【口譯】 後瀨山の名のやうに、後にもあはうと思へばこそ、死ぬべきものを、今日までも生きて居ります。

【釋義】 後瀨山 坂上大嬢の歌の句を取つて、返歌を起してゐる。この歌では後もと云はむが爲に置いた枕詞となつてゐる。念へこそ 條件法で、思へばこそその意。今日までも生けれ 上にコソがあるから生けれと結んだので、今日までも生きてあるの意である。

言のみを 後も逢はむと 勲に 吾を憑めて 逢はざらむかも

【原文】 事耳乎 後毛相跡 勲 吾乎令憑而 不相可聞

【口譯】 言葉ばかり、後にも逢ひませうと、丁寧にわたくしを安心させておいて、逢はないのでせうか。

【釋義】 勲に 殷勤に、丁寧に、親切に。吾を憑めて わたくしに頼みをかけさせて。逢はざらむかも 逢はずあらむか、逢はないのだらうか。

○更に大伴宿禰家持 坂上大嬢に贈れる歌十五首(八首略)

夢の逢は 苦しかりけり 覺きて かき探れども 手にも觸れねば

【原文】 更大伴宿禰家持 贈坂上大嬢二歌十五首

七四〇
後毛は桂
本等によ
る。

七四一

夢之相者 苦有家里 覺而 搔探友 手二毛不所觸者

【題意】 以下七首は、また家持から坂上大嬢に贈つた十五首のうちである。

【口譯】 夢に逢ふことは苦しいことでした。目が覺めて、あたりを搔き探つても手にも觸れませんから。

【釋義】 夢の逢は 夢の中に逢ふと見ることは。覺きて 夢が破れて、目が覺めて。

【餘論】 この十五首のうちには、張文成の遊仙窟から材料を取つてゐるものが多い。この歌もその一つで、その書中の、少時坐睡則夢見十娘、驚覺攪之忽然空、手の文に依つたものである。

遊仙窟は、唐代の小説で、張文成といふもの、使を河源に奉じ、迷つて仙窟に入り、十娘、五嫂の兩仙女の款待を受けたことを叙したもので、はやく本朝に入り、日本文學の上に多大の刺戟を與へたものである。萬葉では、この家持の歌の外にも、山上憶良の、沈痾自哀文中にもその句を引用し、大伴旅人の遊於松浦河序も、その影響を受けたものと認められる。

一重のみ 妹が結ばむ 帯をすら 三重結ぶべく 吾が身はなりぬ

【原文】 一重耳 妹之將結 帶乎尙 三重可結 吾身者成

【口譯】 あなたが一重にお結びになる帯を、三重に結ぶまでに、わたくしは瘦せました。

【餘論】 この歌も、遊仙窟の、日々衣寬、朝々帶緩の句、文選の古詩に、相去日已遠、衣帶日已緩の句などから來てゐると云はれる。戀の爲に身の瘦せたことを歌つてゐる。

【参考】 類想

一六 大伴家持

六五七

七四二

(上略)白栲の紐をも解かず、一重結ふ帯を三重結ひ、苦しきに仕へ奉りて(下略、卷九、一八〇〇)
栲垣の久しき時ゆ戀すればわが帯緩ぶ、朝夕ごとに(卷十三、三三六二)
一二つ無き戀をしすれば常の帯を三重結ぶべく我が身は成りぬ(同、三二七三)

暮さらば 屋戸開け設けて 吾待たむ 夢に相見に 來むといふ人を

【原文】 暮去者 屋戸開設而 吾將待 夢爾相見二 將來云比登乎

【口譯】 夕暮になつたならば、家の戸を明け設けて、わたしは待つてをりませう。夢に相見に來ようといふ人を。

【釋義】 屋戸開け設けて 屋の戸を明け設けて。マケテは、準備して。

【餘論】 この歌も、遊仙窟に、今宵莫閉戸、夢裏向渠邊とあるを取つたと云はれる。

生ける世に 吾ははまだ見ず 言絶えて 斯く何恰く 縫へる囊は

【原文】 生有代爾 吾者未見 事絶而 如是何恰 縫流囊者

【口譯】 言葉も無いまでに、かやうにおもしろく縫つてある袋は、この世ではわたくしはまだ見たことがござい
ません。

【釋義】 言絶えて 言語を絶して、云ふべき言葉も無いまでに。縫へる囊は 坂上大嬢から、縫ひものゝ施して
ある袋を贈つたので、それをさしてゐる。雜物を納めて、腰に下げる用のものである。

四七四六

四七五
幾許毛は
桂本等に
よる

相見ては 幾日も経ぬを 幾許も 狂ひに狂ひ おもほゆるかも

【原文】 相見而者 幾日毛不經乎 幾許毛 久流比爾久流必 所念鴨

【口譯】 お目に懸かつてから幾日も経ないのに、非常にも狂ひに狂つて思はれることでもあります。

【釋義】 幾許も 多くも、非常にも。狂ひに狂ひ 心が狂つて思はれる。思ひが狂ひに狂ふ意である。

夜のほども 吾が出でて來れば 吾妹子が おもへりしくし 面影に見ゆ

【原文】 衣之穗杼呂 吾出而來者 吾妹子之 念有四九四 面影二三湯

【口譯】 夜の未明にわたくしが出て來ましたから、わが妻の物思つてゐた顔が、面影に見えます。

【釋義】 夜のほども 未明をいふのであらう。語義は審でない。この次の歌にもあり、「秋の日の穂田を雁が音聞
けきに夜のほどもにも鳴き渡るかも」(卷八、一五三九)がある。また「沫雪のほどもほどもに零り敷けば奈良
の都し思ほゆるかも」(卷八、一六三九)のホドロも、同語であらうと云はれてゐる。ハダラに通ずるといふ説
もあるが、いまだ定説と爲し難い。おもへりしくし オモヘリシクは、思ひありしこと、物思ひ居りしことの
意。上のシは、時の助動詞、クは、その體言法。下のシは、強める爲の助辭。かやうなシクの例は、「すみのえ
の名兒の濱邊に馬立てて玉拾ひしく常忘らえず」(卷七、一一五三)、「わが夫子を何處行かめとさき竹の背向に
寢しく今し悔しも」(同、一四二二)、「秋の野の尾花が末をおしなべて來しくもしるく逢へる君かも」(卷八、一
五七七)などある。面影に見ゆ オモカゲは、實物なくして目に見ゆるをいふ。目について離れない。

四七五四

四七五五

夜のほども 出でつつ来らく 度まねく なればわが胸 截り焼く如し

【原文】 夜之穂杼呂 出都追来良久 遍多數 成者吾曾 截焼如

【口譯】 夜の未明に出て来ることが、度数が多くなれば、わたしの胸は、截り焼くやうであります。

【釋義】 出でつつ来らく 出でつつ来ること。度まねく マネクは、遍くで、多數の意。截り焼く如し 胸を截り、また焼く如く、苦しくある意。

【餘論】 この歌も、遊仙窟の、未三會飲_ニ炭、腹熱如_ク燒、不憶_レ吞_レ刃、腸穿似_レ割の文によつたものと云はれてゐる。

○笠女郎 大伴宿禰家持に贈れる歌廿四首(十八首略)

君に戀ひ 甚も術なみ 平山の 小松が下に 立ち嘆くかも

【原文】 笠女郎 贈大伴宿禰家持歌二十四首

君爾戀 痛毛爲便無見 檜山之 小松下爾 立嘆鳴

【題意】 以下六首は、笠女郎から、家持に贈つた二十四首のうちである。笠女郎は、笠は氏であらうが、傳未詳である。女郎は、郎女よりは身分の低い女子であることを表してゐる。

【口譯】 あなたに戀をして、何とも致し方が無いので、奈良山の小松の下に、立ち嘆くこととさせていただきます。

【釋義】 痛も術なみ イタモは、非常に、甚しく。打撃を受けて、苦痛である意の語義がもとであらう。平山の 平城の都の北方に在る山。小松が下に 老松に對して、比較的小さい松を小松といふ。

四五九三

四五九六

八百日行く 濱の沙も 吾が戀に あに益らじか 奥つ島守

【原文】 八百日往 濱之沙毛 吾戀二 豈不益歟 奥島守

【口譯】 八百日も往く長い濱の沙の数も、わたくしの戀には、とても益らないでせうね、沖の島の番兵さん。

【釋義】 八百日行く 八百日は、日数の極めて多いことを表してゐる。その日数を行く意で、濱の長いことを示す句。濱の沙も 濱の沙の数もの意である。豈益らじか 豈は、どうしてか、何とての意。益らじは、益らないであらう。カは疑問の辭。どうして益つてゐないのでせうか。益つては居ないので。奥つ島守 沖の方の島の守兵。島守は、島を守る兵士。防人に同じ。

四六〇〇

伊勢の海の 磯もとどろに 寄する浪 恐き人に 戀ひわたるかも

【原文】 伊勢海之 磯毛動爾 因流浪 恐人爾 戀渡鳴

【口譯】 伊勢の海の磯も鳴り響いて寄せる浪のやうな、貴く恐多い人に戀をすることとさせていただきます。

【釋義】 磯もとどろに 磯邊も鳴り響くまでに。トドロは、大きな音の擬聲。寄する浪 以上の三句は、恐きと云はむが爲の序に用ゐてある。恐き人に カシコキは恐多い。家持は名家なので、貴人として取り扱つてゐる。

劔大刀 身に取り副ふと 夢に見つ 何のさとしども 君に逢はむ爲

【原文】 劔大刀 身爾取副常 夢見津 何如之怪曾毛 君爾相爲

一六 大伴家持

六六一

四六〇四
大六〇元
劔大刀は元
曆校本等
による。

片垵に、片思を懸け詞としてゐる。底にぞ吾は 片垵の底に歌を書いてやつたので、かく云ふ。戀ひなりにける 戀ひて片垵の底の文字と成つた意。片思の底に沈んでゐる意を兼ね表してゐる。
 【餘論】 上代の相聞の歌は、普通に紙に書いて贈つたと思はれるが、これは、土の椀の中に書いて贈つたといふのが、變つてゐておもしろい。

四七〇八

またも逢はむ 因もあらぬか 白栲の 我が衣手に 齋ひ留めむ

【原文】 復毛將相 因毛有奴可 白細之 我衣手二 齋留目六

【口譯】 又お目にかかる手だてもございませぬでせうか。わたくしの袖に、齋ひ留めませうものを。

【釋義】 因もあらぬか 手段、因縁も無いだらうか。有つて欲しいの意。白栲の 枕詞。齋ひ留めむ 咒禁をして、再還り来るやうに、留めておかう、齋ひによつて、再其處に立ち歸るとの信仰にもとづく。逢つたならば、又歸り来るやうに、袖に齋ひ留めようものをの意。

○紀女郎 大伴宿禰家持に贈れる歌二首

戲奴反してわがため 吾が手もすまに 春の野に 抜ける茅花ぞ 食して肥えませ

【原文】 紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首

戲奴和氣之爲 吾手母須麻爾 春野爾 拔流茅花曾 御食而肥座

【題意】 以下二首は、紀女郎が、茅花と合歡の花とに添へて、大伴家持に贈つた歌。紀女郎は、紀鹿人の女で、

○一四六
友云は代
匠記によ
る。茅花
は西本願
寺本等
による

名を小鹿といひ、安貴の王の妻であつた。

【口譯】 奴のために、手も忙しく春の野に抜いた茅花ですぞ。召し上つてお肥りなさいませ。

【釋義】 戲奴がため ワケは、奴をさして云ひ、又奴の自稱にも用ゐる。實の奴で無く、戲にいふのであるから戲奴の字を用ゐる。反してわけと云ふとは、支那で字音を註する反切の法に則つて、戲奴の讀み方を註したので、古くからある註である。吾が手もすまに スマニは「手もすまに植ゑし萩」(卷八、一六三三)の例もあつて、ほぼその内容は推知されるが、正確には知り難い。住まにの義とすれば、住むは落ち著く意であるから、ニを打消と見て、手も忙しく、手も繁くの意に解せられるが、果してどうであらうか。食して肥えませ ヲスは、食するの敬語。茅花を食へば肥大すると信ぜられてゐたのであらう。家持の瘦せた男であつたことを思はせる。

晝は咲き 夜は戀ひ宿る 合歡木の花 君のみ見めや 戲奴さへに見よ

右は 合歡の花 并に茅花を折り攀ちて 贈れるなり

【原文】 晝者咲 夜者戀宿 合歡木花 君耳將見哉 和氣佐倍爾見代

右 折攀合歡花并茅花贈也

【口譯】 晝は咲いて夜は戀ひて寝る、この合歡木の花は、主人ばかり見ませうや、その方さへ御覽なさい。

【釋義】 晝は咲き夜は戀ひ寝る 合歡木の葉は、晝は開き夜は閉づるので、これを夜は物戀ひしつづ寝ると譬喩に借りてゐる。合歡木の花 ネブは樹の名。君のみ見めや 君は戲奴の主人の意で、すなはち作者自身をいふ

であらう。わたくしばかりは見ない。但し君を吾の誤とする説もある。戯奴さへに見よ その方さへ見よの意。

二〇一四六

○大伴家持 贈り和ふる歌二首

吾が君に 戯奴は戀ふらし 給りたる 茅花を喫めど いや瘦せに瘦す

【原文】 大伴家持 贈和歌二首

吾君爾 戯奴者戀良思 給有 茅花乎雖喫 彌瘦爾夜須

【題意】 前の、紀女郎の二首の歌に答へた家持の歌。

【口譯】 あなた様に、この奴は戀ひて居ると見えます。下さいました茅花を戴きますが、いよく瘦せに瘦せまする。

【釋義】 戯奴は戀ふらし 前の歌を承けて、自分のことを戯奴と稱してゐる。ラシは、根據ある推量の辭で、三句以下の事實を背景としてゐる。

吾妹子が 形見の合歡木は 花のみに 咲きて蓋しく 實に成らじかも

【原文】 吾妹子之 形見乃合歡木者 花耳爾 咲而蓋 實爾不成鴨

【口譯】 あなたの形見に下さつた合歡木は、花ばかり咲いて、恐らくは、實になりますまいか。

【釋義】 形見の合歡木は 別れの印として下つた合歡木はの意。咲きて蓋しく ケダシは、推量する意の形容詞

三〇一四六

で、その副詞形。實に成らじかも 實にならないのであらうか。

○大伴宿禰家持の春雉の歌一首

春の野に 求食る雉の 妻戀に 己があたりを 人に知れつつ

【原文】 大伴宿禰家持 春雉歌一首

春野爾 安佐留雉乃 妻戀爾 己我當乎 人爾令知管

【題意】 家持の、春の野の雉を詠んだ歌。

【口譯】 春の野に餌を求める雉子の、妻を戀うて鳴く音に、自分の居るあたりを人に知られて。

【釋義】 妻戀に 妻を戀ふ爲に。己があたりを 自分の居る處を。人に知れつつ 人に知られて、災禍を招くことよの意である。

【餘論】 志貴の皇子の御歌に、

麴鼠は木末求むとあしひきの山の獵夫に逢ひにけるかも(卷三、二六七)

といふと、似かよつた内容の歌である。恐らくはこれも譬喩する處があるであらう。雉子も鳴かずば撃たれまに」といふ諺と、同意の歌である。

○尼 頭句を作り 并大伴宿禰家持 尼に誂へらえて 末句を續ぎて和ふる歌一首

六〇一四四
春雉は神
田本等に
よる。

佐保河の水を塞ぎ上げて 植ふし田を尼の作る 刈る早飯は 獨なるべし家持續ぐ

【原文】 尼作^ニ頭^ト句^ク 井大伴宿禰家持 所^レ誦^ニ尼 續^ニ末^ニ句^ク和歌一首

佐保河之水乎塞上而 殖之田乎尼作 刈流早飯者 獨奈流倍思家持續

【題意】 或る人が、尼に、

手もすまに植ふし萩にや却りては見れども飽かず情盡さむ

衣手に水澁つくまで植ふし田を引板吾が延へ守れる苦し

の二首の歌を贈つたに對し、尼が上の句を作り、家持がこれに下の句を續けて答へた歌。この尼は誰とも知られぬが、一首の歌を纏め得なかつたのは、大伴家に寄食してゐた新羅の尼理願でもあつたらうか。

【口譯】 佐保川の水を塞ぎ上げて植ふた田を、刈る早飯は、獨で收穫なさるがよい。

【釋義】 水を塞ぎ上げて 川水を塞いで、田の方へ上げるをいふ。刈る早飯は 早稲を刈つて炊いだ飯は。獨なるべし ナルは業とする意で、收穫すること。みづから收むべしの意。何も、情盡さむだの、守れる苦しなどといふには當るまいと、弾き返してゐる。

【餘論】 この歌は、集中で連歌の唯一の例として注意されてゐる。しかし風流から出たわけではなくて、尼の不才ゆゑに、二人がかりで、漸くこね上げた歌といふべきであらう。意味のたどたどしい點のあるのは、若年の家持が、尼の上の句を受けて、強ひて内容を完結せしめようとした爲もあるのであらう。

○大伴宿禰家持 藤原朝臣久須麻呂に報へ贈れる歌三首

五六一六三
末句は大
矢本等に
よる。佐保
河は神
田本等に
よる。

春の雨は いや頻降るに 梅の花 いまだ咲かなく いと若みかも

【原文】 大伴宿禰家持 報^ニ贈^ニ藤原朝臣久須麻呂^ノ歌三首

春之雨者 彌布落爾 梅花 未咲久 伊等若美可聞

【題意】 以下三首は、家持が藤原久須麻呂の歌に答へた作。久須麻呂は、藤原仲麻呂（惠美押勝）の子で、參議從四位下で、左右京尹と丹波守とを兼ねるに至つたが、天平寶字八年九月、押勝の逆謀が泄れた時に、坂上刈田麻呂等の爲に射殺せられた。

【口譯】 春の雨は、いよく頻に降りますが、梅の花のまだ咲かないことは、甚若い爲でせうか。

【釋義】 いまだ咲かなく まだ咲かぬことは。いと若みかも イトは甚、若みは、若い故。カは疑問の辭。まだ若い故でかの意。

【餘論】 以下家持と久須麻呂との贈答については、三通りの解がある。久須麻呂の家に女子があるのに、家持が戀したのだと爲す説が一つ、これは代匠記、考、略解、古義、新考等の説である。久須麻呂が美少年であるに贈つたと爲す男色説が二つ、これは代匠記の一説と童蒙と口譯との説である。以上の二説では、以下の歌が自然に完全に説明し得ないので、家持方の女子に久須麻呂から云ひ寄つたのだと爲す第三の説がよい。これは萬葉集攷證の説である。それでこの歌では久須麻呂の來意を春雨に比し、春雨は次ぎて至れども、まだ梅の花は若いから咲かないと、尙早の意を以つて辭してゐる。しかしやがて年頃にもならば許さうとの意は、下の歌に見え、遂にその縁は結ばれたと見えて、卷十九に至つて、久須麻呂を掣と稱してゐる。(以上の考證は、小著上代國文學の研究一六七頁以下に記してある。)かくて家持は、押勝と姻戚となり、橘奈良麻呂の事件に連座せず

して、却つて後に押勝の失脚に伴つて左遷されたものと思はれる。なほこの歌は譬喩であるが、多分春雨は實景でもあり、梅の花は、久須麻呂からの歌に歌はれてゐたものであらう。

●七八七

夢の如^{いみごと} 思ほゆるかも 愛しきやし 君が使の 數多く通へば

【原文】 如夢 所念鴨 愛八師 君乃使乃 麻禰久通者

【口譯】 敬愛すべき君の使が度々通ひますのは、夢のやうに思はれます。

【釋義】 愛しきやし 愛しきは、愛すべくある形容。ヤシは助辭で、愛しき君と續く語脈である。君が使の 君は久須麻呂をさす。

●七八八

末わかみ 花咲きがたき 梅を植ゑて 人の言繁み 思ひぞ吾が爲る

【原文】 浦若見 花咲難寸 梅乎殖而 人之事重三 念曾吾爲類

【口譯】 枝先が若いので、花の咲きかねる梅を植ゑて、人の言葉の繁さに、物思ひを致して居ります。

【釋義】 末若み 生長する枝の若さに。梅を植ゑて 梅は女子を譬へてゐる。人の言繁み 久須麻呂から言ひ寄る言葉の繁さに。

●七九一

奥山の 磐蔭に生ふる 菅の根の ねもころ吾も 相念はざれや

○藤原朝臣久須麻呂の 來り報ふる歌二首

【原文】 藤原朝臣久須麻呂 來報歌二首

奥山之 磐影蘭生流 菅根乃 勲吾毛 不相念有哉

【題意】 前の歌と同じ事情で、また家持から久須麻呂に贈つた次の、

情ぐく思ほゆるかも、春霞たなびく時に言の通へば

春風の聲にし出でなば有り去きて今ならずとも君がまに

の二首に答へた、久須麻呂の作である。

【口譯】 奥山の磐の陰に生えてゐる菅の根の、ネといふやうに、ねんごろにわたくしも思はないで居りませうや。

思はずには居られませぬ。

【釋義】 奥山の磐蔭に生ふる菅の根の 以上は序で、次のネモコロのネを云ふ爲に根と云つてゐる。この菅は山菅で、麥門冬すなはち、龍の鬚といふ草のことであるといふが、疑はある。ねもころ吾も 慇懃懇切にわたくしも。相念はざれや 反語の語法で、相思はずありませうや、さうは無い、思つてゐるの意。

●七九二

春雨を 待つとにしあらし 吾が屋戸の 若木の梅も いまだ含めり

【原文】 春雨乎 待常二師有四 吾屋戸之 若木乃梅毛 未含有

【口譯】 春雨を待つとであります、わたくしの家の若木の梅もまだ苔んでをります。

【釋義】 待つとにしあらし 待つとにあるらし、待つとであるさうなの意。上のシは助辭で、強める意のもの。

若木の梅も 木の若い梅で、久須麻呂方にも若い女の居ることを語つてゐる。いまだ含めり まだ花が咲かず

【餘論】久須麻呂方の女子のことを云つて、家持の誘ひを待つてゐるやうな語氣が見える。押勝の政策が現れたものとして見ておきたい。

○瘦せたる人を嗤り啖ふ歌二首

石麻呂に 吾物申す 夏瘦せに 良しといふ物ぞ 鰻漁り食せ 反なり

【原文】 嗤_ニ啖瘦人_一歌二首

石麻呂爾 吾物申 夏瘦爾 吉跡云物曾 武奈伎取食_{反世}

【題意】 吉田老といふものは、字を石麻呂と云つた。いはゆる仁敬の子である。その老は甚瘦せてゐて、多く飲食するけれども、飢饉の人に似てゐるので、大伴家持がこの歌を作つて戯に嗤り笑つたのである。文徳實錄、嘉祥三年十一月の條に、興世書主の傳を記して、本姓は吉田氏、祖は吉田宜、父は石麻呂とあるによれば、仁敬といふは吉田宜の字で、石麻呂は、その子である。

【口譯】 石麻呂さんに申し上げる。夏瘦せによいといふものですよ。鰻を取つてお上りなさい。

【釋義】 夏瘦せに 今もいふ、夏は人多く瘦せるものである。良しといふ物ぞ 効があるといふ物であるぞ。鰻漁り食せ 鰻を漁して召し上げ。めせの反なり 食の字の読み方を注したものである。反は前にも出た。支那の反切の法に模したものである。

三三五

瘦す瘦すも 生けらばあらむを はたやはた 鰻を漁ると 河に流るな

右 吉田連老といふものあり 字を石麻呂と曰へり 所謂仁敬の子なり その人の爲り身體甚く瘦せたり 多く喫飲すといへども 形飢饉に似たり 此に因りて 大伴宿禰家持 いささか斯の歌を作りて戯れ啖ふことを爲せり

【原文】 瘦々母 生有者將在乎 波多也波多 武奈伎乎漁跡 河爾流勿

右 有吉田連老 字曰石麻呂 所謂仁敬之子也 其老爲人 身體甚瘦 雖多喫飲 形似飢饉 因此 大伴宿禰家持 聊作斯歌 以爲戲啖也

【口譯】 瘦せ／＼ても生きてあらばそれでよい。却つて鰻を取らうとして、川に流れなされるな。

【釋義】 生けらばあらむを 生きあらば、それにてもあらむをの意。瘦せても生きてをればそれでよい。はたやはた ハタを意を強くする爲に一旦疑つて、更に重ねていふ。又の強い意。却つて。やは、疑の辭。「みよし野の山の下風の寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む」(卷一、七四)

○平群氏の女郎 越中守大伴宿禰家持に贈れる歌十二首(六首略)

ありざりて 後も逢はむと 思へこそ 露の命も つぎつつ渡れ

【原文】 平群氏女郎 贈越中守大伴宿禰家持歌十二首

阿里佐利底 能知毛相牟等 於母倍許曾 都山能伊乃知母 都藝都追和多禮

【題意】 家持は、天平十八年に越中守に任ぜられて任地に赴いた。以下家持の越中守時代の生活に入るので、こ

漁跡、仁敬、甚瘦仁

三九三